
緋色の騎士は異邦人

間和井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色の騎士は異邦人

【Zコード】

Z9938M

【作者名】

間和井

【あらすじ】

『剣と魔法で召喚モノ』高校一年の秋、暁神 晓と高野 真夕美は登山中に他の一団とはぐれてしまい、どうにかして昨日泊まつた山小屋に戻るとしていた。その日、何者かの手によって、彼は異界に送られた。

は大凡主人公最強系になります。そう言った作品が苦手な方は、お手数ですがウインドウの戻るをお押し下さい（――）つついでに言つと、この小説は比較的ライトな小説です。そう言つたモノが苦手な方も、上記の方法をオススメします（――）

Ep.1・命令と解放（前書き）

なんとなく考えてしまつていた物語を、性懲りもなく投稿しました。
今回はキャラクター性に重点を置く事にしてみたのですが、如何でしょうか？

草木の茂る山道の中、高校生らしき男女が一人。大きな石の上で座っている。

「おなかへつたあ。ねえ、暁あなんか食べ物あ～
「いきなり何言つてんだよ。真夕美」

ボーッとしていた俺は幼馴染みの突然の要望に、一瞬ビックリする。

その後、「ちょっと待つてろ」と言つて俺は自分の背負っているリュックの中に有る数少ないお菓子を、ガサガサと音を立てながら探す。

お、あつたあつた。これならアイツも不満は言わねえだろ。

「ほい、これやるから少し静かにしてろよ？」
「おおおおおー！」、「これですかー？ しかもーーー？」
「ヘイヘーイ、解つてるねえー、お代官様～」
「ちよつ、痛い痛い？」

渡したお菓子がそんなに嬉しかつたのか、俺の横腹を肘でドスドスしてくる真夕美。これ案外痛いぜ？

ちなみに真夕美に上げたお菓子の名前は、『期間限定ーー！ 一瞬でリスに成れる飴ーー！』だ。コイツの好みは少々、と言つて大分変わっている。

俺もなんか食うか。えーと、あつたあつた、う〇い棒。げえつ、これ砕けてやがる。捨てるか。

そんな事を考へてみると、こきなり真夕美が不安げな声で呟くやうに呟いた。

「ねえ、これからどうするの?」

「そうだな、まずは昨日泊まつた山小屋を田舎そり

やはり不安でたまらないのだろう。さつきの妙に高かつたテンションも、きっと無理して上げていたのだろう。

俺達は高校の行事で登山に来ていたのだが、つい先程、先生達からばぐれてしまった。それに今は夕暮れ時。精神的にもきついのだ

うつ。

ちなみに、ケータイは圈外だった。

「それから、事情を説明してもう一度だけ止めてもらおう」

「うんっ、そうだね。」

「そうと決まれば、行動あるのみ。昨日の小屋だね」

「ああ、そうだな。行動あるのみ、だ」

今まで腰をおろしていった石から離れて、歩み始める。

「そうや、早く帰るんだ。」

早く小屋について、真夕美を安心させなきゃな。

「なんで? ビリして?」

ねえ、暁。何で私達、またここにいるのかな？　どうして、私達
帰れないのかな？」

不安げな瞳を俺に向けて、質問をする真夕美。けど俺はその質問には答えられない。なぜなら、俺自身がこの状況に打ちひしがれているからだ。

あれから、一時間が経過しただろうか。

今、俺達はまたさつきの石の前に居る。

見間違えはしない。俺の捨てた、う〇い棒の残骸と俺の書いた印がそこに有るからだ。

印はこれまでに向回かここに戻つて来た中で、数回前に付けたものだ。

これで計7回だらうか。ここに戻つてきたのは。

さつきは木に印をしながら、四角形に少しずつ進んでいく『スクエアサーチ』と言つ方法をとつていたから絶対にここに戻つてくる事は無い筈だと言つのに。

何故、どうして、なんてことは言つていってもなんの意味もない。原因の探索をしよう。まずは、

「真夕美、まずははじめに落ち着こう。さあ、息を吸つてー、吐いてー。吸つてー、吐いてー」

「え、う、うん。　スー、ハー、スー、ハー」

いつも通りに戻そづ。

「ハイツ、そこでラマーズ法！」「ヒッヒッ、フー。」

……って、何でラマーズ法なのぞ!—』

突つ込みと共に飛んでくる小さな石の群れ。

「フツ、俺とお前、いつからの付き合いだと思つてんだ?』

そう小さく呟いて、石を避ける俺。まあ、10年以上も一緒に居れば、こういう物も慣れてくると言うもんだ。

そう思い、最後の一際大きな石をよけきった時、バキッという音がして、
そして

「——ハハハハハツ!—」『

そして、高笑いと共に、大量の黒いナニカが現れた。

『人間だ、人間が2匹いる』

何処に?

俺達二人の周り、四方八方に。

『男と女だ、女は俺達を解放してくれたぞ』

何処から?

感覚としては、音のした方向から。

『感謝しよう、感謝しよう』

如何して?

多分真夕美の投げた石がナーナーを壊したから。

『でも、どつちも美味そつだな』

「こいつ等は、ナーナー？」

解らない。けれど、このナーナー力は完全に俺達に敵意を向けている。

『そりだな、ウマソウダ』

それなら、如何する？

そんなの、決まってる

「真夕美ツ！」

『『『『『な、ひ、』』』』

「何？ 何？」と言つ真夕美を、周囲から隠すよつにして腕に抱いて、

「お前は俺が…………！」

『『『『『喰ツチマオウ』』』』

守る。

そう言おうとした瞬間、劫火に包まれた妖しき怪物が目に映り、俺の意識は断線した。

「真夕美ツ！」

何？ そう思つた時には、暁は私を抱きしめていて。

「お前は俺が」

抱きしめる力が強くて、痛いと思ったその時には、彼の全身は消えかけていた。

‘喰われる’とか、‘引き裂かれる’とか、‘貫かれる’とかそういうのじや無くて、『消える』なのだ。

彼には何かが見えていたのか、私の名前を呼んだ時に愕然とした顔をしていた。

そんな顔が最初に浮かんで、それから先はいくつもの楽しかった事、悲しかった事、これまでの人生の大半の物事が、私の脳裏を一瞬のうちに過ぎ去つていった。

「そ、走馬灯？」

一つの不吉な単語が、私の脳裏をよぎつた。
体中から、嫌な汗が流れ出る。

私の上には、幼馴染みの身体が重なつて、それが段々と消えて行く。

彼を消し去るとする者は何なのか、とか、何がどうしてこうなつたのだろう、だとか、そういう疑問はどうかへ消し飛んでしまつていた。

「暁、アキラア……！」

私の口から漏れ出でてくる嗚咽。涙腺から溢れ出でる涙。それは止める事が出来なくて……

ただ消えて行く彼の身体、その身体には、まだ生物としての温もりが残つている。今まで私の拠り所だつたその存在は、今尚消え失せて行く。

そんな中、周囲が、邪悪な気配に満たされた。

「な、……何！？！」

彼が居なくなる、そんな思いに駆られ、消えゆく彼を抱き寄せる。

その瞬間、邪悪な気配は、清らかな火にかき消された。

私と暁を取り囲むようにして、燃え盛る蒼い焰。
それと共に、ナニカが私に語りかけた。

『無事ですか？』

その声は優しく、けれど厳かに問いかける。

「……私は大丈夫、だけど暁がッ！ 暁がッ！－！」

喉がカラカラで声は出し難かったけど、それでも必死に声を出して、

「暁を、助けて下さいッ！－！」

私はその存在に、助けを求めた。

目が覚めると其処は、見知らぬ神社の中だった。

俺 昼神 暁はどいつやうりどいかの神社の一室で寝かせられているようだつた。

寝かせられている布団は少し硬い。

「痛ツ」

身体を起こそうとすると、全身が痛みに軋む。痛みが妙に大きい。それにどこか感覚も鋭利になつていて気がする。

少しだけ無理をして上体を起こし、周囲を見回す。

「ここは、どこなんだ?」

口を吐いて出たのは、そんな言葉。

俺は神社になど来た事がない。当然そう言った所に知人なんていないし、ここがどこで、なぜ寝かされていたのかが解らない。

周りを見ても、簡素で殆ど何もない。神社だと解った原因はほんの少し開いた扉から見える、赤と白の絡まつた形の綱が見えたから。（あれはきっと、鈴の奴だろう）

どうしようもない状況に、溜め息を吐く。

「……ハア」

『知つてます？ 溜め息すると、幸せが逃げちゃうんですよ』

突然、後方から聞こえてきた声。それに反応して振り向こうとす

るも、痛みで後ろを見る事が出来ない。

「コイツは何者だ？」

「何だお前。どこから出てきた？」

『そこいら辺から、湧いて出てきましたよ』

「何を言つてる？ アンタは誰だ？ ここはどこだ？」

それと……真夕美はどこだ！？

俺の疑問に、訳のわからない事をぬかす何者か。

まあ、コイツどこから出てきたかなんてどうでもいい。

まず必要なのは相手の情報と、自分の現在位置と、守るべき者の安全！

そう意気込んではいた俺の言葉は、流れる水かもしくは柳の葉のようにして、正体のわからぬ存在に受け流された。

『私は和ぎる神の一柱。名前は、訳あつて言えません。

真夕美さんはそこに居ます。ここが何所かとかは、彼女に聞いて下さい。あと、話が終わつたらこの部屋を出てきて下さい。貴方には、やつてもらつ事があります』

そして、俺に吉報を運んでくれた。

「暁、大丈夫？」

「……真夕美」

俺たちが両者の名を呼んだ時、既にアイツの気配は消えていた。

会話をして教えられたのは、俺は一度死にかけたと言う事実。
それは封印されていた筈はずの多くの妖怪が解き放たれ、そして俺達に食らいついたからだと言う真実。

そして封印が解けたのは、俺達ホコラがアノ石の周囲を円形に回り続けて最後に石で、神木で出来た祠ホコラを壊してしまったからだと言う情報。この話が終われば、俺はどこか見知らぬ場所（いや、世界だつたか？）に飛ばされる、と言う未来。

「お前、それ本気マジで言つてる？」

当然、こう反応するしかないだろう。

「わ、私だつて信じらんないわよ！だからその憐れむ目はやめて！」

俺の冷やかな視線に何かを感じたのか、頬ほおを膨らまして怒りだす真夕美。

まあ、そういうのな。

「で？ その話が本当マジだとして、何で俺はここにいるんだ？」

大体解つている事を聞く。

その顔は眞面目に、真っ直ぐ真夕美の目を見つめて。

「それは、さつきの声の誰かが、暁が消えそうになつた時に突然出てきてね、ビックリしてたらいつの間にかここに居たの。

けど、その後あの声の人、どうやつたかは解らないけど暁を治してくれたんだ。だからきっと悪い人じゃないと思う」

方法は解らないか。だが、声の誰か？ 真夕美には見えなかつたのだろうか。

治してくれたのはありがたいが、どうやって？ 疑問は尽きないが、今は話を続けよう。

「そつか、じゃあ最後に

「

言葉を口にしながら、軋む身体を無視して布団を抜け出す。
この話が終わって外に出た時、きっと俺はこんな事言えないだろ
う。

そう思いながら扉を開けて、振りかえる。

「俺さ

「

精一杯の、作り笑顔を行つて、

「約束、守れたかな」

最後の言の葉を世に放つ。

今、俺は円を基本にした幾何学模様の上に立つてい
きかがくもよつる。

『送るよ』

俺を治した奴が言つ。

それに頷くと、そいつはなにかを呪文らしきものを唱える。

すると、幾何学模様の一一番外の円形が蒼色に発火して、俺の周囲を包みこんだ。

空を見上げると、其処にも蒼い焰モードが出現していた。その隙間から視えた星空は、どこか悲しげに星を落とす。

「流れ星、か……奇麗だな……」

俺がこれから向こうに行つても、真夕美が不幸にならないよつて、願つておくか？

いや、やめておこう。そんなのはもつ、アイツ一人で出来る筈だから。

『異界の神よ、今、我が神代たる客人を、貴殿等の守る世界へ送ろ
う』

思考の最中、そんな声が聞こえると、地面に孔あなが開くよつにして扉が開いた。

それは、円柱形を成す混沌のトンネル。

反転する光と影、引力と斥力。

ここは**真空**の海の中。もしくは**生命**の樹の上。

潜り抜けるその中で、流れるように変わる視界。

遙か古に交わされた契。

どこか心の奥底で、強烈な衝動が蠢き出す。

視線を奪つ多くの望み

欲しいと言う欲望、叶えと言ひ願望、どうせと言ひ絶望、
と、と言ひ希望の果てに

‘朱イ光景’^{アカケシキ}が、見えた気がした。

瞬間、下の方に出口が出来上がり、歪みの中から排出される。
勢いは無く擬音で言つならば、フワリとでも言つよつた軽々で俺
はその地に着地した。

其処は所謂**幻想郷**。俺をここに送り込んだ奴が言つには、ここは
一柱の神の夢の世界なのだと言つ。

俺はそこに現れる魔王と勇者の物語に関与して來い、そう伝えられ
た。餞別に一つのモノ、一つは何だかよく分からぬ指輪、もう
一つはこの世界でも生き延びれる体力をくれると言つていた。

神の夢。それは**真実**、**幻想的**だ。

ゲームや物語の中の世界。だからここでは**魔術**も、**魔物**も、**神様**

なんてモノまで何でも有りなのだと呟つ。

けれどこの世界では、これまでの世界で呟つ所の、自然、のよう
に、そつあるべき姿、そつするために働く世界の修正力なんてモノ
があるらしく。それは魔術やなにかで、そつあるべきモノを強引に
変えてしまおうとした時に働くらしい。
本当に、現実リアルじゃない。

「で、ここはどこなんだ？」

一応今まで考えていた事がまとまり、思つた事を口に出す。
当然、返事は返つてこないだろう。

そう思つていたから、背後からの声に驚いた。

「ijiはエルキオン。アルタイル王国首都、エルキオンだ。こんな
夜更けに何の用だ？ 違法侵入者」

首筋に添えられる刃物の気配。

ヒンヤリとしたそれは、俺に濃厚な死の匂いを連想させた。

「まずは手を広げて後ろへ回せ。不穏な行動をとつたら、その瞬間
貴様の首をはねてやる」

「ハ、ハハ……」

もう笑いつときやネ。何だこの状況。

言葉に従い、手を後ろに回す。

すると、ガチャリと言つ音と共に、全身に少量の怠惰感が覆いか
ぶされる。

「魔力も手の自由も奪わせてもらつた。」あらを向け、顔を確認する

魔力を奪つ、と言つ事は俺にもそれがあると言つ事だらう。怠惰感は少ないから、量は多いと言つ事なのだらうか。

死の恐怖にカラカラになつた喉を、無理やりに唾を飲み下して潤す。

覚悟を決めて、身体を後ろに振り向かせる。刃物はまだ首に突き付けられている。

すると、そこに居たのは自分と同年代の女の子だった。
来ている服は青色の豪奢なドレス。そして少女の姿は、それにも負けない程美しかつた。

背中の中ほどまで伸ばした金糸の髪に、透き通るような白磁の肌。
小さな顔のその中に、2点だけ小奇麗にじょこんと配置された翡翠の瞳。

その瞳の中には、呆けた顔をした俺が映つていた。

「オッドアイか……。禍々しい黒き右の瞳に、燃え盛る炎のよつて
赤き左の瞳。異邦人か……？」

だが、そうと決まつた訳では……」

眉間にしわを寄せ、顎に手を当ててぶつぶつと呟く少女。

オッドアイ、それは人間が持つ目の虹彩の色がそれぞれ色違いである事を言つ。

この少女は、俺に向かつてそう言つた。要するにそう言つ事なのだろう。この少女からすれば、俺は突然現れた妖しいオッドアイの少年。と言つた所か。

警戒されているであらう」とを承知で質問をする。

「なあ、君? こいつてどういつ建物の中?」

そう、先程きずいたが、こじは何か建物の中らしいのだ。
きちんとみれば、足元には石畳。壁も石造りで、そこには大きな
幾何学模様。まるで召喚か何かをしていたかのような程に大仰な儀
式の陣。

「こじは城内に有る、神官の『祈りの間』だ。こんなとこに侵入
して、しかも神官を氣絶させておいて、いけしゃあしゃあと……」

「神官を氣絶? ビツビツ事だ?」

「それ見ろ」

少女が指をさす。

その先には、石畳の上にヨダレを垂らしてだらしなく寝る白服の
男達が数人と女性が数人。男の一人は「もう、辛抱たまりません:
……」なんて言つてる。おい、なんの夢見てんだ。

「ハハ……」

言いつつ頭をかこいつとするも、手錠の所為で出来ない俺。
予測すると俺を送りつけたアイツが召喚場所に此処を選び、その
際俺が現れる時に起きた何かの所為で気絶したのだと思うのだ。が、
なんでいい夢見てんだアイツ。

ほり、この娘も何か察知したのか顔を真っ赤にしてるし。よく見
ると可愛いな。この娘。

「い、行くぞ」

「ちょっと待った。行くってどー?」

嫌な予感を感じつつも、一つ質問する俺。

「何をたわけたことを。牢屋に決まっているだろ。性犯罪者」

やつぱり? つて、いつの間にか違法侵入者から性犯罪者にランクダウンしてる!?

それ俺じゃ無くな。あそこには寝てる一人のエロ神官じゃね!?

なんて事を言えるはずもなく、俺はおおよそ妥当であろう言葉を発する。

「何で? 俺はここに送られてきたんだ。その神官なら多分解る筈だ。俺はこことは違う世界から来たんだ」

自分で言つて信じられない言葉を口にする。

言つてる自分が正気かどうかを疑いたくなる。わざとあの時の真夕美もこんな気分だったのだろうな。

「何? どう言つ事だ……?」

私はこの部屋から突然魔力の反応があつたから来たと言つたのに……

…

ひとり言を言う彼女。

俺にはよく聞こえないが、情報の分析かなにかでもしているのだろ。かなり真剣な顔だ。

数秒して、「よし、解った」と言つ彼女。何が解つたと言つのだろう。

「私はその情報の裏を取ろう。もし逃げられでもしたら私が困る。一応は高速の為、倉庫に居てもいいんだぞ」

「そうかあ、倉庫か」

数回の会話で直ぐに俺への対応を決めた彼女は、俺を引き連れて移動する。

彼女の『言つ』『祈りの間』を出ると、外に出た。

ほんの一瞬だけ空を見上げると、見えたのは広大に広がる星の海。

「ああ、本当に、いいはとても奇麗だ」

空に目を奪われた俺の口をついて、そんな言葉が漏れ出る。

ここで俺がしなければならない事を思つと気が重くなるが、この空を見る事が出来るのならそれもまた良いのではないだろうか。心のどこかに、そう思つてゐる俺がいた。

眼下には、延々と続く漆黒の大地。
頭上には、煌々（ヒラヒラ）と輝く紅き星月。
そして、中空にて浮遊する俺。

「なんだこれ」

大きな疑問を一つだけ、小さく漏らす。
確かに、俺はついさつき倉庫に連れてこられて、不要物と一緒に寝
ていた筈じやないだろ？

一人考えていると、右下から返答が返ってきた。

『ijiは、貴方の精神に内在する世界から、表層だけ切り取つて
きたモノ。まあ要するに、心象風景つてやつですね』
「なんか簡素だな。俺の中とやら」

何だか軽く会話してるけど、コイツ誰だ？

そう思いつつ見ると、淡く発光する四等身の人影が、俺の右腕付
近でグルグルと飛んでいる。

それは美しい少女だ。目も髪も黒色のその少女は、正反対に純白
のワンピースを着ている。ワンピースの背には単語が一つ「精靈」
と書いてあつた。

元が良いだけにその単語が少し残念だ。

「精靈？」

『よく分かりましたね。自己紹介もしたいですが、まず始めに一言。
第一試練、幻想種の認知、合格です。視覚的な情報は問題無さそ

うですね。（……まあ、あの世界でもこの才能は有つたようですし、当然ですね）』

思い出した。

これは俺をこの世界に送つた奴が言つていた、潜在能力と魔力を覚醒させる試練とやらだ。

幻想種つて言つのは、おおよそ基本的に前の世界で存在しないと言われていた生物達の事だつ。今回のはきっとこの精靈さん（仮）がそのターゲットなのだろう。

その試練は俺に一人の精靈を永続的に憑けて、その精靈に数回行わせると言つていた。それはきっとこの精靈さん（仮）の事だらう。試練の内容はその精靈が決めるとも言つていたし、俺の人間性とかもその試練で調べると言つたいだ。

『では自己紹介です。私は精靈、正式には彼の地を守る神の御使いです。名前は有りません』

喜々として自己紹介をする精靈さん（仮）。名前がないって言つのは、寂しいだろうな。

これから長い時間一緒に居るのだろうし、名前がないってのは不便だろう。

『俺は暁。暁神。暁だ。』
お前は名前ないんだよな？ これからずっと一緒に名前がないくてのは不便だろ。名前、俺が付けてやるよ』
『えつ……！』

俺の一言に、『でも、そんな……』と顔を真っ赤にしながらボソボソと言つていたが、まあそれは無視だ。

精靈、黒髪、ワンピースに…… etc。色々と考えてみる。

「まあ、よく考えてからだけどな」

今の所は出てこないため、次回にじょうづ。つふ。

『あ、はい』

俺の一言に少し呆けている精靈さん。

少しして、思いついたようにこんな事を言い出した。

『そ、そうだ。第一試練がありました』

「第一試練?」

『そうです。わたくしの確認のための試練でしたので、漸く能力覚醒です』

「ああ、そうか。本題はそれなんだっただな」

『はい。能力覚醒には時間がかかりますんで、少し待つて下さいね』

そういつと、彼女は俺の胸元に飛んできて俺の胸に両手を当てた。

関係の無い話だが、俺は基本的に真夕美以外には母意外に女性との関係性が希薄だ。

そんな俺がデフォルメされてるとは言え、美少女に身体接觸を長時間続けていたらどうなるか、と叫びつと、

『アキラさん。心音が大きすぎです』

いつなる訳だ。

自分でもおかしいと思つほど、心拍数が上がつている。

それをどうにか抑える為に精神統一。

視覚を遮断、聴覚を遮断、嗅覚を遮断。頭の中を、空っぽにする。
思考を停止、運動を停止、心をどうにか落ち着ける。

そうやつていると、精靈さんが口を開いた。

『準備が整いました。目を開けて下さい、アキラさん』

それに従い、俺は精神統一の為に閉じていた瞼を開く。

「ハイ？」

眼前には、禍々しい玄い業火に包まれた、三つの首の狗が居た。

『アキラさん。これからこの地獄ケルベロスの番犬を跪かせて下さい』

笑顔でもの凄い事を言い出す精靈さん。あれ？ いつの間にか場所遠くね？ 「イツ、確信犯だ。

小さな精靈の後ろで、凶悪に唸る二頭狗ケルベロス。絶対無理だろ。

駄目でもともと、まずは言葉で試してみよう……。

前方に顯現している凶惡な生物に、手をかざす。
そして、口を開き、一言。

「……おわり」

まあ、無理だよなあ。化け物相手に大扱いとか、どうすつかな。
魔王と勇者に関与とか、特殊な能力なしに出来る訳ねえだろうし、
これからどうすつかなあ……。

「クウン」

考へてこると、犬の鳴き声。

『「へ？」』

場違いな泣き声に、一瞬時間が停止する。

驚いていると、ケルベロスが跪き、俺を見て尻尾をぶんぶん振っている。

俺と目が合つと、その速度は一気に三倍くらいになり、「「「ワ
ンツー！」」と入吠えして、粒子になつて消えて行つた。

『「どう言つ事？ そう簡単に、従える訳が……
「なあ、これってどうつ事？」』

思考を開始する精靈さんに、俺は一言質問する。

『「多分、合格で良いと思います。それと、これで今回の試練は終了です。では、またいつか
「ああ、またな」』

言いつつ、疑問を残している様子の精靈さん。
次の時には名前を考えておひづ。と思ひ。

『「あ、言い忘れましたが、私は指輪に宿る精靈です。話しかけたり、
魔力を込めたりすれば顕現出来ます』

ついさうとした意識の中、そんな言葉が聞こえてきた。

田を開くと、右手に付けていた指輪が、淡く輝いていた。

「わたりびと
異那人よ、名はなんと申す
「アキラ
曉です、ヒルガミ
暁神 暁」
アキラ

俺は今、アルタイル王国の国王と面会をしている。
国王は玉座に座り、俺は床に跪いている。

何故かと言うと、この世界において何らかの事情があつて世界間
移動をしてきた人間を異那人と呼び、勇者に近い扱いをされている
とのことらしい。だから今は今後の俺の扱いについて決めている。

「本題に入るが、貴殿はこれからどのように行動したいのだ?
「そう、ですね……」

「この世界での俺のすべき行動は、勇者と魔王の物語に関与する事。
ならば……

「この国に、勇者様はいますか？ もしくは英雄？」

「大凡おおよそいるのだろうとは思いつつ、疑問を口にする。

何故そう思ったのかと言うと、この国は王が騎士をやつしている程、
騎士の割合が多い騎士国家なのだ。例えるならばアーサー王と円卓
の騎士のようなモノだろうか。

だから勇者はおらずとも、ほぼ必ず英雄はいるだろうと思つたの
だ。

「勇者は居らぬが、英雄ならば、我が軍の兵一人一人が英雄だ」
「そう、ですか。では、その英雄の中から一人、私に戦闘の仕方を
お教えただけの方を選んではいただけないでしょうか」

それは、自らの治める国を信頼する者ならば、当然ともいえる答
えだ。

ならば一人一人も当然高レベルな戦闘技能を有している筈、だか
ら俺はその誰かにその戦闘技能を学びたいと思つ。

「それは、アキラ殿がこの国に腰を据えると言つ事で良いのか？
それとも短期間だけ教えると言つ事か？」

「後者です。私は向こうの世界の神に使命を与えられました。その
使命を全うするためには、どこかで必ず戦闘に成る事が予想られる
のです」

俺は思つ。

勇者と魔王、それは相容れぬ光と闇。対極の存在であるが故に、
理解し合い、理解出来るが故に対立する者たち。要するにそう言つ
事だ。

勇者と魔王は必ずと言つていいほどに、死闘を繰り広げる者たち
なのだから。

「良からぬ。だが対価は支払つてもらつぞ」

「はい、覚悟しています」

「ならばよい。まずは昼に力試しでもしてもらおうと思うが。近衛
兵、アイリスに昼までに闘技場に行くように伝えてくれ。

では異那人よ。昼まで自由にして居てくれ。場内の見学などはど
うだ？」

「はい、では失礼します」

どうせ今日の俺に予定は無い。昼まで何をして暇をつぶそつか少
し迷うな。

「」の語の行動に想いを馳せながら、俺は玉座の間を後にす。

結果的に、俺は今人気のない城の裏門付近に居る。

時間は9時半ぐらいの、丁度いい感じの気温の時間帯だ。

少し日陰になっている「」は、俺にとつて大分居心地がいい。

こんだから、あまり女性との関係が宜しくないのだろうか。俺はいつも話をする女を怒らせてしまつし……

閑話休題。

話を元に戻そう。

俺は今、裏門の所で昨日手にした能力とやらの練習をしている。何故かと言うと、出来れば人に見られて知られる事は避けたいからだ。ここの人たちは俺の情報をほぼ何も持っていない。情報とは武器だ。出来れば与えないようにしようと思つていてる。

ん？ 門番？ 一人いたけど、今は倉庫に数冊あった女が表紙の本を渡したら、見なかつた事にして置くと言つていた。
うん。やっぱ人間の三大欲求つてすごいな。

まあ、それはいい。今の問題は俺の手に入れた能力だ。俺の手にした能力は概念的干渉能力、獄焰ごくえん、と言うものだ。

あの精靈を名乗る彼女が今朝、俺の前にいきなり現れて言つていたが、この能力には三つの特性があるとの事。わざわざ精神世界を惹き出さなくても、顯現は出来るらしい。

一つは、『発火炎上』と言う特性。これは前の世界における炎を持つ効果を、魔力を使って発現させる。と言つ代物。

精神力って言うのは良く分からないが、要するに灯り暖房に関して困る事の無い便利能力、と言つた所だつ。

これは右手に集中して「燃えろ」と念じる事で黒い炎が掌から上がつたので問題はなさそつだ。発火する瞬間、少し変な感覚が有つたが、多分アレが魔力の使用なのだろう。

次に、『侵蝕』と言う特性。これは手に持つたモノに魔力を流し込み己の属性に染め上げ、能力を付加すると言う特性。外見的にも侵蝕を行うと変化が起こるらしく、まだ練習していないためそれが少し楽しみだつたりする。

最後に、『概念破壊』と言う特性。これは、そこにあるモノを物質的にではなく概念的に破壊するもの。らしいが、今の俺には良く分からぬため練習の仕様がない。

基本的には能力と言うのは殆どの人間に有り、一つだけの特性を持つてゐるらしい。勇者や英雄となると二つと言う事も偶たまにあるらしいが、三つもの特性を持つ能力は規格外チートなのだと云つ。これはまさしく規格外性能。

それはさて置き、俺は今現在浸食の特性制御の練習をしてゐる。

「手に持つて、魔力を流し込む。だつたか」

手にしてゐるのは、倉庫から拝借した両刃の短剣。刃の長さが8センチほど、そして柄が7センチ程度の計15センチの装飾の無い質素な短剣だ。

その短剣の端と端をを両手でしつかりと持ち、それに意識を集中させる。

集中が臨界を超えるかと言つその瞬間、脳裏に一つの言葉が浮かんだかと思うと、知らぬ間に口にしていた。

「‘喰らえ’」

流し込むと言つより、包み込む感覺。

『侵蝕』とは良く言つたモノで、確實にそれは的を射ていた。

外側から少しづつ、徐々に徐々に浸み込んでいくような感覺。前の世界の感覺で言つならば、食べ物をゆっくりと咀嚼していくかのような感覺。

それが終わつたかと思うと、俺が手にしている短剣は鈍く発光して形状を変化させた。

大きさはそのままに、刃の形は日本刀のような片刃、色は黒曜石の如き美しき漆黒。柄は生きた人間の鮮血で染めたかの如き妖艶な真紅の柄に変わり、柄と刃の中間に位置する鐔^{つば}はまるで昨日見た三頭^ケ犬^{ルバロウ}の吐く獄焰をそのまま固めて鐔にしたような禍々しさを放つている。

かかつたのは数秒、これなら少しづつ速度を上げる事ぐらい出来そうだ。

強そうだけど、なんかこれどっちかって言つと暗黒騎士^{ダークナイト}とか悪役が使ってそうだな。

考えていると、先程の衛兵の男が俺の持つ侵蝕後の短剣に興味を惹かれたらしく、俺に話しかけてきた。腐つても戦士と言つ事だろうか。

「おっ、兄ちゃん。それは何なんだ？」

「これは俺の能力の產物です。あつ、これも内密に頼みますよ？」

「そんなこたあ、言わなくつても解つてゐるぜ。なあ兄弟！」

「おう、俺らの救世主の不利益になるような事はしないさー。」

練習を許してくれた一人に、俺は一言釘を刺したが、その必要は無かつたようだ。

ガツシリと肩を組み言つ二人。

手には先程渡した本を握りしめ、鼻から鼻血を流しかけている門番一人。

「じゃあ、そろそろ時間だと思いますんで、俺はもう行きますね」

上空の太陽は、もう直ぐ真上に来ようとしている。

俺は侵蝕により変化した短剣を俺の寝ていた倉庫に隠し、そこいらに居たメイドさんを捕まえて闘技場を田指すのだった。

A E p1 ; 『葬送の後』（前書き）

これは、時間軸的には第一話の直後のお話です。
彼女と彼の幼い頃。
どこか危うい二人の関係性、的なモノです。

「俺さ……、約束、守れたかな」

私は 高野 真夕たかの まゆみ美は、彼の言葉に愕然がくぜんとしていた。
それは、もう忘れ去られたのだと思っていたモノ。
私の心に、深深く刻まれた、幼少の記憶。

当時の歳は、二人とも七歳前後。場所は、町はずれの廃工場。
中には、段ボールで粗雑に造られた部屋や机。
其処は私達一人の、秘密基地だった。

「おい、お前等ここに居る筈のガキどもどうにかしろ！…」

一人の少年の命令に、はい！ と良い返事の男達五人。
こいつ等みたいなのは何故か私達の秘密基地に毎回来るけど、私
達はそのたび追い返してた。だから、今日もそうなるんだって思つ
てた。

けど、その日は何かが違つてた。

振るわれる暴力、鳴り響く鈍い打撲音。

それにさらされているのは、彼一人。

彼は私に、隠れている。そう言って男達の背後に走りだした。武

器は一本の鉄パイプ。

いつもの奇襲のおかげか、二人の男は倒す事が出来た。そして彼は、いつも通り隠れて何回も奇襲をする筈だった。

けれど、一回目の奇襲の後、彼は少年に見つけられてしまった。

その後は、身体の大きな大人と七歳の少年だ。力の差は歴然。殴られるしかなかつた。私はそれに、腰を抜かして隠れ続けるしかなかつた。

いつもは大丈夫なのに、何で今日は。何で。

耳を塞いで、彼が傷つく音から逃げながら、ただただ、そう考える事しかできなかつた。

それは隠れていた報いだつたのか、私は、見つけられてしまつた。またしても、あの少年に。

私は怯えた。殴られる事に。

彼が言ったことを、守れなかつた事に。

それまで彼を一方的に殴つていた男達の一人が、私の方にやつて来る。

私はやはり、腰を抜かして動く事もままならない。

その時、私は間違いを犯してしまつた。

私の口は、恐怖により勝手に一つの言葉を紡いでしまつた。とても小さなその言葉は、しっかりと放たれた。

「助……けて」

届くはずの無いその言葉は、彼に届いてしまった。
今も男達に殴られ、満身創痍の彼に。

彼は私が助けを求めたのと同時に、私の元へと駆けだした。
一種の盾の様にして、彼は私を隠すようにして男の前に立ちはだ
かつた。

殴られても殴られても、彼は立ちあがつてしまふ。

私は、ずっとずっと泣いていた。

彼が立ちあがつてしまふ事に。殴られる彼を見なければならない
事に。

そんな時間が、何十分続いたらどうか。

少年が叫びました。

「もう良い！ キリがねえ！ 他を当たるぞーー！」

男達は彼の言葉にしたがつて、どこかに走つて行つた。
その瞬間、少年の額に角が見えた気がした。

少年と男達が立ち去つて、私と彼は一人だけになる。
廃工場の中、鳴り響く私のすすり泣き。

彼はそんな私に、こんな言葉を吐いた。

「俺が、真夕美を守るから。だからお前は、そんな顔しないでくれ
よ」

「うん。解つた。解つたから、一緒に帰るわ……！」

私は、またしても間違つてしまつた。

彼の言葉に、肯定を表してしまったのだ。

傷だらけの彼を帰らせるために。彼は私がうんと言ひ今まで、其処を動きはしなかつたから。

それが、幼少の記憶。

彼はそんな約束を、今でも守つていた。

中学の三年間。私達は口を効かなかつた。理由は簡単、彼に私を嫌つて欲しかつたから。そうすればきっと、彼は無茶をしないと思つてた。

けれどそんな空白の三年も、彼には意味がなかつたようだ。

私は、また間違つてしまつた。

そう思うと、涙腺から流れ出す涙。私は、大粒の涙を流していた。

「守れた。守れたよ、^{アキラ}暁」

私は、三十分くらい神社の中に居ただろうか。

『真夕美さん。これからやる事は解りますね』

「はい、私達の解放した。妖怪退治」

未だ流れる涙を拭いて、私は神様の質問に答えた。

解放したのは私、神様が言うには、暁はその大本の神様の見る夢

をどうにかする事になつていたらしいのだ。

神様は、私達には特殊な能力おからが有ると言つていた。

暁は、滅ぼす力。

私は、維持する力。

それは、きっと刃と鞘さやの関係性。

『では、行きましょう。彼の事を思つてゐるのなら、妖怪退治これが一番の近道です』

彼の身体を喰つた妖怪たち。

それを倒せば、彼の力が増すのだそうだ。

「はい……」

今のは、どこか不安定。

私はきっと、彼を魂ヒュウガの底から求めてゐるのだ。

丁度私の心に收まる、暁かれと叫タマシイう存在を。

A E p.1 ; 『葬送の後』（後書き）

読んで下せこまして、誠にありがとうございます。――

感想など下せると、作者の励みになります。
要するに執筆速度が急加速します。

この事で、私はいま感想とか渴望中です。誰かいつか感想を
下せこませーー！

Ep6・魔力無双と瞬速移動（前書き）

今度、真夕美Hペソード書いてみよつかな、なんて思つ今日この頃。

今回は少量戦闘シーンを含みます。
解りづらかったりしたら、」」指摘お願ひします。

今、俺達は広々とした闘技場に居る。達の中には、当然の如く使人や国王が居る。

そして場違いにも昨夜の美少女が、目前に立っていた。

「昨日は本当に済まなかつた、異那人アキラ殿よ。重ねがさね、申し訳ない」

「いや、俺それは気にしてないからさ、早速力試しだつけ？ 初めてくれよ」

申し訳なさそうに俺を見て言葉を放つ昨夜の美少女さん、もといアイリスさん。彼女は聖騎士でも有り、この国の第一王女でも有るらしいのだ。

昨夜彼女が俺に刃物を突き付けてきたのは、俺が魔術を使ってこの王都に不法侵入をしたのだと勘違いをしたかららしい。

俺がどのような存在か確認をしようとしたが、現場に居た神官たちは何故か朝まで起きる事は無く、危険な可能性のある俺を放置するわけにもいかず、かといって無罪の可能性のある者を牢に入れるのは気が引けるため、そのまま今朝まで俺は倉庫で寝ていた訳だ。

そのおかげで、能力の覚醒も出来たし今の所、その事を俺は気にしているない。

それに彼女は大分奇麗な方に入るし、この国のトップに成る可能性のある者が頭を下げている所など、騎士たちも見たくはないだろう。今もほんの少し憎悪の視線が痛いし……

まあ、刃物を喉に突き付けられるのは今後ゴメンこいつむりたいが。

「そうですか、ありがとうございます」「いや、どういたしまして。じゃ、じゃあ始めようか」

とたん笑顔になつたアイリス王女。その笑顔は反則だと思います。口調がいくらか砕けた感じになつたのは、俺が気にしていないと言つたからだろうか。

今の自分の心境を誤魔化すために、力試しの開始を願う俺。

「はい。ではまず、得物を決めて下さい。」

私の得物はこの戦斧ハルバートです。アキラ殿、貴方は何にしますか？ アキラ殿、どうしたのです？」

嬉しそうにして、笑顔で三メートル以上の戦斧ハルバートをどこかから取り出し、軽々と片手で振りまわすアイリス王女。当然刃や殺傷の原因になりそうなモノはつぶされて丸くなっている。でもなあ、ヒュンヒュンいってるしな、当たれば多分骨の1、2本は折れるんだろうなあ。

眼前の王女様の姿に、俺は口をポカンと開けてる。あの細腕にどんな馬鹿力が……

俺が口を開け放つてると、アイリス王女が話しかけてくる。

「あつ、そうでした。アキラ殿は、門ゲートの魔術は知りませんよね。いきなりこんな大きなモノが現れたら、流石に驚きますよね」

……いやいやいや、俺が驚いてんのそれじゃないから。アンタの馬鹿力の方だから。

俺がそう頭の中で突っ込んでると、彼女はその魔術の説明を開

始した。それを要約するといつだ。

名称、空間操作系魔術・門^{ゲート}

それは魔力を大量に使用して、既知の空間と自分の居る空間との門を作り出す大魔術だと。空間と空間とを繋ぐと言つ非常識な術であるため詠唱にも時間がかかり、本当は大変な魔術なのだと言つ。

今回使つたこの魔術は、この国に居る数人の賢者が国王に頼まれて集まって、必死こいて制作した簡易詠唱術式を使って発動させるようにしてあるのだと言つ。簡易詠唱術式とやらは、何か身につけるモノかもしくは身体に魔術刻印と呼ばれる物を刻みつける事で、詠唱時間を短縮しワンアクションで魔術の発動を可能にするモノ。なのだそうだ。

ちなみに言うと、こちらの方が魔力の使用料は半端ないらしい。まあ、発動までの時間短縮として、使用する魔力まで少なくしたんじやそれは反則^{チート}と言つものだる。今でも十分チートだが。

「では、アキラ殿。」の中から選んでください。出来ればお速く、お願いしますね」

言つて、己の背後を指すアイリス王女。

そこには空中に、さあどうぞとばかりにぽつかりと空いた孔。^{アナ}その向こうには、刀剣 槍 斧 盾 銃……etc、と武器の山が広がっていた。

俺はその穴の中に入り、自分が一番使いやすそうなものを探す。ガチャガチャ、ガチャガチャと。

アイリス王女のような馬鹿力は俺に無いため、まず重量武器は却

下。

公言してはいないが、俺は一応幼少の頃から剣道をやっている。だから中型の刀剣と行きたい所だが、実戦形式での運用となると剣道の形は少々危ない。最近の剣道は一定の部位しか狙わない為、こういった時には使いづらいだろ。故に中型の刀剣も却下。

重火器の類も扱い知らねえし、却下。

「となると、これかな」

そう言って俺が手にしたのは、小型の刀二つ。要するに小太刀の一ノ刀で行こうと思つ。

何故かと言うと、一つはあの手の長モノは超近接戦闘の際には自身の腕力に頼るしかなく、それならば一応死にかけるなんて事はなきやうだからだ。

次には、重量武器で有るあの戦斧ハルバート、あれならば基本的には斬撃は縦か横、他にも突きや引っかけると言うモノもあるが、振りまわしている所を見ると基本動作はそれに成りそうだ。それに対して小回りのきく双剣ならば間合いを詰める事ももしかしたら可能なのではと思ったのだ。

俺の選んだ双剣は装飾の無い簡素な双剣。柄の色は片方は白、もう片方は黒、正反対になつていてる。

これにした理由は一つ。丈夫そうだったからだ。

「よし、決まり

そう言って、俺は両手に双剣を持ち、孔の中から歩み出た。

「決まりましたか。でしたら、始めましょう」

「ゴメン、少し待つてくれ」

アイリス王女の言葉で、俺の意識は研ぎ澄まされる。
思考する。現在の状況を。

場は広大なる闘技場。

眼前には、ハルバート戦斧を持つ怪力無双の御姫様。

己が手には、硬質で軽量な双剣。

姫君はいつの間にか重厚なる装備を身につけ、己が身に付けるは
少々厚いだけの単なる洋服。

その差は歴然。ならば一瞬で間合いを詰め、ケリを付けねばなら
ないだろ？。

思考により得た情報により、登山用の分厚い上着を脱ぎ捨てる。
今俺が身につけているのはジーパンとTシャツのみ。

己の最高速度を出すのには少し問題はあるが、現在出来る最軽量
の装備はこれだろ？。

そう思い、俺は一言口にする。

「準備、出来たぜ」

「解りました。では中心に移動しましょう」

「解った」

返事をし、移動を始める。

ピンチ、と張りつめた空気が闘技場を包み込む。

王女は半身になつて、戦斧の先端を俺に向けるように構えている。
俺はと言うと完全に自然体だ。

中央には、俺と王女様と以外にあと一人。その一人は騎士甲冑を纏つ^{まと}つて、俺と王女様の間で審判を行ううらしい。

遠く離れた周囲の騎士達は、俺に向けて憐みの視線を放つている。

それもそうなのだろう。

今の俺の状態は、言つなれば今まで人に世話をされていたチワワが、単身ライオンに挑むようなものなのだ。

けれどその視線の理由が解つても、どこか納得できない自分がいる。自分で言うのもなんだが、俺は負けず嫌いだ。勝手な判断で嗤^{わら}われるのは、大嫌いだし。闘う前に負けを認めるのはもつと嫌いだからあの連中に、目にモノ見せてやる。

王女様と対峙する心の内で、俺はそんな事を思つていた。

「では、試合……開始！！」

審判の号令と共に、俺へと叩きつけるよじにして突風が吹いた。
だがそれは錯覚。

突風の名は剣氣。それは一流の戦士のみが放てる烈風の気合い。
俺は過去、この剣氣を一度だけ受けた事がある。

放つたのは、俺の行く道場の師範。

その人は八十代ではあるが、第一次世界大戦を生き抜いた超一流の剣士だ。あの先生の放つ剣気は、俺はもとより六段の先生さえも氣怖いする程の物だった。

それと比べれば、今の剣気は身体が硬直しないだけいくらかまだ。

あの人剣気は、俺では十秒以上硬直する。

「せんせい師範よりは、まだましか……」

周囲に聞こえないうちから、少しうつひ言つて、俺は右足を一步前に踏み出した。

その一步に、周囲からは驚きが上がる。俺の事は、戦を知らない一般人で通っているだろうから、それは当然なのだけど。やつぱり少し可笑しくなる。

「ククッ……」

可笑しさに口を吐いて出た微笑。やっぱ、俺笑い方モロ悪役じやん。

そう思つのは一瞬、次の瞬には戦斧を持つ鎧の王女が詰め寄つて来た。初めの間合いは十メートル以上だったが、それは一瞬にして四メートル以下にまで縮められた。

いけない。もう既に相手の間合いだ。そう思つた時には、攻撃が開始されていた。

開戦の火蓋を切つて落としたのは高速の点攻撃、突き。

それは何よりも迅く、何よりも強いであろう一撃。その一撃には寸分の隙もなく、反撃と言つ单語など俺の思考からは吹き飛んだ。

高速の刺突を、身体を右に大きく動かすことでなんとか避ける。

どんな突きの達人でも、突けば引かねばならぬのは自明の理。だがこの戦斧にはそれは通用しない。

避けたその瞬間、斧になつてゐる面を俺に向け突きよりも迅い速度で、一瞬後には戦斧が自分の斜め左後ろに行くほどに力強く振りぬく。

先程大きく避けたおかげか、ギリギリで俺に触れる事は無かつた。だがその一振りは閃光の如く、俺の身体に触れるか触れないかと言ふ程の近距離を、一瞬にして通り過ぎていた。

途端とたん、己の腹から激痛が走る。触れてはいない。触れてはいないが、王女の一閃は余りに近く、現実には思えないが紙一重の位置であればその空間さえもまきこむほどのモノの様だ。

現実離れしすぎて正直開いた口が塞がらないが、今はこちらに集中しなければ大怪我をする事は明白。

故にもうその事は思考から弾き出す。考えるのは、王女様に一撃でも加える事。

身体能力からして、今のオレが彼女に打ち勝つ事は不可能。ならば一矢報えるように、頭を使つて全力を尽くすまで。

その彼女は、高速の一閃を一発放つても俺に一撃加えられなかつたのに危機感を感じたのか、五メートル以上間合いを取つてこちらを窺つうかがっている。

これは、俺から仕掛けた方がいいだろ？

そう思い、俺は一気に前へと駆けだす。大凡彼女は今、後の先を狙つおおよそつているのだろう。

それは直ぐに解る。だから普通は駆けだしてから、瞬時に避けて

次に移るのが最適。要するに、それは読まれているだらうと言つ事。

ならば、ならばだ。そこを相手の読みを外せば、どうにかなるのではないだらうか。そんな考えが頭をよぎる。

きっとこれが俺にとつての最後の機会。チャンス

まずは相手の気を逸らす。俺は自分に出せる最大限の気迫を出しながら、大声で、吼える。

「――」

人の声と言つより、獣の咆哮。この場に居るほぼ全てのモノが、そう感じたではないだらうか。そして、それに気付いた時にはその身体は硬直している。これは単なる大声だが、これほどの大声は人間では早々出せはしないだらう。

斯かくいう俺も、今の声には驚いている。これほどまでの咆哮は、今までの俺では出てはいなかつた。これはきっと、能力が覚醒したおかげなのだらう。

思考は一瞬。

身体は既に、次の行動に移る。

咆哮と共に詰めた間合いは、もう既に四メートル程になつてゐる。あと一步踏み込めば彼女の射程範囲だ。

彼女の攻撃カウンタの前に、俺は彼女の射程のギリギリ外から己が右手に持つ短剣を彼女の喉元めがけて投げ放つ。

すると彼女は俺の予想に反し、喉元に迫る短剣を、戦斧ではなく素手で防いだ。

己が身体を焦りが満たす。これでは一撃当てる事も叶わない。それは悔しすぎる。

それでも、走り出したら止まれない。俺は半ば諦めに近い感情を抱きつつ、左手に握りしめた短剣を彼女に突き付けた。

Ep7・新たなる友人

時間は朝十時ほど、俺こと**昼神暁**は城下街の商店街にやつてきている。

今まで俺が見た限り、今まで衣類型の店は無かつたため、きっとこれから向こうにそいつ言ったモノがあるのでう。そいつで歩を進める。

すると。

「あれ？あの兄ちゃんじゃねえか？アイリ様と引き分けたって言つのは……」

「黒髪に漆黒と真紅のオッドアイ……。きっとそつよ。アイツに違いないわ」

アイツだアイツだ、と俺を見世物の様にして集まりだす商店街の人達。

そう、俺は昨日の試合ではあの怪力王女に引き分けたのだ。あの戦斧を軽々と振りまわすアイリス王女は、力も強く単騎で魔獣狩りをすることができるB級騎士様で有つたらしく、どこからともなくやつて来た異那人がそんな人に引き分けたと言つ事は、驚きであり瞬く間に町中の噂話になつてしまつたようだ。

口に戸は立てられない。

それに昨日は見物の人も来ていたらしく、俺は異世界來訪一日目にして噂の人になつてしまつた。

困ったモノだ。今の俺の容姿は、どこかヨーロッパじみているこの国では目立つし、それにオッドアイである事も拍車をかけている。

要するに、悪目立ちするのだ。俺なんかと引き分けてしまつたア

イリさん（昨日の試合の後、皆そう呼ぶから俺も愛称で呼ぶよ）（言
われた）にも、俺がこんな風に立つのは悪い気がする。

思いながらも、俺は人の群れを引きつれて商店街を歩いていく。

俺が何故悪目立ちするこの商店街を歩いているのかと言つと、衣
服を買うためである。

お金は王様から渡された。理由を問うと、俺の鬪い方に感銘を受
けたから、らしい。

ひちりとして今は今の所衣服も一、三着しかなく、昨日の服は破れ
てしまつたので（試合後、見てみたら腹部が破けていた）好都合で
は有るが、王様からそんな事をされでは、と拒否したのだがそれは
王様と王女様の二人に却下されてしまった。どうしたものか……

渡されたのは銀貨十枚。

この世界の知識の無い俺は、試合の後王様にもう一つこの世界の
事を教えてもらえるようお願いしたら、アイリさんが自ら名乗り出
して色々教えてくれた。初日の罪滅ぼしがデータラコータラ言つて
いた。

彼女曰く、この世界では、共通の貨幣として金貨、銀貨、銅貨が
ある。銅貨三十枚で銀貨一枚分、銀貨二十枚で金貨一枚分なのだと
か。銅貨は、日本円で言えば約三百円程だと言つ事も知つた。有る
一部の国では金貨の上に白金貨なんて言つものがあるらしいが、今
の所俺には基本知識だけで十分なため、その話は聞かずに出てきた。

よくよく計算すると、王様とアイリさんからもらつたお金は服を
買つには多すぎる。俺にくれるとは言つていたが、余つたお金はき

ちんと返すよ。うじてよ。

王様と王女である彼らにも用事があるだらうから、速く行くためとも思ったがやっぱり貰いすぎな感じは否めない。

「おー、セイの黒髪の兄ちゃん。なんか買つてかないかい?」

「だから聞こえてきた俺を呼ぶのであらう声で、俺は首を左右に振つてみるが特に人は見当たらぬ。と言つ事は、ほんとうだ。

「兄ちゃん見てんだい。」つちだよー。」

やはうそうか。

そう思いながら、道に座る人を見る。

その人は全身に黒のローブを身につけ、頭にもやつぱり黒の、三角帽をかぶっていた。

声音から察するに、女性だらう。

快活な、周囲も元気にしてくれるような声だ。

「ああ、済まない。そこだつたとは思わなくて
「よし、そう思うならなんか買ってけ」

少し怒ったような声でその女ひとが言つたため、謝罪の言葉を一言述べる。

すると彼女は俺の方を見て、笑顔で購入の請求をしてきた。見ると、彼女が売っているのは腕輪や指輪、ネックレスにペンダントと、装飾品ばかり。それらは皆一様に、何らかの魔力を放つていた。

「でもそれ、魔術品だろ? 高いだろ」

「おっ、兄ちゃん解んのかい？ そうさ、これは全部魔術品だ。だから少々こじらの装飾品系の店から見ると値は張るが、他の国から見れば格安だ。この国じゃ魔術品はなじみが薄いからね」

魔術品とは、何か身につける物に何らかの魔術を仕組んだ品物だ。この国では圧倒的に、魔導師よりも騎士の方がが多いし、彼らは皆魔術品に頼らないし、更にここにはそれを好む風習がある。

ここでそんな物を売つていては、上がつたり下がつたりだらう。買おうにも、俺がもひつた銀貨は、服買うためのモノだしなあ。

『アキラさん。それ、買つておいた方がいいですよ
「いやあ、でも……って、何で出でてくるの……！」』

右側から聞こえた俺を呼ぶ声に、そちらを見ると、見覚えのある四等身。

いつだかの精霊さんが其処に居た。

「兄ちゃん。そいつあ、精霊かい？ 面白いの連れてるね
『へえ、貴方私が見えるんですか。やっぱり高位魔術品を卖つてい
るだけは有りますね』
「おっ、アンタは其処まで解るのかい。最近そつとつ奴いなくてね
え、アタシは嬉しいぞ……！』
『そんな、涙ぐまなくとも……』

何故かは知らないが意氣投合している様子のお二方。現在二人だけの世界形成中に付き、俺はハブられます。暇だ！ もの凄く暇だ！！

よし、そこいら辺に有る、なんか一風変わつてそうな服でもいじつてようかな。

これが面白そうだな、なんか不規則に黒いの出てるし、気にいつ

た。

俺は黒い煙みたいなものがモヤモヤと噴き出す、赤色の外套を羽織つてみる。

その時、何かが噛み合ったような力チリと音がしたと同時に、黒い煙は出なくなつた。

何でだ？

『あつ、アキラさん何してるんですか……… それ超貴重品です

』

『…………え？』

マジで！？

やべえ、やべえぞ！ 貴重品つてことは高額な筈。そんなに手分けちましたの俺！？

しかもなんか最初出てた煙は消えてるし、どうこみへ……？

『シル、これはアキラさんに購入せます。本当に、本当に申し訳ありません………』

「ああ、それここじや賣れないだらうし、それになんかその子、アキラくん気にいつたみたいだからあげるよ。だからこれからもよろしく頼むよ」

『そ、そんな……、じゃあ今度また来ますね』

必死にシルさん（露天商のおねえさん）に謝る指輪の精霊に対し、シルさんは親友に対するように接する。『いつやらい』の外套は俺の物になるようだ。

その態度に感動する指輪の精霊。つい、勝手に予定決める…？

まあ、予定はあんま無いからいいけど……

「せうかい、じゃあ、これあげるよ。それありや、ビービー西てもアタシの居場所分かるから」

『はい、ありがとうございます』

小さな宝石のような物をシルさんが渡す。指輪の精靈は涙ぐんでいるようだ。

何だらへ、この感じ。

俺、口出しこしちゃいけない気がする。

『では、また』

「あいよ、またね。あとアキラくんもまたね~」

「あ、はいまたいつか。これも譲つていただき、ありがとうございます」

いました

流れるように別れのあいさつに移った両雄に、一息遅れて別れの挨拶と感謝を述べる。

帰り道、色々と服を購入した後、指輪の精靈はこんな事を言いだした。

『アキラさん。シルさんはいい人ですよねえ、火精靈の宿る外套を下さるんですから サラマンダー』

『……へ?』

何だか妙な予感のする一言は、精靈の笑顔によつて誤魔化されたのだった。

Ep7：新たなる友人（後書き）

貰つた外套の能力は後ほど。

宝石の方は、ワンピースで言つ所のビブルカード。
要するに人の居場所の解る石です。

最近は勢いでやつておりますので、チヨクチヨクおかしな点があるかも知れません。見つけたら、報告していただけると嬉しいです。

(*^-^*)

感想も書いてくれるともっと嬉しいです。（*^-^*）▼

では、またの機会に。ノシ

Epo · 緋色の外套（前書き）

本日一回目の投稿です。
なんか今日は書けてしましました (*^-^*) v

午後、体力作りの為に街の外壁の所を走つていると、ビニから声が聞こえてきた。

「へへへ、コイツ案外可愛い顔してんじゃねえか。連れて帰りうぜ」「はっ、またコイツのワリイ癖だ。この口リコンー。」

「嫌！ 放せ！ 放せーーー！」

男達の下ひた笑いと、年若き少女の悲鳴。

俺が正義の味方なら、真正面から男達の前に出て行つて、少女を直ぐに助けるのだろう。

だが、俺にそれ程の力は無い。武器と言えば、つい先日目覚めた能力のみ。

この状況、逃げるべきだらう。

俺はそう判断して、走つていいく。

少女の悲鳴が消えるまで。

それは私
‘魔女見習い’、パンドラの人生の中で、一番の
過ちだつた。

王宮に献上する荷物を積んだ馬車に、自分の杖を置いたまま客人用の馬車に乗つてしまつた。

魔女にとつて、魔法もしくは魔術を使うための媒体であり、魔力をためる杖は必須のモノ。

それをおいて馬車の中で話しきむなど、我々にとつてはもつての外だつた筈。

そんな時に、盗賊に襲われるなんて思いもしなかつた。これは私の自業自得だ。これで死ぬならそれも良いだろう、半ばあきらめていた時、私を見つけた盗賊の一人が私の手を取つて、こんな事を言った。

「へへへ、コイツ案外可愛い顔してんじゃねえか。連れて帰ろうぜ」

息を呑んだ。私はいまだ齢十四だ。後一年で結婚可能な年齢ではあるが、それでもそう言つた事はまだしていないし、結婚前にそんな事をするつもりもなかつた。

師匠にそう言つた事をして行つ魔術もあると聞いたが、それは信頼も重要だと聞いた。

「ほひ、またコイツのワリイ癖だ。この口つコノー。」

嗤いながら言つ盗賊の仲間。他の数人も恐怖に震える私を嗤つていふ。

「嫌！ 放せ！ 放せーーー！」

絶叫、私の叫びが森の中を響き渡る。

ここには首都の直ぐ近くだつた筈。あわよくば、誰か助けに……

無駄だとは解つていても、抵抗せずにいられない。

私のプライドも何もかも、こんな奴らに蹂躪されると思つと、怖気がする。

「こんな邪魔なロープ、引き裂いちゃつか」

「嫌だ！ やめろーーー！ 誰か……！ 助けて……！」

数人の男に羽交い絞めにされた上で、びりびりと音を立てて引き裂かれる私のロープ。

このロープ、気に入つてたのになあ。

半ばあきらめが入つてはいるが、私は叫び続ける。

この状況を打破してくれる、勇ましき者を求めて。

「助けなんか求めて、誰も来やしネエゼ。ここはそう言つ場所だ」

「そうだそうだ、騎士も、ましてや冒険者も来ネエ場所だ」

「こんな所を通つた、馬鹿な自分を呪うんだな

「ここに来るのは、まさしく愚か者だ」

男達は、私から希望さえも奪おうと手を伸ばす。
涙が一筋、頬を伝づ。

流れるその涙は、绝望か後悔か、

「なんだお呼びかあ？ 愚か者なら、ここに居るぜ、

それとも希望を掴んだ故か。
差しのべられた手には、一つの希望が隠れていた。

『何だ手前は？？』

盗賊らしき風体の男達は、気配なく自分達の背後に降り立ち、不穏な言葉を放つた緋色の外套に付いたフードの部分で顔を隠した男に疑問を放つ。

パンドラは突然の男の来訪に、目を見開き彼の言葉に感動した。それはきっと、私に差しのべられた勇者の手なのだと。

「俺はお前らの言つ所の愚かもんや、今からそいつの要望にこたえようと思つてね」

盗賊、パンドラ、ここに居る緋色の男以外の全員が息を呑む。盗賊はこの男の奇妙な自信に、パンドラは男の言葉への歓喜に。

「さあ、かかつてきな。チンピラビも？」

緋の男は、右手の人差指でクイクイッと盗賊を挑発する。これまでの男の発言への怒りと、その正体への不安から、盗賊たちは激怒した。

そしてそのまま手に手に武器を取り、雄叫びを上げて男へと襲いかかる。

そんな事をモノともせず、パンドラへと笑みを浮かべる緋の男。男の微笑に、パンドラは驚愕した。「あれは、何だ」と。

先の数瞬で、パンドラは男の魔力を読んだ。パンドラとて、今は媒体がなく見習いとは言え魔女を自負する身。それくらいは出来る。だが魔力を調べた途端。全身に振るえが起きた。

大きすぎる。その魔力は、自信の練摩した魔力と比べても、由に七倍はある。例えるならば水槽と湖。それ程の魔力の差。

彼はいつたい何者なのか。そんな疑問が、パンドラの脳裏をよぎる。

それとはまつたく関係なく、男は攻撃を受ける。いくつもの斬撃、打撃を。四方八方から完全に同時に。

「へッ、殺ったか？」

盗賊は自分達が囮み、攻撃し、弱っているだろ？紺の男確認する。

「なつ……！」

「居ないだと……！」

「どう言つ事だ……！……？」

動搖し、周囲を見回す盗賊たち。

紺の男は、その上空から黒炎の門を開き、現れた。

「門……！？」

その魔術は、まさしく小型化された門。

だが、この男のそれはどこか異質。

本来、門の魔術は属性を持たぬ比較的に汎用型の魔術だ。

それが炎を纏うなど、聞いた事もない。

「燃えな、」

紺の男が、盗賊たちの中心に右手を翳して一言、言霊を放つ。その瞬間、空気が弾けた。

否、実際には盗賊の張る包囲網の中心に、先程の黒炎が爆発する

ようにして、一瞬だけ現れたのだ。

だが、それは空気が破裂するようにして見える原因となつた。

盗賊たちが、吹き飛んだのだ。

田算で言つ所約三メートル程、木にぶつかつて止まるまで。

戦闘は終わつた。

紺の男が、一撃で盗賊を氣絶させる事によつて。

「大丈夫か？」

紺の男は、パンドラに自分の來ていた外套を羽織らせた。
疑問に思い自分の身体を見れば、肌が大きく露出していた。

「フフッ……」

パンドラは、その男の性格が、少しだけ解つた気がした。

Ep8・緋色の外套（後書き）

主人公、非力な少女を助ける。と言つお話を。

気絶はしたが、生きてはいる盜賊たち。

魔女さん、主人公に興味を持つ。って感じです。

ではではまたいつか。ノシ

最近暇さえあれば執筆している私、間和井でした。

E09・ギルド登録（前書き）

今回は色々と主人公の情報をちまちま。
前回の魔術に関する事や、称号とかに関する事です。
では、お楽しみください(*^-^*)\

「なあ、あの娘なんて言つてた?」

『ありがとう、勇者様』
と言つておつたぞ、主

「……そうだよなあ」

貰い物である緋色の外套を纏つ俺、昏神暁は、王宮内の『えられた部屋で大いに困っていた。

何を隠そう、先刻の盗賊に襲われていた少女の件だ。

「なあリン、サラ。俺どうしよう」

俺は冷や汗を流しながら俺の両肩の精霊一人に問う。
リン、とはいつぞやの指輪の精霊だ。理由は簡単。指輪のリンだ。
さんざん悩んだいてその程度か。つて思うかもしないが、これにはもう一つ意味がある。

四等身でも、凜としたたずまい。まあ、同じようなもんだ。

これを聞いた時の本人の感想は『ありがとうございます! リン、
ですね。心に刻みつけます』だった。

四等身でも、美少女の笑顔は様になると思つ。

サラ、つて言つのは赤い外套に住んでいるつて言つてた火精霊だ。
これも、俺の想像に反してかなりの美少女だった(四等身だけど)。
名前の事は言わずもがな……、誰か、俺にネーミングセンスを下
さい。

サラマンダーと聞いて火トカゲを想像するのは、きっと俺だけでは無い筈だ。

そんな事を言つたら、『主は吾われに偏見が有るよ』じゃの。吾われにも性別は有るし、社会もある。今は基本的には人間が中心な社会であるしの、この姿が基本じゃ』なんて事を言われてしまった。良く分からなかつたが、そつ言つ物なんだつてことにして置く。

彼女達とは、命名による契約。と言つモノを結んだ事になつている。

リンとは、今まで仮契約、と呼ばれる一方的な契約だったのだが、今回完全な魔力回線バスが繋がつたと言う事で、色々と魔術の知識が俺の中に流れてきた。ついでに言うと、サラからもだ。

彼女達には得意分野があるよつだ。

リンは空間操作系。門ゲートとかの魔術。

サラは火球攻撃系。代表は火球ファイヤーボールと呼ばれる火の弾丸を任意の方向に飛ばす魔術だ。

それと俺の能力を組み合わせる事で、移動後の隙を生まない『黒ファ円焰門イヤーゲート』バリアと言う戦闘中に使用可能な門を編み出したり、空間操作系の結界と発火の魔術を組み合わせた物など、色々と組み合わせてみたりしてみた。

とか、まあそれは今の問題とは関係無い。

問題は、彼女が俺の事を、勇者、と呼んだ事だ。俺のここでの使命は、魔王と勇者、に関与する事。となると、俺自身が勇者になつてしまつたら意味がないのではないか。

そう思つて談義を始めたのだった。

「はあああああ……！」　どうすつかなあああああ……！」

『まあ、主に対しての勇者の一言は、一人の娘が行つただけじゃ。その程度で勇者の称号が手に入る筈はずもなかろうて……』

『うんうん、そうですよアキラさん。サラの言つ通りです。称号なんて、多くの人間が呼ばなければ成りえませんよ』

走る頭痛を堪える為に眉間に抑える俺の、真剣な言葉を、サラリと流すサラとリン。

お前ら真剣に考えてよ！ そうしないと俺一生身寄りが無いままなんだよ！

『そう言われても、主が勇者になつていなか調べる方法のう……。あつ、ギルドが有るではないか、リン』

『そう言えばそうですね……！！ サラ』

彼女達は、俺と契約をしたおかげか、俺から発せられる強い意志は察知できるらしい。なんと厄介な。

「はあ？ ギルド？ 何それ……」

『それはじゃのう』

俺の疑問に、サラが説明を始める。

ギルドとは、それ即ち仕事受付委員会。まあ、前の世界で言う所のハロー・ワークみたいなモノです。とはリンの言。サラが色々言ってくれたが、こっちの方が俺には解り易いのでこう解釈する。

そしてギルドには、入会するとギルドカードと言つ魔術で作るプロフィールを書いたカードが貰えるのだと皿つ。

それには自身の能力値をA B Cと+で表したモノと、その人を呼ぶ敬称もしくは役職名、または神が与えた使命である称号^{ジョブ}と言う項目、そしてその人物が持つ魔術や特殊な能力を表す能力^{スキル}と言う項目が有るのだそうだ。

サラはともかく、何でリンがそんな物知っているのだろう。そう思つた俺は本人に聞いてみた。

すると『精霊には精霊の社会が有るんですよ』と言つ吃驚な発言が返ってきた。精霊の社会って、どんなんだろう。面白そうだよな。

いつか、俺が行けるか聞いてみるか。なんて考えつつ、一言。

「よし。そこに行こう」

『なつ、そんな突然な……！』

『サラ、それは言つても聞かない気がします』

そうじゃつたな。と諦めるサラ。失礼な、思つたら即行動はいい事だろ。

所変わつて、ここはアルタイル王国首都エルキオンに有るギルドの中。

俺はいつぞやの赤い外套。その両肩には定位置だとでも言つかのように、精霊一人がふんぞり返つている。

其処には筋骨隆々の戦士や、妖しさマンマンの黒装束、白銀の鎧を身につけた騎士もどき。ありとあらゆるコスプレじゃない。称号の人们が揃つてゐる。偶にいるバーーさんとかが、『いい！ とってもいい！ 今度精霊一人に『嫌』……、解つてるわ。そんなの夢物語だつてことくらい。』

「用意が出来ました。どうぞこれを」

受付の女性から、渡される縦7センチ、横5センチ程度のカード。これがギルドカードか。

俺は未だこの世界の文字は読めないため、記入するモノとかはサラにまかせた。

数時間して、その情報を書き込み。

そして、渡されたカードには俺の情報が書かれている。

カードランク : D

名前 : アキラ＝ヒルガミ

年齢 : 16

性別 : (雄)

属性 : 混沌カオス

戦闘技能

体力 / D - 魔力 / C + + 敏捷 / B - 耐久 / D -

攻撃 / E + 防御 / D + 魔攻 / B + 魔防 / D -

称号 : 「オッドアイの異那人」わたりびと 「破滅の神代」カミシロ 「冒險者(初級)

能力 : 「獄焰」 「空間操作魔術(初級)」 「火炎攻撃魔術(初級)

「

一通り俺のギルドカードを読み終えて、再び1点を見つめるサラ。サラは顔をヒクつかせる。

どうした?! 何か悪い事書いて有ったか?!

「で？ 勇者って書いてある？」

左肩に届くサラに聞く。それはとても重要な事だ。

『いや、それは無い。それは無いのじゃが……。これは、他の者には見せん方がいいのう』

良かつた。勇者にはなつて無いらしい。

「ん？ 何で他の人には見せちゃいけねえの？」

『主は、妖しそぎるのじや』

俺の疑問への、サラの答えはこうだった。

本来ギルドカードのランクと言うのは、最低ランクであるFから始まるのに対して昨日の盗賊退治の功績で、初心の冒険者なのにランクDになっている事。

戦闘技能に関しては、普通の成人男性の平均が基本的に全部Eなのに対して変に偏った所が強い点。

極め付けは称号の欄の『破滅の神代^{カミシロ}』だ。何だ『破滅の神代^{カミシロ}』って。アレか？ 神様から言付かっている使命のあれか？ いやでもこんな凶悪な……

「そうだな。うん。見せない方がいいかもな……」

『そうですね。これは……』

三人とも、頬に嫌な汗を流すのであった。

その日の、サラ達の遊び所の精霊社会。

「「サラ～、お前面白い奴と契約したなあ～。今度オレにも会わせ
るよオ～」」

「面白いつて言つか、変じやの。会って見るのは良いが、自力で
何とかせい。のう、リン」

「えっ、何で私に振るんですかー? ドメントしようがないですよ
……」

「「ブー、ブー」」

そこでは、どこか気の抜けた会話が繰り広げられてくるのでした。

EPO9・ギルド登録（後書き）

感想、待つてまーす。
では、またの機会に。ノシ

才才才才才才！」

周囲の空気を巻き込みながら風を切る鉄の塊、そしてそれを受けるもう一つの鉄の塊。触れあう瞬間には、甲高い金属音。
渾身の力を以つて振りぬかれる戦斧クレイモア ハルバートを、俺はその両手で持つた。デカイ大剣で受ける。やっぱし、アイリさんの怪力は半端じゃない。数回受けただけなのに、腕がしびってきてる。

異界に来てからもう一週間がたつた。

俺は、五箇の中にある修練場で毎日のおもわせを行っていた。お相手はアイリさんだ。いつぞやの試合から、ずっとこれが続いている。彼女にも公務があるだろうに、大丈夫なのだろうか？

なんて事を考へる余裕を彼女が与えてくれぬはずもなべ

力で稽古を付けてもらつてゐる。彼女の得物は、いつぞやの戦斧。
俺はと言うと、先日行つたギルドのクエストで多少稼いできたので、
自腹で買つてみた刀身が二メートル程の大剣クレイモアを使つてみたりしてい
る。いや、毎日素振りもしてゐし、少しばら使えるかなーって思つて、
ね。

結果は歴然、完全に俺が押されている。これは稽古だし、俺の能力と、魔術は使わない事にしている。使うと稽古と言つより、死合いになりそうだし……。

「体さばきが甘い！ それでは衝撃を殺せないだろう！」何故双剣

で出来る事が大剣で出来ない！

「ハイ！」

気付けば、彼女と俺は完全に師弟関係だ。そんでもってこの娘、稽古中はどうだ。女王様だ。王様は一人で高め合え、って言ってこの稽古を許可してくれたけど、これじゃあ彼女の稽古になつているのかどうか……

『主はこの時だけは、完全にあ奴に頭が上がらんの』

俺の思考に割り込んでくるサラに、『そうだな』と心中で返事をして、これが最後のチャンスだと言つよう、大きな隙を作つたアイリさんに対し俺は大きく横なぎの一閃を放つ。

「これで……！　どうだあああああ……！」

振り切つた一閃は、ここでの最初の試合に比べれば、かなりの速さで彼女に迫る。

その瞬間、耳を劈く程の超高音が修練場を包み込む。

俺の手には手ごたえが無く、そればかりか得物である大剣さえもその手には無い。

何故か、それは手甲をした彼女の右腕の裏拳で、完全にたたき落とされていたからだ。どれだけの反射神経、どれだけの怪力だつてんだ。規格外にも程がある。

その後、彼女は稽古は終了だ。とばかりに、パンパンと手をたたき一言。

「今日の稽古は、これで終わりです。きちんと身体を休めて下さいね」

笑顔で言うその顔は、パアアという擬音がつきそうなほどに輝い

てこる。まるで向日葵である。

「あつ、あと、神官たちが貴方にあとで召喚場に来て欲しいと言つていましたよ。ナギル神がどうとか……、ヨウカイがどうとか言つていましたが、ヨウカイって何なんでしょうね……」

「解った、少し休んでから行くよ」

ここには基本的な宗教に、キリスト教みたいなものが有り、そこには自然崇拜みたいな感じが混じつてゐる、なんとか教つてのが有るらしい。

その宗教では異世界にも神がいる、と云つ認識があるらしい。俺が聖騎士であるアイリさんに「異端」として切りかかれたりしないのは、そこら辺が関係してゐらしい。

まあ、大体はサラとリンによる入れ知恵だがな。

俺はアイリさんに返事をして、その場にじろりんと寝つ転がる。今は朝の七時程。さつきまでの稽古は、朝稽古だったと言う事だ。

俺は熱くなつた身体を冷やすために、着こんでいた赤い外套を脱ぐ。

これにはサラが宿つていただけでなく、衝撃吸収、耐刃性、耐火性にと万能機能が施されていた。シルさんアンタ氣前良すぎつ……！有りがたいわ～。

そんな事は今の所関係なく、考えるべきは神官たちの事。

神官と云つと、俺は初日の嫌な思い出が浮かんでくるのだが、それは考えない事にしよう。

和ぎる神、妖怪、そのワードにここに来る前のことが思い出され

る。結局、背後を取られてから何かでやり返す事も出来なかつた神を名乗る変な奴。

俺と真夕美に襲いかかってきた火や風を纏う妖怪達。あいつ等の事が、何故今俺の耳に入つてくるのだろうか。

そんな事に想いを馳せていると、アイリさんが俺に話しかけてきた。

「アキラ殿、その、もしよかつたらのですが、用事が終わつたらで良いので、またここに来ていただけないでしょうか？」

「へ……？」

それは、どう言つ意味だ？ もしや俺がふがいないから、もつ一回稽古とか？ 貴女、オニーデスカ？

マイナス方向に考えていると、サリとリンが俺に一言『鈍感』と言つてきた。何、どゆこと？

『主、ハイ、と言つのじや』

『そうですよ、それ以外の発言は、私達が許しません……』

「……ハイ」

なして、貴女達は怒つてゐるのですか？

なんと言つか、般若面が一つ見えるんですけど。

汗を垂らしながら俺が言つと、アイリさんは嬉しそうに笑つた。

「ありがとうございます！ 私、待つてますね！」

何だろ？ 『』の喜々とした空氣は……、俺、『』の空氣経験したことがある気が……

『『『フンッ……』』

そして二人の精靈は、何故か怒つてゐるのでした。

「訳が解らん……」

数十分して、召喚場の前。
俺は十分に身体を休めて、決意のもとにここに立てる。

叩きつけられるのは、希望か絶望か、俺に渡される情報は、一体
どんなものなのだろうか。

覚悟のもと、召喚場の扉を叩く。

その時、聞こえてきたのは、聞き覚えのある声だった。

『おっ、尊の彼のお出ましかな』

憎たらしい猫なで声。

そこには見覚えのある少女が一人と、白装束の男が一人、堂々と
立っていた。

エピ10・愛憎の言葉（後書き）

再登場！

次回、気になるあの人の姿が解ります (*^-^*) v

ではでは、また次回。ノシ

『おつ、噂の彼のお出ましかな』

その声が聞こえた瞬間、俺は扉を蹴破った。

「何でテメエがいんだよーー！」

視界に入るのは、純白の着物を着て、その上に真紅の羽織を引つけた、俺をここへと送ってきた問題の野郎が居たのだ。

そいつの容姿は一言で言うと普通。

黒髪黒眼の、一般的な日本人男性の姿だ。

だが、そこが何だか引っかかる。コイツは神を自称している。しかもそれだけでなく、俺をここに送り届けると言う能力も持っていた。

そんな存在であるアイツは、確かに俺にこう言つたのだ。『向こうにいけるのは、貴方だけなのです』と。

アイツの言う貴方とは俺の事だし、その時はアイツの前に俺しかいなかつた。

だから、だから俺は憤怒するのだ。

アイツの後に、俺の生きてきた十五年の間、見なれた少女の姿が有る事に。

「テメエ、言つてた事と違うじゃねえか…………！」

俺は、真夕美はここには来ないと思つてた。それにアイツははつ

きりとこういった。『彼女の事は心配しなくて大丈夫です。向こうにはいけませんから』と。それが本当に真実かは解らないが、その眼は嘘を言っているようでは無かつた。

あれは俺の見間違いだったのか。

そんな事を思つてゐると、自称神はこう言った。

『何を言つてゐるんですか？ 晓さん、アナタは勘違いをしている。私も、私の後ろの真夕美さんも、そこにはいませんよ』

「は？」

「じつちを指す和ぎる神。

アイツは何を言つてゐるんだ？

理解が出来ない。見た限り、確かにアイツと真夕美はここに居る。

『どうやら解つていないうですね。では、私達の方に来て下さ』

手招きをする和ぎる神。

警戒しながらも、一步一歩前へと踏み出していく。

神官たちは、俺が入ってくる前からアイツに視線を釘付けにされているようだ。

何か使つたのか？

きっとアイツのする事は、俺には理解不能なのだろう。半分は気を抜いた状態で、俺はそれに気付いた。

「何だ、これ」

近づいたことで解つたのだが、和ぎる神も真夕美も、どこかノイズが走つてゐる。前の世界のテレビで言つ所の砂嵐の状態だ。手を伸ばしても、すり抜けしていく。

「どう言つ事だよ」

『聴き方に少々問題があるとは思いますが、まあ良いでしょう。貴方から見て、私達は映像です。

立体に見えていたから、ここにあるのだと錯覚していたのでしょうが、私達の実体は其処にはありません。ついでに言つと、会話を出来るのも私と貴方だけです。

私は思念を飛ばす事で会話が可能ですが、真夕美さんにはそれは出来ませんから』

良く分からぬ事を言つてゐるが、要するにここに居るやつに見えるアイツ等は、本当はここに居ないと言つ事なのだひつ。
それならば良かつた。そう思つて気が抜ける。そう、俺は真夕美に危険が無いのならそれでいい。

『では、本題に入りましょうか。まずはこちらの状況。

次にそちらの世界に行つた貴方の身体を奪つた者たちと、その目的。そしてその世界における貴方の本当の役割を……』

最初にアイツが語り始めたのは、俺がこの世界に来てからの向こうの世界の日常。

現実世界での俺と真夕美は、今の所和ぎる神の使役する式神とやらで俺達の事をカムフラージュしてあるんだそうだ。心配していた学校とかの事とかを聞いたら、何も変化なく進んでいくそうだ。

次にアイツはとんでもない事を言いだした。

この世界に俺の身体を喰らつた妖怪たちが、いつの間にか渡つて来ていると言つのだ。アイツは、こと向こうの時間軸はどこかずれているから、いつ着くか解らないと言つていたが、それでは対処法が立てられない。

あの妖怪たちには、俺は瞬殺されている。そんなのが来てしまえば俺は使命も糞も無い状況になるんじゃなかろうか。

『 そう質問したら、アイツは気楽に『今の貴方なら大丈夫ですよ』と、言つてきた。何が大丈夫だつてんだ。』

最後にアイツは、『貴方の使命は、【破壊】する事。繰り返される勇者と魔王の殺し合いの、混沌の物語り。貴方はそれに、終止符を打つんです』等と訳のわからない事を言つてきた。
これなら最初に言われた使命の方がまだ楽だつた。もうわけが解らねえ。

『 これで貴方への言伝は終わりです。あ、忠告しちゃりますけど、もうその国出ないと、貴方に悪い事が起こりますよ。主に精神的な意味で……』

ではでは、私は真夕美さんに貴方は元気だったと言つておきますね』

「ま、待てっ、俺はお前に聞きたい事が……」

一気に語り、アイツはスースと消えていった。

すると、今まで黙つていたサラが、ダムが崩れて鉄砲水が起きたかのように、マシンガントークを開始した。

『 主！－！ あ奴は何者なのじゃ－！ そこら辺の下級神官等と違つ筈の、精靈である吾まで呑みこむ極大なる神氣。有無を言わせず田を奪わせる魅了の魔眼！』

主も主で、それを物ともせぬとはどういう事じや－。うぬらは何処の化け物じや－。』

突然の暴発に、俺は返す言葉が見つからない。と言つか、サラ。

お前そんなに暴言をばくような娘だつたけ？

フーフーと息を切らしながら、サラは言葉を続ける。

『それにじや、吾はあのよ^{うな}娘^{むすめ}は知らぬぞ……。

見も知らぬ娘の為に怒つて^{いる}姿は、契約した精靈として、吾は、なんと言つか……、もどかしかつたのじやぞ……』

顔をそっぽへ向けて、ぼそぼそと咳き、直ぐにサラは消えてしまつた。

言葉は良く聞こえなかつたが、後ろから見えた耳は、真つ赤に染まつていた。

そんなサラに影響されたのか、神官達が一斉に俺の方を向く。な、何！？

「異那人殿。^{わたりびと}彼の者は何者ですか……！」

「異那人殿、貴方は何処からいらしたのですか……！」

「異那人殿、先の話は真実なのですか……！」

「異那人殿、あの少女とはどんな仲なのですかあ？」

異那人殿、異那人殿、と質問を叩きつけてくる神官達。ん？ 今何か不穏な質問が聞こえた気が……

「異那人殿、貴方は一体何者なのですか……！」

「異那人殿、彼の者との如何して会話が出来るのですか……！」

「異那人殿、貴方の事を、ぜひここに調べさせていただきたい……！」

「異那人殿、彼女のスリーサイズを教えて下さい？」

続けてぶつけられる疑問。つて、ん？ サッキから真夕美の事聞き出そうとしてるやつ誰だあ！ 僕が叩きつぶしてやるから出てき

やがれ！

『アキラさん。これは逃げた方がよろしいですね……』

思念で俺にアドバイスをしてくれるリン。そうだな、ここは逃げよ。

『えっと、転移先は……』

『修練場です』

『門の魔術を使って移動する先を決めようとしている』と、リンが勝手に転移先を決め、転移を開始させてしまった。

この魔術はリンから伝わった魔術であるため、彼女には色々と横入り等が出来るようだ。

空間系は彼女の方が有利なのだ。

円形の門をぐぐり、着いた先は今朝の修練場。

そして、逆さまに見える奇麗におめかしをしたアイリさん。その顔はもの凄く驚いている。

アイリさんを確認したと思つたが、『チ、ヒーリングと共に激しい痛みが頭に走つた。

『あ、あんな娘にアレテレしてたアキラさんがわるいんですよ?』

リン、俺が一体何をしたと?

E p12・仕事、仕事、仕事（前書き）

今日から更新再開。（*^-^）▽

更新停滞の理由は一応活動報告にあります。

突如現れた門から逆さで一気に落ちて、頭部を強く地面に打ちつけたアキラ殿。一体召喚場で何が……

「ど、どうしたのですか……！　アキラ殿……！」

私はアイリスは、動転してそれくらいしか言葉が浮かばない。

門の魔術は、通常自分で転移先を決めてどの方向で現れのかが決定できるため、こんな事は起きないはずですが、彼は如何したというのでしょうか？

「痛ううー。いや、大丈夫。それよりアイリさん。もしかして待たせた？」

頭を押さえつつも、自らの力で起き上がるアキラ殿。何かブツブツ言っていますが、本当に何が有ったのでしょうか？
それから放つた言葉は、私がアキラ殿を待つたかと言つモノ。待つたと言えば、待つた事になるのでしょうか。

私は稽古の後に浴場で汗を流してから、ずっとここに居るのですから。

「えっと……、待つていませんよ」

ですがそれを素直に言つてしまつては、アキラ殿の立つ瀬が有りません。

私は笑顔で誤魔化します。

正直、男性に自分からお願ひして時間を作ると言うの事は今まで

無かつたので、緊張して居るなんて事は知られたくないません。
恥ずかしい。

いきなり逆さで落とすのはどうかと思つた。リン。
なんて事を小さく呟きながら、俺は起き上がる。さつきの話は、
一端頭の隅に追いやる。アイリさんに失礼だ。

ここ一週間のアイリさんとの稽古と、ギルドでの力仕事が効いて
いるらしい。頭の痛みはそこまできつくは無い。それよりも、

「痛ううー。いや、大丈夫。それよりアイリさん。もしかして待た
せた？」

女性を待たせるとどうなるか、真夕美に身を以つて教えられる
ため、初めの発言はこれにする。あの時の剣幕は凄かつた。なん
てつたて俺のなけなしの金が全部アイスでパアだった。あれ？ 何
でだろう、眼の前の光景が滲んできたな。

きつくなは無いと言つても、痛いもんは痛いので頭は庇つている。
今度治癒の魔術を誰かに教えてもらおうかな。

「えっと……、待つていませんよ

少し俯いて、いきなり笑顔に変わるアイリさん。それはまるで、
直前まで俯いていた薔薇が朝日と共に一気に花開いたアサガオのよう。
嗚呼、その顔は反則だ。何で赤面してるのさ。俺の心臓を起爆さ
せる気か？

少しだけそんな事を考えて、直後俺は頭を振つて思考を振り払う。

「アイリさん。それで俺に、何の用なの？ その格好じや、稽古つて訳ではないだろ？」

不安に思いつつも質問する。

アイリさんの服装は、どこか遠出でもするようなモノだ。下は膝丈くらいの青いミニスカート。上はほんの少し装飾の施された真っ白のシャツ。ああッ、なんて眩しいんだ。

最初に会った時の青色のドレスとは少し違い、これはどこかスマートな感じの服装だ。

「えっと、あの……私のお友達に会いに行くので、護衛を頼みたくて……」

もじもじしながらも、「お願いします」と呟くアイリさん。だからそれ反則。

「……そ、そうなんだ。何処まで？」
「良じんですか？」

俺の反応に、上田づかいで効いてくるアイリさん。ちよ、おまつり顔に血が上つて来ているのが自分でもわかる。

「あ、ああ。良じよ」

どこから『フンッ』と言つ声が聞こえた気がしたが、空耳だろう。

「良かつた。行先は隣町のノエリア。

其処までには大盗賊団が出ると聞いていましたので、私一人では行くのは危険ですし、第一王女とはいえ私の上には四人もいますから近衛以外は動かせませんし……」

彼女の近衛は、彼女が戦闘に熱を入れている所為か、王から回された人には基本的に内政型の人間が多い。

王様はどうにかして彼女をお淑^{じと}やかにしたかったのだろう。現在の彼女の状況からその努力の程がうかがえる。兄や姉は大抵が肉体派で、彼女くらいは内政の手伝いが出来るようになつて欲しかったのだろうか。

まあそんな王様の思惑はどうでもいい。結果としてこんな可憐らしい王女様に仕上がっているのだから良いだろ？

今回はアイリさんの護衛だ。盗賊に気を付けるようにして居れば大丈夫だろう。その為の俺なんだから。でも、偶^{たま}には俺の実力^{チカラ}の確認もしてみたい。クエストでゴブリン退治なんて物があつてやってみたが、所詮はゴブリンだし、それに退治だったしな。人間に對して、どの程度まで俺の魔術と戦闘術が通用するか試すのも良いかもしない。

そう言えば、盗賊つて言つて思い出すのがロリコン野郎とあの少女。隣町つて言つてたけどもしかして……

まさかなあ。世界はそんなに狭くないだろ。うん。

「準備はこちらでありますので、ついてきて下さい」

「ああ、解つた」

未だに花のような笑顔で、俺に手を向けるアイリさん。何処行くんだろう。

道中の会話とかそういうモノに想いを馳せていた俺は、この時アリさんの向けた笑みが、王様の計略の元に向けられたものだと言う事に、全く気付く事が出来なかつた。

しばらくして、王宮の裏門に付いた。

俺の装備はいつも通りの赤い外套に、最近買った大剣クレイモアを背負つて
いる。戦力として、魔術はサラとリンのお陰で基本は完璧だし、応
用も一応可能だ。こっちで覚醒した能力を絡ませた俺が創った黒焰
系はやめておいた方がいいかもしない。あれはリンが言う所の規
格外。人に見せていい物では無いらしい。

裏門の所に目を向ける。

あれ、何で神官と門番さん話してんの？ てかその本いつぞやの
ブツじやねーか。やめなさい！ そんな物持つてくんな！ にやけ
ながら二つ巴を見るなエロ神官！

遠目に見えた変態三人に心中で突っ込みをしながら、表面では
平静を裝つておく。

すると、アイリさんが出発を告げる。

「さあ、行きましょうアキラさん。それに近衛の皆さん。
「ああ、そうだな」

オオー……！、と小さく、そして強かに返事をする近衛の皆さん。

その数はおよそ20。

着ている物は皆同じく白色の外套に黒色の軽鎧。頭には田元まである幅広の白い帽子。一人だけ違う色の赤色と青色の帽子の奴が居るから、それが隊長と副隊長なのだろう。

近衛の中には女性もいるらしく、数人軽鎧のある所がきつそうな人がいて眼を釘付けにしそうになつたが、まあ気にしてはいけない。後タリンとサラが五月蠅く言つて来そうだ。

そう思つてはいるが、どこかから念を飛んできた気がした。

『なあリン、何か言つたか?』

『へ? 何ですか?』

『いや、何でもない』

森の中から感じる違和感。どこか気持ちの悪いような、消化不良な感覚。

その時俺は、自らに向けられた好奇の視線の意味に気付くことが出来なかつた。

森の中を駆ける、アイリさんと護衛の近衛隊長を乗せた馬車。

俺は、アイリさんが俺を連れてきた理由が解つた。

出発して數十分経つただろうか、周囲からから殺氣立つた気配を感じる。きっとアイリさんも気付いてる。でもこいつらは全員それを察知すら出来てねえらしい。

ついでつきまで、俺はアイリさんの近衛たちと会話をしていた。

まあ、所謂情報収集だ。

手に入れた情報は、ノエリアと言う街は魔術が盛んで、魔導騎士を多く輩出している街だと、そこには城に有るあの召喚場の大きな召喚陣を描いた大魔女キリアなる人がいると言つ事。その人はこの国の中では、一種の賢者のような存在である事。後は眉唾モノだが、その人は1000年を生きる不老長寿の法を編み出したとか、神に面会が出来るとか、色々。

そしてこれから会いに行くアイリさんの友達と言つのは、そのキリアさんの弟子なんだとか。アイリさんは、毎回商人がこちらに来るときに一緒に会いに来ていてるらしいのだが、今回は商人が無事に来なかつたとかで、心配になつていてもたつてもいられなくなり、そこに行く事にしたらしい。

最後に、これが俺にとつて一番重要な事なんだが、ここは大盗賊団‘鷹の爪’なる者達が出没するらしい。その被害は甚大で、商人を襲い、人を捕まえて売りさばき、女子供は幽閉しどこか解らぬ暗い所に移動させる。だからここを通る際には最低限ギルドで認定されたD級以上の騎士を連れてこなければならんだとか。

盗賊と言うと俺も一度会つた事があるが、まあアイツらじゃあなにだろう。あのロリコンの事を思い出すと、そんな風に思えてくる。

「止まれえ！ 僕達は盗賊、鷹の爪！！ 速いとこ諦めて俺らに捕まりなー！」

少々思考に耽つていると、顔を黒い布で隠した軽装の盗賊らしき男が、四方八方から飛び出してきた。

それに対し、近衛隊の奴らは馬車を守るようにして陣営を即座に

組んだ。気付けば俺は其処から少々外れて一步前に出るよつた形になつてゐる。

「おい、小僧。お前は仲間はずれか？」

リーダーらしき体中傷だらけの男が、俺にナイフを突き付けてくる。刃物が喉に突き付けられるのは、これで二度目。

相手の人数は40人以上。

どこの国の傭兵崩れか、統率の取れた動きで俺達の周囲を取り囲む盗賊たち。

これは、使えるかも知れない。

「アイリさん！ そいつらと一緒に逃げろ！」

俺は首元のナイフを即座に極小の獄焰で焼き払い、前方に居る盗賊たちに結界の強化系「空間系魔術：タリスマ防御結界」と門を同時使用して、纏めて馬車の邪魔にならねえ所に移動させる。

叫んで魔術を使うまで、約一秒ほど。呆けている近衛隊の連中に怒声を飛ばす。

「速く行けえ！… それがアンタらの仕事だろお…」

言つと同時に、アイリさんが馬車から顔を出したが関係ない。

全員纏めて、俺がこの場から視認できる限界の場所まで先の魔術の併用で吹き飛ばす。

その様に、盗賊は顔を引きつらせてゐる。そう言えば最初の魔術は無駄だつたな。防御結界は解いといつ。

自身の感覚としては、魔力は有り余ってるし体力も申し分ない。アイツらは今最高の仕事を邪魔されて、詰め込まれた火薬で爆発寸前の爆弾と同じ。

だから俺は背負つた大剣^{クレイモア}を引き抜き構え、微笑と共に、

「さあ、アンタらの相手は俺だ。全員一緒に叩きのめしてやるよ。コソ泥共」

壮大なる挑発を、小さく一言呟いてやる。

それは導火線の根元に軽油を駆けて、火をくべると同じ事。

『ツザツケンナア！！ 僕らもこれから仕事するといだつたんだよオ！！ クソガキがあ！！』

当然、奴らは逆上する。

見えない顔を歪ませて、森に怒鳴り声を響かせる盗賊達。憤怒の表情を隠さず、初めから感じていた殺氣は、明らかに大きくなつた。

俺の実力がどれ程か、これでやつと、試せるな。

口角を釣り上げ、俺はただ一言。

「俺の仕事もこれからだ」

そう言つて俺は、自らの手に自身の幻想の塊^{イメージ}を出現させた。

E p12・仕事、仕事、仕事（後書き）

明後日から学業の方に移らねばなりませんので、更新は出来て一週間に一度くらいになると想いますが、ご了承ください。^_^(

エピソード・仕事の結果は…（前書き）

今回はまた新キャラが登場。

色々と忙しいので、前回の時書いた時の通り、次回更新は一週間後になると思います。（――・）

周囲には、自らが生きる為に人に危害を加えるエゴイストが40人。

こちらは16歳の少年1人に、精霊が2人。

俺は想像する。^{イメージ}手のひら大の灼熱の塊。発火と炎上、火炎系の大元の魔力を、視認可能な程にかき集めて圧縮した魔力塊。目に見える其れは、桜色の閃光で、周囲の世界を蹂躪する。^{クリエイモア}

俺の右手には魔力塊、左手には大剣。

2センチほど手のひらと間を空けてはいるが、それでも俺の手のひらにひつ付いて、発火しようと躍起になる火の魔力たち。だがそんな事は許さない。

俺の魔力は、俺の意志に従つて貰う。小さな小さな、手のひらだいの恒星。

この世界では、想像^{イメージ}はほんの少しの工程を経て創造^{クリエイタ}に変わる。イメージはハツキリとしているほど良い、なんてことはない。元来、魔術や魔法、奇跡なんてモノは、具体性の無い虚ろな感情の塊だ。俺は、この世界もそんなモノなんだろうと思つている。

虚ろな夢。神様の夢見る愚かな児戯。

綺麗なモノが、悪しきナニカに穢^{けが}されて、それを再びナニカに美しくさせる。繰り返す破滅と救済。

この世界では、何度も何度も、魔王と勇者が殺し合つ。

その為に多くの平安を求める人間と魔族が、無意味に消えていつた。

それこそが、今の俺が生きるこの世界の有り様。

俺の知識は、常に借り物だから、本当に其れが有ったのか、どうなのかと言つのは解らねえが、いつか来る崩壊の為には、強ければ強いほど良い筈だ。

逆上した盗賊達は、それでも隊列を乱しはしなかった。
その上、一人だけ俺の眼前に出てくる。

これではまるで、戦争ゲームの中である將軍同士の一騎打ちの様。

「アンタ強いな。あんだけ空間系の魔術連発しておいて、それでもそんな莫大な魔力の塊を作り出せるアンタは何者だ？」

俺達は生きる為にこの仕事してんだ。見たとこアンタはこの国の騎士様じゃなさそうだ。

「どうだ、俺達も金を出そつ。ここは手を引いぢやくれネエか？」

前に出たのは、帽子をかぶり頭を隠し、顔の大半を長い布で巻いた青年。服は大体が緑と茶色。この森では一度見失えばきっと見つける事は出来ないだろう。

どうやら、コイツがこの40人の中のリーダーらしい。さつき飛ばした傷だらけの男はフュイクか。

「コイツは悪い奴じやなさそうだが、後ろが危なそうだ。

「悪いが、俺は雇われたつて言つより、協力してるようなもんなんでね。アイツ裏切る訳にやいかねえのさ」

交渉は決裂。

初めからそんな事は理解していたのだ。

青年は一声、解つた。と言つと、手袋に隠された手を向けて、感情の無い目を向けて、

「殺や
れ」

小さな声で、開戦の合図は訪れた。

青年を飛び越して、俺に刃を向ける盗賊達。隊列を取りながら、円形に俺を取り囲む。

その瞬間、俺は火の概念をたっぷり含んだ魔力塊を分散して男達の足元に放ち、自分の周囲に防御^{タリーズム}結界を張る。

そして青年以外の俺に押し寄せてきた男達全員を包むような大きな結界を作り出す。

「あんなバカげた魔力の維持は出来なかつたか！！　はツ、こんな結界も、直ぐぶち抜いてやる！！」

盗賊は一瞬驚き、だが直ぐに魔力塊を避けて俺を守る結界を破ろうとする。

客観的に見れば、危機的状況。

だが俺から見れば、最高の状況。布石は全てばらまいた。

「ハアツ、ハアツ……、何だ気持ちワリイ。コイツなんかやつたな。外出るぞお！」

盗賊達は、数秒で気持ちの悪そうな顔をする。

それも当然だ。火種があるまま大量の大人の男が密室に集まれば、当然酸素が欠乏する。

男たちは異変に気付き、外側の結界を叩き割る。

瞬間、場違いなほど明るい声で、俺は言つ。

「なあ。お前ら、バックドラフト現象って、知ってるか？」

「なあ。お前ら、バックドラフト現象って、知ってるか？」

外側の薄い結界を俺の部下たちが叩き割った瞬間、消えかけだつた桜色の火種が、俺の眼前まで迫る爆炎に姿を変えた。何の魔力も感じさせずに。

焼かれていく俺の部下が39人。その誰一人として、自分が如何して焼かれているのかさえ解ってはいないだろう。

現に外から見ている俺でさえ、その理由が解らない。解るとすれば、アイツが言ったこの現象の名前が、「バックドラフト」と言つモノだと言つ事だけ。きっと、王宮で暮らしている神官様とか、さつきの姫様とか、そう言つ輩なら解るのかもしねりないが、俺には解らない。

だから、それを理解するのは諦める。

「野郎ども。今、助けるぞ」

救済の手を伸ばす。

一步先、其処は炎の支配するクニ。数秒であれ、其処は通常他者が干渉することのできない空間になつていて。

だが、俺は通常でいてはならない。俺の可愛い部下たちを、助けろ為ならば、俺は悪鬼羅刹にでもならねばならないのだから。

服が消え、皮膚が焼けていく。

一瞬で、それはさっきまでの極小の大きさにまで戻った。そして其処に広がった光景を見て、俺は即座に今できる最高の手段を取る。

俺は、出来る限りの抵抗をするために、今できるありつたけの力を乗せて、正体不明の男の作った強固な結界を殴りつける。そして即座に、己の中にある魔力を水の属性に変え、周囲にばら撒く。

本来、俺の得意とする属性は四大元素の中でも攻撃的な風の属性。いつもならそれを使って敵ごと薙ぎ払えば良い。でも、今はそんなことは出来ない。

「糞がツー！」

「ここまで、己の属性が水で無い事を呪つた事はない。」

水の属性は、魔力を傷ついている対象に当てるだけで、その部分が回復する。得意とする属性が水ならば、それだけで回復出来る症状は増える。

今の俺は、ただ足元に広がる部下の命を、ギリギリ留める事しかできない。

水の属性ならば、きっと即座に意識が戻るのだろう。

「ハツ、ハツ……！」

魔力は尽きた。後は、目前の男を、叩きのめして帰るだけ。それが出来れば最高だ。

「なあ。アンタは如何してそこまでする？」

突如、目前の緋色の男は結界をとき、俺に質問をぶつけてきた。

俺は今、魔力を使い果たして力が出ない。闘うのを中断すると言うなら好都合。アイツらの

どうして、そんな事は決まっている。

「……だからだ」

「なんだ？」

周囲が熱気に溢れている所為か、喉がかすれて声が出ない。男が聞き返す。

もう一度、今度は、据えるだけ息を吸って、叫ぶ。

「【家族】だからだ！！」

そう、俺達は家族だ。

例え血のつながりはなくとも。例え生きてきた環境が違つても。俺達盗賊、鷹の爪、は、今を必死に生きていく家族だ。

「そりか、家族か……」

緋色の男は、どこか感傷に浸るように呟いた。

何故かは知らないし、知る気もない。俺はただ、俺の家族が無事ならそれでいい。

俺は、契約をしてある、この森の精靈に語りかける。

『この地の風を司る者よ、我が内より出でし魔を喰らい、我が願いに応えよ』

俺の魔力は、拡散して個の周辺に放出してある。

それをこの森に住む風の精霊、シルフ達に食わせることで、瞬時に俺達のアジトへ送らせる。

「俺は鷹の爪、幹部の一人カルル＝レイフォン。覚えとけ！ 紺色の男！」

あの男を殴つてやれなかつたのは残念だが、俺もこれで一緒に送られる。

捨て台詞を残して、アジトへと飛ぶ。

あの男は一瞬だけ驚いたような顔をした。

アジトへ戻り、確認をすれば、俺の部下は一人として死んではいなかつた。

軽度の火傷を負つてはいたが、息を引き取る者は誰一人として…。

「カル、お前が会つたつて言つ緋色の外套を着た男。風貌は一体どんな奴だつた？」

今は、アジトの最奥部、頭領の部屋で報告を行つてゐる。

「ハイ。髪は外套に隠されていて良く分かりませんでしたが、瞳は黒と赤のオッドアイ。最近やつてきた異那人わたりひとで間違いないかと」

目前の椅子にすわるお頭に報告をする。

「そうか、異那人か。面白いな。

異那人と言えば、500年前の勇者も異那人だったそうじゃないか。今回のそいつは、一体どんな奴なんだろうな」

クククツ、と、笑うお頭。その顔は、どこか無邪気な子供に似ている。

空気が凍る。

俺はこれまでにお頭が笑っている所を、他国の戦争に参加している時以外に見た事が無い。

きっと、この人は今、見た事の無い強者との戦いに想いを馳せているのだろう。

出来れば、その場には居合わせてくはないものだ。

カルルと名のつた男は、風に巻かれて、一瞬にして消えてしまった。

きっと逃げたのだろう。さっきのバックドラフト現象は、自然現象を使ってほんの少しの魔力で広域を攻撃するようにした魔術だ。名前は「回帰孔焰」、命名者はサラだ。今回、俺は出来る限り威力を抑えて使った。

やはり人を簡単に殺すほど、俺の心は荒んでいない。一瞬の躊躇で、俺は威力を最小にした。

基本的に盗賊と言うモノは、生かしておいたら後々酷いしつペ返しをくらう。そう聞かされてきたから、俺は一気に大勢の敵を倒す事の出来る回帰孔焰を使った。けど、殺せはしなかった。

「俺は、まだまだ甘ちゃんだな」

『そんな事は有りませんよ』

『主は強いよ。だから吾らが此処に居る。本来は人間が精靈を完全に隸属せらるなど、出来て一体だからの』

俺の独り言に、リンとサラが応える。
とてもありがたい。

「ありがとう。それじゃ、アイコさんのところに行くか」

まずは、隣町。ノエリアを田舎すとしゆつ。

Ep13・仕事の結果は…（後書き）

カギとなるのはお頭、それともカルル？主人公は現在、修行中。

ではではまた次回。ノシ

精霊幕間1・家族、それは大切な宝物（前書き）

なんだろう。書けてしまった。（。 - 。）
書けちまつたからには投稿しなければ。そんな感じに投稿。

今回はどうちかって言つと暗い話です。
この話は幕間ですので、読んでも読まなくて今まで大きな影響はないでしょう。

精霊幕間1・家族、それは大切な宝物

家族、それは産まれたときから側に有る者達。

家族、それは親しき者達。

家族、それはきっと、とても温かく冷たい関係性。

「家族か……」

ひとり虚ろに呟く少年は、今私を右手に付けている。

私はリン。彼が付けてくれた名だ。ここにきてから精霊の社会や、サラや他の精霊達に出会うなど多くの事が有った。それは私を感情豊かにさせた。それが良い事なのか悪い事なのかは分からぬ。

『アキラさん、前を向きましょう。ノーリアを目指すのでしょうか?』

「ああ、そうだな」

私は彼の右方向に出現し、質問する。

問い合わせる言葉に、彼はうつすらと反応する。

上の空だ。これはきっと彼の過去に関連するのだろうが、今の私にそれを確かめる術はない。魔術回線は繋がっているから、夜中に彼の夢の中でならどうにかなるかも知れないが、今はどうしようも

ない。

不安だ。彼の心がそつ言つている。

魔術回線が繋がったおかげで、私は彼の持つ感情を知ることが出来るようになつていて。

流れてくるのは、不確かな感情。恐怖と憤怒と冷静さ、色々な感情の混ざり合つた不自然なモノ。それは私にとつて、とつともない毒だ。

私達精霊は、基本肉体のを持たない魔力を持つただけの思念体だ。それは四元素の象徴である四大精霊でも同じ事。これはその一画であるサラに聞いたから確實だ。

『アキラさん。アキラさん大丈夫ですか？』

返事がぶつかりぼうのはいつもの事だから気にしないが、流れてくる感情が不安定なのが気にかかる。するとサラも同じことを思つていたのか、サラも左方向に出現した。

『一体どいつしたと言つのじや主。リンの呼びかけにも答へぬとは、家族について何か嫌な事でも有つたのか？』

サラの十八番、直球質問。^{オハコ} いえ、技とかじゃないんです。私がそう呼んでいるだけなんです。

こんな質問、普通尻込みしてしまつと悪いつのだけどどいつだらひ。

「そり、かもしれないな」

そう言つて、有らぬ方向を向くアキラさんは、どこか悲しい目をしていて、私は何だか話しかけてはいけない気がした。

「なあ、二人とも。俺の昔話を聞いてくれないか？」

そう言えば、私もサラもアキラさん昔の事を殆ど知らない。私達が魔術や他の事を教えている時、熱心に聞いてくれたり、困つている人を見て見ぬ振りしようとしてとして失敗する少し間の抜けたご主人様。今更だけど彼の過去は、一体どんなのだつたのだろう。

「それは、

それは、気持ちの悪い程に生ぬるい風の吹く、真夏の昼下がり。突然父から放たれた中学一年の俺の人生をぶつ壊す、最悪の告白。

「あきひ
暁あ。俺会社首になつた」

「ハア！？ 何言つてんの親父！？ 嘘だろ！！」

泥酔するまで呑んだくれた父が明るい口調で放つたそれは、俺にとっては死神からの死刑宣告と同じだった。

我が家は父一人子一人の家庭だつた。母は俺が生まれたすぐ後に体調を崩して死んでしまつた。死因は高熱がどうのこうのと言うものだつたと思う。俺はハツキリとした理由を告げられて居なかつたため、良く分からぬのだ。

家計の殆どは父に一任していたから、その時の家計が火の車だつた事は後で知つた。その理由も父がキャ○クラとかそう言つた店に通い詰めていたのが理由だつた。

その翌日から、俺のアルバイト生活は始まった。

道路工事、定食屋、コンビニで、殆どバイトは完璧になつた。最初はバイトも大変だつたが、段々と慣れていた。

だが、その地気には学校と家。その二つの場所は俺にとっての地獄に変わつていた。

学校ではバイトをしている事を知つた上級生が、俺から金を巻き上げようと躍起になり、それにより友達も一人また一人と俺から去つて行つた。

そして家では、真昼間から酒に溺れてダメスタイルクバイオレンスを受けていた。それだけならいい、俺は痛いのくらいは小さい頃から大人達とかと闘つていたから大丈夫だ。打たれ強さには自身が有つた。でもその時に親父が放つ言葉に問題が有つた。

「お前さえ生まれなきゃ、アイツは死なずに済んだのに！ 何でお前が生きてんだ！」

じりねえよ！ 僕に聞くんじゃねえ！

そう言えたら、どんなに楽だつたのだろうか。

そう本氣で言えたら、どんなに心が軽かつたのだろうか。

俺は親父がどんなに母を愛していたのか、爺ちゃん達から嫌と言ひほどぞ聞いていた。

彼らが言うには、それは日本、いや世界の中で最高の夫婦だつたらしい。常に互いを労り、相手の事は手に取るよつて解つてた。まさに夫婦の鏡だつた、とのことだ。

学校では、先生に気に掛けられていたり、俺が親父に暴力を受けているのを知った連中からいじめを受けた。

数人俺を気にかけてくれる人もいた。それに、真夕美は遠くからだつたが、いつも俺を心配そうに見ていた。あの時の俺の唯一の救いは、それだつたのかもしれない。

家では、俺が抵抗しない事によつて、親父の暴力は加速していくた。

最後の辺りでは偶に包丁とか、刃物も持ち出された。だから俺の服の下には無数の切り傷が有る。最初はただナイフを振りまわしているだけに見えた。だが、日を追うごとにそれは大きなものになり、最後には何処から入手したのかも知らない長細い日本刀で切り付けられた。

毎回切られては病院に行つていたから、その時にはもう警察に眼を付けられていたのだろう。

ほぼ廃人と化した親父を見て、俺は知らぬ間に涙を流していた。それは悲哀からなのか、喜悦からなのか、不安からなのか、安心からなのか、多くの感情が入り混じり、それは自分自身でも理解できなかつた。

ただ一つ解るのは、俺の家族は存在しないという事実。

「今思つと、あの世界は俺にとって、最悪な世界だつたんだな」

最後に吐きだしたのは、憎しみの籠もつた独白。

苦しみでパンパンになつた静寂。ザクザクと言ひ曉の足音だけが、無音の森に染み渡る。

何故、何故……。

そんな言葉が頭を駆け巡る。

私の疑問は一つだけ、たつた一つだけ解らない事がある。

『アキラさん。貴方は如何して……』

ならば如何して、貴方はそんなに悲しそうな貌をしているのですか。

「家族」それは美しき絆。

「家族」それは醜惡な運命。

「家族」それはきっと、醜くも愛しき、愛憎の狂想曲。カブリッヂオ

精霊幕間1・家族、それは大切な宝物（後書き）

なんだろ？、暗い、暗い、暗すぎる…！

と言う事で次回からもつとファンタジーしたいなー。（・_・）
そんな作者の独り言。

自分の作品が面白いのかどうか、出来れば知りたいと思いますの
で、完結もしていない作品に評価なんて…
などと感じるかもしれませんが、出来れば評価や感想をお願いし
ます。

またかよ。って感じですね（ーー；）

批評でも、誤字報告でも、足跡を残して下さると、私はとても喜
びますので、執筆速度が上がりります。
ですので足跡と言つ名の潤滑油を私に一滴お願いします^^(ー
ー)^\n

あの盗賊との戦闘から一時間ほど進んだ所。空はもう、赤く染まり始めている。

その場所で、俺は大量の魔物達を殲滅していた。

「クソッ……どんだけいんだよ！ キリがねえ！！」

手にした大剣で、四方八方から襲いかかってくる獣の姿をした魔物。^{クリエイモアスター}魔獸達を片つ端からたたつ切る。

それでも、切つても切つても何処からかわいてくる魔獸達に、正直な所俺は疲弊していた。

『焦らないでください、アキラさん。私がこの原因を探ります』

指輪から顯現し、飛んでいくリン。

リン達精靈から見てもこの状況はオカシイらしく、彼女は自身の身体を靈体に変化させて周囲を探し出す。当然のように、その姿は半透明だ。

ちなみにサラは俺の受けきれない攻撃を、外套の中から防いでくれている。

無論、彼女の得意な火焔魔術でだ。俺は魔術に関する知識は少ないが、彼女達はそれが豊富だ。その知識と個体として持っている能力を使い、彼女達は俺の魔力を喰う事で上級の魔術をホイホイ使えるようになるらしい。

魔力だけは魔王か勇者並。とは彼女達一人の言だ。

俺はそのお一方のどっちかと渡り合う可能性があるのでから、あ

つて損はないだろう。まあ今の所は、宝の持ち腐れなんだが。

「吹き飛べー！」

叫び、俺は手に持つ大剣を横薙ぎに大きく払う。

この手に持つ大剣は、世に言つ所の超重武器だ。そう呼ばれる武器はこの世界に数多くあるが、その武器には必ず一つの共通点がある。

そう、金剛力のスキルでもない限り、攻撃の軌道が制限される事だ。

制限された軌道とは大きく分けて二つ。上方からの叩き落たたき落としか、もしくは薙ぎ払い。その二つが超重武器の攻撃動作だ。

それ故に、基本的に一定以上の重さを持つ武器は多対一の戦闘には使えない。

それが一般常識。

しかし此処は、常識と言つ手錠を外された自由の場所。永久に寝むる神の夢。

前方、後方、左右に上下。魔獣は何処からでもやつてくる。こちらの都合など全く意に介さず。

それに対してもちらだけ武器の攻撃が遅ければ直ぐに噛みつかれて喰い殺される。ならば速さを上げて、魔獣達の攻撃に追いかけばいい。

とはアリさんのお話である。

これを言いきった時のあの時の事は、今でも鮮明に蘇る。

共に稽古を付けてもらっている兵たちの断末魔が聞こえる中、彼女は喜悦に歪んだ表情をしていた。

口元はネジ曲がり、冷徹な視線でこの身を射ぬくあの顔はまさに、恐怖と言つ言葉を具現化したものに思えた。

考えていると、段々嫌になってきた。これはもう考えない事にしよう。

気付くと、周囲の魔獸は粗方一掃し終えて、色のついた半透明な石ころが「ゴロゴロ」と足元に転がっている。

色は赤、青、緑、銅色と、基本的に四つの色をしている。一つ二つ黒か白の石が混じっているが、あの色は如何言ひ意味を持つのだろうか。大きさもまばらだし濁っている石もある。

こんな経験は今まで無かつたから、如何していいのか良く分からぬ。

『主、何時ぞや教えたであろう。それは魔光石^{マジックストーン}、各属性^{属性}との魔力を含んだ石じや。専用の換金所もあるし、その含まれた魔力に方向性を持たせて放出すれば、特殊な魔術として扱う事も出来る。

更にそれに適性のある人間ならば、魔光石と融合して新たな魔術や特殊な能力が発現する事もあるんじやよ。

特殊な能力は、まあ主は持つているし意味はないかも知れんの。あと、個人の成長の上限を底上げすると云つ事も聞いたことがあるの。

これが前吾^{われ}らが主に教えた事じやよ』

「そうだったか、忘れてた。ありがとな、サラ」

そう、これは魔光石。

俺はサラとリンに教えては貰つてあったが、今までギルドで討伐系の依頼は受けていないから見た事がなかつたため、それが何なのか解らなかつたのだ。

「それじゃ、移せ、」

一つの言霊に反応し、俺の身体から漆黒の炎が滲みだす。それは、リンに教えてもらった唯一の中位の空間魔術にして「獄焰」との合わせ技。広範囲に獄焰を放ち、それに触れた物を任意で自らの作りだした別空間に移すと言つモノ。

名称は「黒界転移」。

ギルドで受けた依頼で使っていて知ったのだが、この黒焰は俺が燃やそうと思わなければ火としてだけではなく、俺のもう一つの手足として使用可能な程になるらしい。

感覚神経と言つモノが有る訳ではないのだが、それでもそれが触れている物とその形状などが瞬時に理解できるようになつていた。そして、焼き払おうと思えば何であろうとも燃やしつくことが可能だと言う事も解つた。

その黒焰の持つ特性から、広域に放つた感覚から魔光石のみを感じ取り自己の持つ別空間に淡々と移していく。すると、

「何だ?」

自身から斜め右前方二十メートル程に、人間らしきものを感知した。

「さやああああ!」

感知したその瞬間に、少年の声らしきものが、夕刻になるかと言う森の中に木霊した。

Ep14：発見、入手、魔光石（後書き）

お久しぶりです。

一週間以内には更新が出来て良かつたです。（*^-^-*）

それと、今回アクセス数などを確認して見た所、PVは18'000アクセス。ユニークは3'000人を突破していました。
読者の方々、毎度ありがとうございます。>（ーーー）<
これに応える為にも、これからも頑張ります(*^-^*)
ではでは、またの機会に。ノシ

Ep15・鍛冶師アグニ、大魔女キリア

ノエリアの鍛冶場から、師匠から言われて薪を取りに来たらどこのから戦闘を行う音が聞こえてきた。

鉄で生き物を打ちつける鈍い音、獣の咆哮、消滅する魔物^{モンスター}。

本来この辺りには魔物^{モンスター}は出現しない筈なのだが、今は大量の魔物の気配がする。

こう言つた時は、気配を消してその戦闘をやり過ごすんだと師匠から聞いていた。だから草木のなかに潜んでいたら、何か半透明の小さなもののが俺の前に来た時は驚いた。

『貴方は、如何して此処に?』

いぶかしげな声で、俺に話しかけてくる半透明な何か。

「いやいや、その前にアンタは何だ?」

言葉を発する半透明な物体、師匠にもこんなモノの存在は一度も教えられていない。

世界には、まだまだ俺の知らない物が有ると思うと、少しだけ好奇心が芽生えてきてしまう。

『えっと、私は精霊のリンです。使役はされていますけど

少し困ったように、俺に自分の事を語る半透明の光る光球型精霊、リンさん。

「精靈！？ 精靈つてそんな姿なの！？ スッゲー、俺初めて見た！」

少々興奮して、言葉を発する。

だつて精靈だぜ？ 人間嫌いで普通俺らの前に姿を現さない精靈だぜ！？

そんなの興奮しない奴いたら可笑しくね！？

『それで、貴方は誰で、如何して此処に？ 今はノエリアにアイリス王女が向かっているため、外出は控える事になつている筈ですが……』

え、 そうだつたつけ？

俺師匠から何も言われて無いんだけど。

「俺はノエリアの鍛冶師イグニスの一番弟子、アグニだ。今俺はあの破天荒師匠から薪を拾つてくるよう言いつかつていてな、その為にここに来たんだ。お姫様の事は良く知らねえ。師匠からは何にも言われてねえし……」

そう、俺の師匠は破天荒だ。何でも必ず我を通すし、自分が言った事を俺が出来ないと、きつついお仕置きが待つていて。
だから早いとこ薪を集めないといけないんだが……

『そうですか。あの名工、イグニスのお弟子さん。解りました、時間を取りまして済みません。私はやる事があるので、これでサヨナラです。では』

そう言つてリンと名のつた精靈は俺の前から飛び立つていった。
俺はその後ろ姿（？）を見送ると、一気に冷めてきた頭で一つ、

「あ、薪集めしなきや……」

「」の後のお仕置きが、少しでも和らいでくれる事を祈るのだった。

数分すると、アグーはもう薪を集め終わっていた。
だが、アグーはまだその森の中に居る。

何故か。

そんな事は簡単だ。アグーの前方には、光球型の精靈、リンを携えた赤い男の姿が有つた。

「で、君がアグー？　俺と殆ど歳変わんねえんだな」

首をかしげ、質問をする紺色の外套を着た男

暁^{アキラ}

その瞳は左右で違う、漆黒と真紅のオッドアイである。そして頭髪は瞳の漆黒を更に深い闇で塗りなおした様な真黒な髪が、短いながらも所々はねている。

背丈は170に届くか届かない程度。平均的か、もしくはこの年代にしては小さい方だ。

アキラから感じる気配はまさしくヒートの気配であるの「」、アグーはここを動けないほどに緊張している。

そう、まるで蛇に睨まれた蛙のよう。

「あ……、ああ。俺がアグニだ。それで、アンタはナンなんだ？」

率直な質問。

圧倒的な力の差が有り、相手に知性が有るのなら話し合ひは悪い手では無い。

いつもは喧嘩つ早いアグニなのだが、今回は先の黒焰を見て、そして触れて、完全に戦意を喪失している。

物体を瞬時に移動させたり、焼かずに触覚と同じ働きをする炎など聞いた事もない。

それにアグニの中の本能が、アキラに逆らうのは危険だと告げている。

アグニの質問に、アキラはこう答えた。

「異世界人。」わたりびとこの言い方で言つなら異那人かな、そこで質問なんだがな。アグニはここに薪を取りに来てて、直ぐにでも街に帰りたい訳だろ？？」

異那人、それはこの国では大きな意味を持つ存在。前回の魔王と勇者の戦いでの勇者は異那人だったと聞くし、太古の昔から魔王はほとんどがそうだったと聞く。

この国においてその異名を持つ者が重宝されるのにはそんな理由があつたりするのだが、今はそんな事は関係ない。

最後のアキラからの質問にアグニは「ああ」と、小さく返事をする。

肯定の意味を表す返事を聞いたアキラは、ほんの少しだけ表情を和らげて、こんな事を言った。

「なら、俺を案内してくんねえか？ 俺途中で迷っちゃってよ。それに見たとこ、アグニは無傷じやねえか。それなら危険度の少ないそっちから行かせてもらつた方が俺としても嬉しいし、薪は俺がまとめて持つてけばアグニも楽だろ？」

それはアグニにとっても、とてもいい案に思えた。

「ああ、良いぜ。俺も両手に薪抱えてたら帰るの遅くなるしな」

そう答えた時、アグニの身体は自然に薪を地面において、アキラの方に手を差し伸べていた。

するとアキラも同じように手を伸ばし、アグニの手を力強く、がっしりと握りしめる。

「じゃ、よひしくな。これから、俺らは仲間だ」

アキラの放つ言葉に、アグニは「^{おう}応つ！」と小気味良い返事をする。

その約束が、これから起ころる時代の奔流に大きな影響を与える事を、全く知らずに。

魔術都市ノエリア、その多くの部分を家に持つ大魔女キリアの邸。その客間は王宮の客間にも勝るとも劣らない豪華さと不可思議さを持っている。所々に置かれている調度品には、規則性が無いよ

うに見える。だが、それらは一つ一つ、そして全てにおいて意味を持つている。

私、アイリス大二王女の座るこのソファも、その前に悠然とたたずむ小柄な少女の周囲におかれた小さな人形達も、それぞれに、そして全体的に意味をもつものなのだ。

「で、二二ニヤよ。今度の客人は勇ましきものであつたか？」

少女は私を二二ニヤと呼び、質問をする。

二二ニヤとは幼少期の私の名だ。この国では13の誕生日に幼名を棄て、新たに一人の人間としての名を名乗る事を許される。故に通常の者が今の私を呼ぶ時は、アイリス様。などの堅苦しい呼び方にならなければならず、初めは私もこの呼び名は恥ずかしかつたため注意をしたのだが、全く取り合つてはくれなかつた。

「いえ、キリア殿。彼からは魔王の資格は感じられなかつたのですが、勇者の資格も読み取ることが出来ませんでした。これは、どう言つ事なのでですか？」

からかうような眼で、私を見続ける小柄な少女。その名はキリア。そう、少女の姿をしたこの者こそが、大魔女キリアなのだ。

「言つておぐが、1000年を生きたとて解らぬ事は有る。

二二ニヤよ、今度はもしかすれば、もしかするのやも知れぬぞ」

一言田の言葉は、そう言つ事なのだろう。今までの異那人わたらびとは、どちらかと言えば勇者の資格を持ち、そして魔王討伐を行つてゐる物が多數だった。

全く何もしない者が居なかつた訳ではないが、それにしても、あ

の成長速度は異常だ。

何か裏があるようにしか思えない。

「そう、ですか」

今回のノーリアへの来訪、それは親友の事を心配に思つての事と言つ事にあるが、本題はこちらだ。心配でない訳ではないが、優先順位としてはこちらが上なのだ。

そう、今度の異那人 ヒルガミ アキラが、勇者に成りうるのか、それともこの国、そしてこの世界を乱す魔王に成つてしまふのか。

それを大魔女であり、10世紀を生きる賢者であるキリアに答えてもらつ事で、今後の彼に対する対処を考える事。

「彼の者ならば、きっとこの世の、壊れに壊れた御伽噺をも、変えてくれるのではないだろうかの」

どこか遠くを眺めるように、キリアは呟く。

キリアの回答により、得られて事はただ一つ。解らないと言つ事。危険因子として取る事も出来るが、最高の客人であるとも言える。この状況を私の父ドラグノリア王に話したのならば、あの賢き王の事だ、彼を危険因子として取り、内密に処分してしまうのではないだろうか。

そんな危機感が、私を支配する。

「ならば、彼は大陸に避難させましょ」

真剣な眼差しで、私はキリアを見つめる。

「 そつさの。では、久々に大魔方陣でも行使するかの」

やはり遠くを見つめたまま、キリアは感じ取れぬほどに巨大な魔力を、やすやすと行使する。

魔術都市ノエリアに、緩やかな風が、吹き出した。

「で、何でこうなつてんの?」

白髪蒼眼の少年、アグニは半分呆れ氣味に、そう呟いた。

アグニの目前には、この森の主と思わしき真紅の大蛇 フレイムナーガと、それを漆黒の炎で焼き払う、これまた真紅の外套を纏つた少年 アキラが対峙していた。

対峙していたと言つても、その時間は数瞬。

突如アグニとアキラを囮むようにして威嚇を始めたフレイムナーガに、アキラが一言だけ言葉を発したかと思うと、その極大なる全長十メートルは有るかと言う巨体を黒い炎で包み込んだのだ。

自身が火属性であるにも関わらず、焼かれている事が理解できないのか、フレイムナーガは断末魔の叫びを上げる事も出来ずに灰となつた。

本来あの魔獸は火の海の中でさえも快適に過ごすと言つが、それを焼き払うとはどういう事か。そしてそれについて先程身を包まれていた事に、アグニは恐怖を覚えた。

フレイムナーガだつた灰の中から、アキラは魔光石を取りだすと、アグニに向かつて一言。

「大丈夫だつたか?」

のんきにも、笑顔で問いかける。

「肉体的には、な」

頬の肉をぴくぴくと引きつらせながらも、なんとか答えたアグー
だった。

最後の休憩だとアグーが言い、目についた大木に一人して腰を掛けた。

フウ、と一息ついてから俺

暁神

アキラ

に問いかけるアグー。

「なあ、その大剣、俺に見してくれよ」

「ん？　ほい」

見習いとはいえ鍛冶師だからか、俺の背負つ大剣に興味を示すアグー。その瞳はキラキラと輝いている。

それに対しても俺はこの大剣は、筋持久力の修行として使っているだけだ。特に執着もない、でもまあ愛着は有るんだろうか。

そんな事を考えつつ俺は、背負つた大剣を抜き放ち、直ぐそこの地面に突き刺した。

ヒュン、と言づ音を立ててアグーの頬を俺の大剣が掠める。

「ウオオオッ！　おまつ、危、アツブネエエー！　切れたらどうすんだよ！」

「あぶ」と、顎が切れてるし！　後で覚えて口ボオオ……！」

叫び続けるアグニに田もくれずに、その口を強制的に塞いで治癒の魔術をそのままかける。

「休憩の時くらいは静かにしてくれよ。気が休まらねえ」

「イツに傷がついたやいけねえ、それ故に俺は常に極薄の獄焰を全方位に放出している。ある種のクモの巣のようなモノだ。これに魔的なモノが引っ掛ければ直ぐに焼き尽くして、魔光石を回収するのも少し疲れる。」

「ゲホッ、ゴホッ。悪かった、じゃあ、見せてもらひ」

塞いでいた手を取ると、俺は感覚を黒焰へと移す。

今の所魔的なモノの気配はしない。むしろ前方からは清らかな気配が、ん?
街、か?

意識を前方の街らしき物に移す。極薄の黒焰は、霧状に成るまで薄く、薄くしていく。

すると、

「ツーーー！」

大きな壁に当たったかと思うと、脳に激しい痛みが駆け抜けた。

意識は、完全にここに戻ってきた。ヤバイ、これはきっと……気が付かれた。

「アグニー。」

大きく叫びを上げる。

「な、なんだよ……」

驚きに身を竦めるアグニ。

こちらを見ているのだろうが、俺は振り返りもせずに立ちあがる。

「それ、お前にやるよ」

そう言って漆黒の炎で身を包み、記憶の中にあるギルドの依頼で行つた事のある辺境の村を思い浮かべる。

「ちょッ ！」

アグニの焦つたような声が聞こえた気はしたが、聞かなかつた事にしよう。

門の魔術で、俺はその場から逃げだした。

一言だけ言い残して、黒焰に身を包まれていくアキラ。

「ちよつと待てよー どうしたんだいきなりーー！」

焦り叫ぶ俺の声は、虚しく森に木霊する。

木の周りを歩いてみても、さつきまで暁の居たそこには何の痕跡もない。

視界の端に映つた漆黒の美しき焰は、きっともつと大きな力が有

るのだろう。今まで見た炎の中で、あそこまで俺に恐怖させた炎は他になかった。

「……どうすりゃいいんだよ、相棒」

仲間と呼ばれて、俺は嬉しかった。

一緒に休んで面白い話もしたし、アイツの話は俺を夢中にしてくれた。

相棒と呼ぶ事も、許してくれた。

もっと多くの時間、共に笑っていられると思つていた。

一息、溜め息を吐いて歩き出す。

右手にはアキラの使っていた大剣を持つ。刃こぼればかりで、切れるようには到底見えない。

「バカかよ……」

それを使って魔獸をさんざん切り捨てていた姿が、未だに瞼に焼きついている。

視界が、緩やかに滲んでいく。

「ホント、バカかよ」

柄の布をめくれば「いつか返しに来い」と、無茶な願いが焼きつけられていた。

「バカはテメエだ。どれだけ薪持つてきてんだ！　俺は両手に持てるだけと言った筈だろ？！」

「え？」

聞きなれた偏屈な師匠の怒声に、俺は顔を上げる。するとそこには、うず高く積まれた薪の山。

「アイツ、絶対見つけてぶん殴つてやる。

まずは、この町一番の鍛冶師になる。そんでもって、この剣強くしてアイツの前に現れてやる」

涙にぬれた顔をぬぐい、俺は工房に走りだす。

力強い独り言は、誰に聞かれるでもなく熔けていく。

アグーの見た薪の山の端には、小さく。やがて、本当に小さく「俺は旅に出る。お前はどうする?」と、見廻りの俺に対し、とんだ皮肉が書かれていた。

E p17 : 辺境の村ノリス（前書き）

気付けば、書いている自分が居る（・――）
テスト前に何やってんだか……

降り立つたのは、辺境の村 ミノリスの浜辺。

ここは、漁業が主収入の村だ。貿易は他の海沿いの街に制限されており、この村は基本的に平和な良い村なのだ。行商人は多くはないがそれなりに来るし、圧制を敷くような悪い貴族が統治している訳でもない。治めているのは人の良い初老の好々爺のじい様。俺としてはとても好ましい村だ。

村人の男は大抵が筋骨隆々と言う、男としては出来れば長居をしたくない場所でも有る。

何故そんな場所を選んだかと言うと、ここが一番あの魔術都市から遠く、そして見つかり難いと判断したからだ。

逃げた理由は数多くあるが、大きく分けて二つある。

一つは、先程の魔術都市への不当な探索。これはアイリさんから重罪になると聞いている。

あのタイプの結界術は、逆探のような機能もあるのだ。あの距離ならば、数分とせずに大魔女キリアとやらの弟子やら護衛の兵士やらの者たちが駆け付けるだろう。それならば見付かる前に逃げ出し、俺はあの盗賊達との戦闘で死んだ事にしてしまえば良いだろう。

俺が重罪人になつて、苦労するのはアイリさんだ。

彼女は良くなしてくれたし（稽古はキツかった）、俺としては彼女に酷い迷惑はかけたくない。

一つ目は、最近王宮で起きている派閥間の抗争らしきものだ。何故だか現王とアイリさんと、もう一人。第一王子様を頂点にす

る王侯派に、自警団や騎士団をまとめて市民の人気を取っている騎士団派。あと何故か解らんが共同で行動する男神官を頂点にする口学派^{カツバ}……、ん？ 最後才カシイな。

まあ良い。そんな事が有り、俺こと暁神曉は王侯派の強大な戦力になりうると言う事で、最近事故に見せかけた攻撃行為が増えてしまいだし、逃げた方が良さそうだったのだ。

アイリさんや、第一王子の方が単体で小国くらいなら制圧できる戦力を持っていると言つのに、莫迦らしい。きっと戦力になりきる前に潰そつてのが魂胆だつたんだろうが、俺はそんなのは「メンだ。だから逃げた。

「ああ～あ、格好ワリイな」

額に手を当てて、悪態を吐く。頭をぐしゃぐしゃとかきながら、行つのは自傷行為。

本当に格好悪い、俺はアイリさんに迷惑をかけないため、と言つ建前により、王宮から逃げたいと言つ本音を自分に対し納得できるように提示していたのだ。

一度逃げたからにはもう戻れはしない。それならば、次回は（それが有るかは解らないが）絶対に逃げないようにしよう。今の俺を縛りつける鎖は、この世界には一本もないのだから。

「よし、それじゃあ

「

力強く拳を作り、覚悟を決めて言葉を放つ。

「冒険だ！！

あの王宮には、勇者と魔王の過去は有つたが、現在の所魔王が現

れたと言つ情報は無い。

ここに来る前の世界の自称神が言つことは、もうすべに表れると言うことらしいが、アイツの情報はきっと捩子曲ねじまがつてゐるだろ。そんな気がする。

多分後一、二年は出でこないはずだ。

ならば、ならばだ。

幼い頃からの夢、大冒険をする事くらい、良いのではないだろうか。

ここに来た使命を忘れようとは思わない。それに身体カラダ、精神ココロそして能力も強くしていくつもりだ。それでも、男が夢を追うくらい良いではないか。

心には覚悟を、身体には決意を刻み、歩み出そう。これからは、何も守る物の無い、正真正銘の冒険だ。

その為には、

「まずは路銀を手に入れなきゃな」

一つの世も、そして世界も。先立つものはお金である。

ひさやかに、けれども五月蠅くない程度に耳に伝わってくる市場の喧騒。

値切るおばちゃん、断る親父、そこを何とか、持つてけドロボー。色々な声が聞こえてくるなか、アキラは魔光石の換金所となる役所

を田指していた。

この辺境の村にどこから人が来る事は稀だ。

理由はそれだけではないが、アキラに突き刺さるような視線が四方から浴びせられている。

少しだけ居心地が悪い。そう思つてると、後方から声がかけられた。

「あの。あのっ、冒険者ですか？」

「ん？ そうだけど……」

振り返り、簡素に応える。アキラは知らない人としゃべるのは余り得意ではない。

その声は何処か幼げで、後方からと重なつも、後ろではあるが斜め下側から発せられていた。

「あっあのっ、これ。これ依頼料です。おね、お姉ちゃんを、助けて下さいっ……！」

その幼い声の主は、やはり幼かつた。

顔は田深にかぶつた、ローブに付いたフードで良く見えないが、背丈と声音から判断するに四、五歳の少年だろう。

その少年が手を高々と上げ、「依頼」を頼みたいと言つてゐる。

見ると、その服はズタボロ。見上げる気配には恐怖がにじみ出でいる。

きつと今掲げてゐるのは、この少年にかき集められる最高の依頼料、そしてこのような事を何度も繰り返してきたのだらう。掲げた手はフルフルと振るえ、アキラの気配を探つてゐる。

受けてしまおうか。

そんな思いが脳裏をよぎる。それはきっと、トラブルのもと。引いてはならない紐の先。

安請け合いはしてはいけない。

本来、そんな事をしてもアキラには何の利点もない。

「解った、俺が助ける」

それでも、言ってしまった。

最近は反射的に行っている氣もあるのだが、アキラは思つのだ。
断つたりすれば後味が悪い。ならば、受けて苦労した方が何倍もましだ。

アキラの生き方は、なんとも不器用で、小汚くも正しきものだ。

少年はアキラの答えを聞き取ると、今まで見えなかつたその顔を見える所まで上げた。

ボロボロのローブの下では、透き通つた空色の瞳が、アキラを見つめていた。

「本当、ですか？」

頭髪は確認できない。けれどもその瞳は、これまでにないほどに未来を見つめている。

弱弱しくも、確かな命の息吹。この少年は、じりじりのくらい頑張つたのだろう。それは解らない。解らないが、その行動の結果を作り上げる事くらいは出来る。

然りと、少年の手に乗ったわずかな依頼料を受け取ると、アキラは一言。

「本当だよ」

命をかけた願いには、それ相応の結末を。

少年の透き通った瞳を、アキラは懸かんがらも真っ直ぐな視線で、見つめ返した。

少しの間、村を外に向けて歩くと、隔離されるようにしてポツリと建てられた小さな小屋が見えてきた。

壁は木製、周囲には小さな田畠が一つ一つと有るばかり。

それは見ただけで、家主が金品を一切持っていない事がうかがえる。

「リノが家です。でも、何で家なんかに？」

ここに来るまでに話しただけで解るほどに、この子は聰明な子だ。その話によると、この子の家は三人家族。母は病弱で働くにしても内職くらいしかできず、父はもう数年前に他界している。実質的な働き手は姉と自分の二人だけ。そして自分もそこまでの仕事はする事が出来ない。

そこでこの子のお姉さんは、苦しくなった家計を支える為に小さいながらもこの村にあるギルドの依頼クエストを行い、この家の家計を支えていたらしい。

今回は受けられるクエストのランクを上げる為に受ける、ギルドの特別なクエストを受けたのだが、そのクエストが行われている中、

通常ではありえない程に強い魔物が現れた。モンスター

そのせいでこの子のお姉さんは重傷を負い、ギリギリで逃げてはいるがいつまた襲われるかも解らない状況に居ると云つ事が解っている。

その時に理由は説明をしてある。

その為発せられた言葉には、確認の色が強い。

「まず、君のお姉さんの気配、顔形などを知るため。それと、今身につけている物の確認がしたいんだ」

何を悠長などでも云つようにして、最初はこの子も食つてかかつたが、優しく説明をすると理解したようで直ぐに案内をしてくれた。今のアキラならば見つけたい生物の持つ特有の熱波動、むしろ生イオウエーブ命波動バイバとでも云つべきものが感じ取れるようになつてている。だがそれにはその対象の身につけていた物や暮らししていた場所から、それを覚えておく必要がある。ここに来たのはそのためだ。

そして今身につけている物の確認だが、それは同じようなモノが家に有ると云つていたため、それを見ておこうと思つていてる。

「じゃあ、確認してください」

ローブを着たまま、アキラには警戒して素顔を見せようとしない。どんな事情があるのかは解らないが、依頼は受けた。

「ああ、出来る事は全部やつとこ」

いつ倒壊してもおかしくはない無いだらうと言つ程にボロボロな家に入り、誰にともなくアキラは呟く。

ルの外に、血分と回り廻らせねばもご、ヒ。

ＥＰ－８・辺境の村のお姉さん【▽▽妖】（前書き）

フフフ、色々と間違っている気はしますが、投稿（*^-^*）
テスト？ 何それ、おいしいの？

な感じの今日この頃。

まあ、そんな私は置いといて、バトルバトルなＥＰ－８をじりついで
(^-^)

ミノリスの村には、一般人は立ち入り禁止の危険区域が三つある。一つは海辺の洞窟。もう一つは古に造られたと言つ小さな幽霊屋敷。最後の一つは、死碑の森と呼ばれるこの森だ。

一步踏み入れば其処はもう魔獸の巣。

魔物と魔獸との区別は、基本的にはそこにずっと住んでいるのが魔獸。魔力さえあればどこにでも出現するのが魔物、と言つたところだ。

ここはそこに住みつく魔獸の巣なのだ。特に居るのは猪や鹿などの獣、その中でも水や土の属性を纏つたもの達が多い、魔獸の巣としては比較的レベルの低い物でありこのものにならば、致命傷になるような傷を負わせることが可能である存在は居ない筈だった。

そう、
筈だったのだ。

「何で、何であんな化け物が……」

息も絶え絶えに、一人の女性が木の上で深く刻まれた傷の治療を行っている。

その傷は明らかに、刃物で切り裂かれる事によりできた裂傷。右肩から左わき腹にかけて大きく切り裂かれているその状態は、むしろ生きている事が不思議な程だ。

「あの子の、あの子の為にも私は死ねないんだ」

女性、ミコイ・ミヒーチェは頑なに死を拒み、命からがら逃げて

きた。突然現れた獣と武器の混じり合ったような化け物から。

今の所ミリイはこの小高い木の上で身体を治してはいるが、いつあの化け物が血の匂いを嗅ぎつけてやってくるかも解らない今の状況では、精神的にも肉体的にも殆ど休めているとは言えない。要するに、彼女は今極限状態なのだ。

「ギルドへの連絡はしたし。後は、アイツから逃げ切れば……」

極限状態だからとはいって、思考が止まる訳ではない。と言ひよりもむしろ、今止める訳にはいかないのだ。

止めれば確実に、次の瞬間ミリイの息の根が止まる。

そう、思考して思考して、生き延びる術を探さなくては。

ヒュン、ヒュンヒュンヒュン

風の、流れる音がして、

「嘘……！　何でアイツが

「

彼女の意識は断裂した。

空間転移で、アキラは死碑の森へと降り立つた。

身につけている物は未だ変わらず、緋色の外套のまま。

「なんだ、この感覚」

空間が丸ごと自分を押し潰そうとしているかのよつた、異常な圧力がアキラにかかる。

それは以前にも浴びた事のあるもの。剣氣とも、魔力とも違う禍々しく濁んだ怨念。

アキラはその感覚に眉を顰めて、何かに気付いたように呟いた。
「どうか、これはアイツらの気配だ。あの時は必死だったから解らなかつたんだ」

そう、それは憎きモノの気配。

今を生きる人間としての、嫌悪感。

悪しきそれへの憎悪が、ふつふつとわき上がる。

「俺が、刈り取つてやるよ」

言つて、アキラは索敵の為に煙状の黒焰を周囲にまき散らす。悪しきソレの気配は異常、数個の魔獸の気配を無視して、憎むべき物を探し出す。

アキラの脳裏からは、もう既にあの子供の姉の事など消え失せていく。

何処までも、何処までも手を伸ばす。

己が獲物を探し出すまで、嗅覚を、触覚を、聴覚を、視覚を、五つの感覚内の四つを動員した最高の網で、求める。

その姿は、どちらがケモノか解らない程に、野生の本能が剥き出しへなつていて。

「そこか

少し遠いが、それくらいは空間転移でどうにかなる。

瞬時に術式を起動して、標的に己が銃口を向けて、撃鉄を上げる。

吹きすさぶ突風、鎌の手を持つ人間と同じ大きさの化け物は、唯一この森に侵入してきた柔らかい肉塊を生きたまま捕食する筈だった。

突如出現した緋色の硬い肉塊に邪魔されなければ。

緋色のそれに、鎌の化け物は憚視感を感じる。見た、と言うよりは知っていると言った方が適切な程にその記憶はあいまいになつているのだが。

「よお、元氣がクソ野郎。そんでもって、燃え尽きる！」

吐き出されるは、汚い言葉。その言葉が孕むのは、完全な敵意。

圧倒的な憎悪を以つて、その男 アキラは言靈を発した。

その化け物には理解する事は不可能だが、感覚的に察知する事くらいは出来る。

言靈は惡意を持つて、鎌の化け物の身を焼く黒い焰に移り替わる。

『GIAAA!-!』

苦しみに叫ぶ獣は、瞬時に身体全体に風を纏つてその焰をかき消そうとする。

本来ならば、それにより火は消える。だが、今回は消え無かつた。アキラはそんな事は関係ないとばかりに、言靈を飛ばし続ける。

「燃えろ、燃えろ、燃えろ！-!-!

燃え尽きる！-!-!

彼はその力を理解しない、重ね掛けした言霊により、激しい頭痛にみまわれながらも更に言葉を紡ぎ続ける。

優しげなその顔を、憤怒の想いに染め上げて。

「‘燃え尽きる’^{カマイタチ}鎌鼬がああ！！」

彼が焼き払うのは、日本妖怪鎌鼬。

本来の力である風の刃を使う事も出来ず、彼の獣は漆黒の焰に喰い尽くされる。

まるでアキラがその身を喰いちぎられた時の焼き増しをするようにして、存在が消し去っていく。そこに居ると言つ事が、生きていると言つ現実が、絶対的な死の権化たる辻のアヤカシが、憤怒の焰にかき消されていく。

アキラの放つ怒声により、切り裂かれた木とともに地に伏していたミリイは目を覚ました。

朦朧とするその瞳は、燃え上がる黒焰を確かにとらえた。

「……綺麗」

氣を失っていた事も忘れるほどに、その焰は清らかだった。

漆黒の焰が、悪しき塊を焼き祓う。

絶叫の後、未だ炎熱の手を緩めない少年　　アキラにミリイは安心を憶えた。

轟々と燃え盛る黒焰は、やがてその火の手を緩めていく。少しづつ消えていく美しき火に、ミリイは目を奪われる。

本来、黒とは禍々しきものであると言つて、あの焰はどこか温

かい気配がする。

全身が包まれていく感覺。

それはまさに、母に抱かれていたあの幼き頃のよつた心地良さ。

「何、アレ……」

消えゆく漆黒の中に、何かが見える。

アキラはそれに近づき、柄らしき物に手を添える。

ピローン

それをアキラが握った瞬間に、周囲に小さな音がする。

場違いな音に、ミリィは疑問を浮かべるが、それは些細な事。

「デスサイズ
処刑鎌……！」

アキラの持つ何かの形が、日光により露わになる。ミリィの目に、大地より引き抜かれた強大な翡翠色の大鎌が、しつかりと映つた。

EP19・辺境の村の家族【絆】（前書き）

考えてみると、私は戦闘描写が苦手なようですね。
そもそも普通の描写も苦手と/or。

あ、いつかえると私って才能ないっぽいですね（汗
ふう、精進精進。

これからも頑張つていきたいと思いますので、ここまで読んで下
わった皆様、気が向いたらアドバイス等、宜しくお願ひします^_^（
――）^

「ねえ、アキラ。貴方って何者なのよ」

いぶかしげな声で、ミリィはアキラに問いかける。
その問いに対してもアキラは、おどけた調子で気楽に答える。

「俺？　俺は冒険者わ。ただのしがない冒険者、それが俺」

喜々とした声で言つアキラ。その顔にはべつたりと笑い顔を張り付けている。

対するミリィは、ピンク色の肩で切り揃えられた髪に、切れ長の目、瑠璃色の宝石のような瞳。

胸は案外と大きく、スタイルは平均以上には良いだらう。その全身を使い、アキラに置いていかれまいと頑張つてゐる。

そんなミリィに対して、アキラはいつも着てゐる緋色の外套を着せて、ずんずんと森の出口へと進んでいく。

外套を着せている理由は簡単、先程の鎌鼬^{カマイイタチ}の所為でミリィの服がズタボロになつていてるからだ。

それに関してサラは『主^{あぶ}、それには吾^{われ}も宿つてゐるのですから、もう少し躊躇^{ちゆうしゆ}を……』と悲しそうに言つっていたのだが、それはまた別の話である。

「それじゃ答えになつてないわ、何で貴方はあの鎌の化け物を倒せたの？　それに、あの黒い焰はなんだつたの？」

ミコイの抱える疑問は尽きそつにない。

少々疲れている一人であるが、両者とももつ魔力の残量はそれほど多くないため、門^{ゲート}の魔術で一気に移動する事も出来ずに歩いている。

「氣のせいだ氣のせい、俺黒い焰なんか知らねえし。
それに鎌の化け物ってなんだ？」

「こゝへきて、しらを切り始めるアキラ。

なかつた事にしようとしている物は完璧にミコイに見られている
ため、あまり意味はないのだがそれでもあがこゝうとしている。

「貴方嘘が下手なのね。私は貴方が黒い焰の中から大きな鎌を取り
だしてどこかへ飛ばしたの見てるのよ？」

前を向いたままで顔を見る事は出来ないが、アキラはきっと明後
日の方向を向いて答えているだろう。

それに対してもミコイは少しびつアキラを追い詰めようと奮闘して
いる。

「それもきっと幻覚だ。そんなもん俺知らねえし~」

つこには口笛を吹き始めるアキラ。発せられる声は完全に棒読み
である。

ミコイは、少し追い詰めすぎてしまったかしら? などと思つて
いる。

「あれ、もうすぐ村じゃないかしら」

ミコイの一言がアキラの耳に届く時、その声は小さな子の大きな

歓声によって、打ち消された。

「おネエちゃん！！」

「チースティ！！」

ミリィは、その小さな子 チースティに向けて駆けだした。
その顔は、アキラとの道中で見せていた顔からは考えられないほどに嬉しそうだ。

涙を流し、抱き合つ二人。

完全に傍観者と化したアキラ。

「美しい家族愛だな。羨ましいこいつた

能面のようになつて凍りついた顔で呟いた。

瞬間、アキラの右と左に白と赤の光球が現れる。今回アキラの魔力もないため、実体となる事が難しいようだ。

『アキラさん』
『あくじ
主よ』

一つの光球はリンとサラ。

ほぼ同時に発せられた最初の呼びかけに、アキラは虚ろに「何だ？」と反応する。

『私達が』『主の』『家族です』

声だけで読み取れるほどに、一人の気配は優しさに満ちていた。
それは、感じた事の無い母の気配のように、アキラを包み込む。

「ハハツ、そうか。家族か」

手のひらで顔を押さえ、ズルズルと鼻水をすするアキラ。その手の下からは、大粒の涙が零れていく。

アキラの言葉は、振るえていた。

その後の精霊一人。精霊の社会（仮）にて。

「リン、何故そなたの方が先程セリフが多くったのじゃ。吾ももつと主を元気づけたかったのじゃぞ」

サラは少々怒り気味。

「そんなの決まっているじゃないですか。私の方が、先輩です（アキラさんとの契約的に）」

クイックと、お酒を呑むふりをして大人ぶるリン。その年齢は一歳未満。

「そ、そんなの年で言えば吾の方が……」

最後の所で言い淀むサラ。精霊であれ何であれ、女性にとつてこの話題はタブーらしい。

「「アハハハハツ。サラ、墓穴掘つてやんの~」

本日も、この世はとても、平和です。

Ep19・辺境の村の家族【絆】（後編）

どうでしょうか。

短いっすねえ（・_・）

どう考へても。

精進精進。

では、またの機会に。ノシ

E 220・断罪の鎌（前書き）

今回からは一話からの見直しも込みでやつてこりますので、投稿が遅くなつてしまつかもしませんが、ご理解のほどを、お願いします。^_^(ーー)^_

では、第一回話、「断罪の鎌」をどうぞ。

「アキラさん、我が家の方にこんなことまで。
ありがとうございます」

ベッドの上で、心を込めて礼を言つてリィ達の母 シイル。
辛うじて身体は起こせははるが、それでも氣を張つてゐるのが
明らかに、彼女は衰弱してゐる。

断続的に続く息継ぎの音によつて、彼女が弱つてゐる事が聴覚から
も解つてしまひ。

「いや、こんなのは当然ですよ」

手を畠の前で振りながら、虚言を吐く。

アキラはこれを当然だとは思つていい。本来はこのまどか
で路銀を手に入れて直ぐにでもこの国から出でていきたいのだが、今
出ていけば後味が悪い。

その為仕方なくここに留ると言つた方がいいだろ？

「ですが、我が家の方にこんなに働いてもらつてはいるのこ

そつ、アキラは今このミリィ達の家の掃除、洗濯、炊事、ついで
に薪割りなども行つてゐる。

それと並行してシールの身体を治すためのお金も集めている。

これを親切と呼ばずして、何を親切と呼ぶか。アキラは自分の性
格を解つていながらも、変えられない事がもどかしいらしい。作業
中はずつと妙な顔をしてゐる。

「こえ、その代わり一皿は泊めでもう一つ事になつてござるんです。これくらいしないと」

行動の理由はそれ、良く三つ一宿一飯の恩義とでも言おつか。アキラはそのようなモノを感じているらしい。

せつせと働くアキラは、床の掃除を終えて次は窓ふきを始めている。

「良じいじゃなこお母さん。アキラがやるつて言つてゐるんだから、受けてやるつよ。

それに、あの子の為だと思つて、わ」

母の看病のため、部屋の中で果物の皮を剥いていた。彼女の放つた最後の言葉は振るえていた。

「やつですよ。俺の事は気にせずこ、いつも通り過ごしてこて下さ
い

笑顔で窓ふきを終えて、ミロイとシールの方を向くアキラ。

その顔は能面などではなく、心の底からの感情を表していた。

その日の夜、アキラに『えられた部屋の中。
入口から見て右奥の端に位置した簡素なベッドのつえで、アキラ
はリンとサラの二人の精霊と話しこんでくる。

「なあ、サラ。今日のカマイタチつてここの生息してたりする?』

こつになく真剣に、額に手を当てつさうと唸りながら考えてい

る様子のアキラ。

それに對してサラは、その四等身の身體をふよふよと浮かせつつ、それでも真剣に返答する。

『主、それは有りませぬ。向ひの世界に居る神が言つておつたであつひ？ アレはきっと主の世界から渡つて来たものじゃ。吾り精靈の方でも、酒場などでは土地を荒らし回るものとして尊になつておつたのじゃが……』

サラにこの言葉が詰まるのに合わせて、リンがそれを補足する。

『サラの言ひ通り。あの鎌鼬カマイタチは、確實に向ひの世界のモノです。それにある靈格、きっとアキラさんの肉体を喰らつた者の一体でしょう。彼の神は何をしてこるのでしよう？』

アキラの元いた世界で、じちらに来る寸前に彼はこう言った。『あの妖怪たちは、私達がなんとかしましよう。ですから貴方は私の言つた事に集中して下さい』確かにそう言つた。

なんとかが何かはアキラもリンも知りはしないが、確かにそう言つていたのだ。

リンの最後の言葉もうなずける。

「ホンシト。あの野郎帰つたらただじゃ済まされえ」

『ハハハ、と後に黒いオーラを背負いながら拳を作るアキラ。頬はひくひくと痙攣し、怒りを露わにしてくる。一言でいえば努髮天ドハツテンだ。

その顔は般若の如く。幻覚か幻影か、リンとサラの皿には、アキラの額に鬼の角が生えて居るよつに見えた。

乾いた笑いを漏らすリン達に気付いたアキラは、一瞬で後ろのオーラを取つ払い、額の角をへし折った。

「つと、そう言えばリン。あの時手に入れた大鎌オオガマだけど、なんかおかしな感覚するんだよな。調べてくんねーか？」

快活な笑みでリンに質問をするアキラは、応用魔術で作った黒焰に手を突っ込んで、昼に手に入れた大鎌を引き摺りだす。その鎌の柄は風をモチーフにしたような柔らかな形。そして先端には、鋭利な刃物。

『アレ？ アキラさん。それ、鎌なんですね？』

本来その横に有るべき大きな鎌の刃は、そこには存在していなかった。

アキラはリンのその妥当な質問に、否定を示した。

「いや、それは鎌だ。こつやつて魔力を流せば……」

昼の殲滅（と言つたようがいいのだろう）の時に使い切りはしたが、驚異的な回復力で戻つた魔力を注入するアキラ。

その瞬間、先端の刃の根元。

本来、鉄で出来た刃が有るべき場所に魔力が集束し、そして。

見えない刃が現れた。

『風、じゃと……ー？』

それを感じ取つたサラは、驚きの声を上げる。

一応夜であるため、その声は小さめだ。

『これは、ハッシュ・ポン古代武器でしょうか？

失われたはずの過去の遺産が、何故この時代に？　それにアキラさん。何故扱い方を知っているんですか？』

質問を連発するリン。

その理由は明白。魔力を元に変化を起こし強化される武器は有れど、魔力自体が攻撃の手段に変化する古代武器はもつ千年以上昔に失われてしまっている。

失われた過去の遺産、その使い方をこの世界に来て一ヶ月も経たない少年が知っている。移動をすれば世界自体がその地の常識や知識を教えてくれる彼女ら精霊とは違い勉強をしなければ覚える事も何も不可能であるはずの少年がいた。

それはどのような奇跡か、リンはそう言つた事に対しても疑問を感じているのだ。

「それは解んね。これ掴んだらなんか色々頭ん中流れてきたから、そのせいだとは思つんだがな」

癖の強い髪の頭をかきながら、もどかしそうに言つアキラ。
その顔は嘘を言つてはいるようには見えない。

『そうですか。なら、ギルドカードの機能で調べてみましょ。その鎌は放さないでくださいね』

仕方なさそうに言つリン。

リンが一言『召来』アンガオカションと呟くと、ギルドカードが現れる。召来と言つのは、ギルドカードを呼び出すためにこの世界の殆どの国で使わ

れるようになった呪文だ。子の呪文は本人だけでなく、その所有者と契約している者も呼び出すことが出来るようになっている。

カードに映りだすのは前回の表示。
それを人差指で触つて、今回は『武装』^{アルム}と呟く。それによりカードに映った情報が変わっていく。

『この武器は』

瞬間、三人に衝撃が走る。

現装備

武器：大鎌 クリム・ブロード・フォード 罪ヲ断ズル大鎌

特性：攻撃性の強い完全不可視の風刃。
飛び行く斬撃。

魔力による刃の生成。

古代武器。

靈体断裂。

防具：長衣 サラマンドラ・プロテクション \ 火精靈の外套

特性：火精靈との契約（相性による）。火焰攻撃系魔術の習得。
火耐性（大）。守備上昇（15%）。

武器の名は「罪ヲ断ズル鎌」これは靈体自体に攻撃をする事を可能とする、異常な武器。

靈体とはどんな生物、物体にもある存在そのものの核とでも言つべきもの。それを攻撃する事が出来ると言つ事は、どんなモノにでも攻撃手段を持つと言つ事。

それは神に仇成す、常識外れの希少武器。

「無敵じゃねえか」

アキラの一言を皮切りに、呆れかえる一回。

『これは、最終手段ですね。基本的には異空間にしまっておいた方がいいでしょう。あと、アキラさんはもう寝た方がいいでしょうね。もつすぐ魔力が尽きますよ』

冷静に、淡々と今後の方針を決めるリンク。きつともう慣れてしまったのだろう。

「そう、だな」

手を放すと、鎌に生えた風の刃は消えた。黒い焰の中に大鎌を投げ込むと、倒れるようにして眠り始めるアキラ。

『主は、どこまで強くなるのじゃね? な。今は今の主の持つ力でさえ信じられんと言つのに』

スースーと言つアキラの心地良さうな寝息を聞きつつも、遠い

田をするサラ。

アキラの持つ魔力は常識をはるかに凌駕するもの。

『何処までも、じゃないでしょつか。男の子なんですから』

『そう、じゃな。主はきっと何処までも強くなる。田的の為に』

二人の精靈に流れていた魔力は、アキラが眠る事によりアキラと繋がっていたバスが閉じられる。

遠く、遠くを見つめる一人は、闇夜に溶けて行くようにして、消えていった。

Ep20・断罪の鎌（後書き）

どうでしたか？

これから主人公アキラの冒険が始まります。

冒険の夜明けとしては、上々なものを書けるようにこれからも精進する心積もりではあります、至らない点がありましたら、遠慮なく言つてきて下さい。

では、またの機会に。ノシ

Ep21：さあ行こう、幽靈屋敷（前書き）

冒険開始の主人公達（*^-^*）
まずは村の中の進入禁止区域からお送りします。

ミリィたち、ミーハー一族家の朝は早い。その中でも一番起きるのが早いのは、何を隠そう今洗面所で顔を洗つて居るミリィである。

「ん？ 何この音？」

顔を洗い終えると、鋭い風切り音が何度もミリィの耳に届いた。その音はどうやら家の外、村のはずれにあるために自動的に広くなつたミーハー一族家の庭から聞こえてきている。

ミリィが知るなかで、こんな朝早くに起きる者はこの家には居ない。ならば昨日からこの家に泊まる事になつた妖しいアイツ以外には居はない。

そう決めつけたミリィは、昨日の内に一気に綺麗になつた狭い廊下を抜けて、悪戯心にドアから遠回りに外に出る。

「フフフッ、ビックリするかしら。

アキラの驚く顔つて面白そうだし、後ろから声掛けてやろう。

瑠璃色の瞳を子供のように輝かせ、今から行う悪戯を考える。初級魔術で驚かせようか、木の枝でも投げつけてやろうか。

何か棒状の物を使って素振りを行つている様子のアキラを余所に、悪戯の計画をし始めるミコイ。

「ホントの事言おうとしないアイツが悪いんだもの。私は悪くないわよね」

昨日アキラが嘘を吐いた事を未だに根に持ちつつ、アキラの居る
であろう庭の周り、少々手入れの行き届いていない雑木林の中に身
を隠す。

「さて、最弱設定の魔弾くらいでいいわよ、ね……？」

その身を完全に隠し終え、庭の真ん中。ミリイが魔力回路に火を
くべて、魔術発動の準備を行い始めた時、アキラの居る場所から聞
こえていた風切り音が消えた。

「何してゐのかしら？ アキラ」

ずっと行つていた素振りらしき事を終えて、今度は仁王立ちをして、胸の前の空気を両手で包むような型をとるアキラ。

その姿は堂々としていて、雑木林の中のミリイにさえも動く事を
ためら
躊躇わせる。

小鳥のさえずり、木々のざわめき、朝露の落ちる音。
その全てが消え失せて、その空間は無音となつた。

完全な静寂の中。

アキラは突如、言霊を放つ。

「来たれ、太源の一角を担う者。渦巻けよ火の精

」

「なつ、アイツこんな所でッ……！」

中級攻撃呪文の呪文詠唱。アキラは最低でも小さな森一つを焼き
払う事が出来る程に強力な魔術を詠唱している。

今そんなものを使えば、ここ一帯は火の海と化すだろ？

アキラの構える手の内側の空氣が捩子曲がり、視認可能な程に超高密度の魔力の塊が形成される。

徐々に成長していく大量殺戮の種は、アキラの右手を包み込む。

「我が手に下りて、汝等が力の一片を、我に示せ」

破壊そのものとでも言つべき魔力を右腕に纏い、その腕を天空へと突き上げるアキラ。

「……燃える竜巻」
ブリガード・トルナード

右腕は赤く発光を始め、超高熱の小さな竜巻を作り出す。詠唱を完成させた上位呪文に、脅威に対する最後の抵抗をしようとするミリィ。

「アキラ……！ やめて！」

雑木林の中、出来うる限りの絶叫をするミリィ。ミリィの必死の叫びは、アキラを中心にして竜巻にかき消される。そして竜巻が最高速にならうかと言つ時、

「え？」

その全てが、黒い焰にかき消された。

周辺の空氣を巻き込み、天空を貫くはずだった紅き魔力の塊は、最初からなかつた事のようにして、漆黒の焰に焼き尽くされた。

「よし、概念破壊の特性もマスターできた」

雑木林の中に隠れたミリィ。

嬉しそうな微笑みをたたえたアキラ。

この瞬間、アキラの秘密は、ほぼ全てミリィに知られてしまった。

今朝のミヒーチ家の朝食は、少々かたいパンのトーストにオーブンスープ、そして死碑の森の植物サラダだ。

他二品はいいが、最後の一品はアキラにとって頬をヒクつかせざるを得ない代物であつた。

「口じやん」

サラダを見てから最初のアキラの発言は、そんな物だった。

何を隠そう、そのサラダの名は百口草。妖怪百目鬼と同じようにして、過去の勇者が付けた名だとか。

名の通りその草は、百もの口を持つ薬草。良薬口に苦しと言ひつ事もあり、見た目はアレだが効能は最高級。筋疲労や小さな傷などは薬草の含む水系統の純粹な治癒の魔力で回復される。

一部の薬屋では重宝されていたりする代物だ。

チースティに差し出されたフォークでアキラはそれを食べた。ドスツと音を出しながら、差し込まれたフォークの音と同時に、薬草のいたるところに有る口が悲鳴を上げる。

「ウエツ、五月蠅えな^{（ハナガサナ）}」

片手で耳を塞ぎつつ、それでもドレッシングのたっぷりかかった

口型のサラダを口に運ぶ。

「そうですか？ 私達はいつもこうだから解りませんけど、嫌な
ら食べなくても……」

三人で囲んでいる机、アキラの向かい側。その席に座るチーステ
イが言つ。

「何言つてるんだよ、どんな見た目でも味は食べてみなけりやわか
んねえだろティム。食わず嫌いは嫌だからな」

青ざめた顔で言つアキラ。その手はフルフルと震えている。
ティムとはチースティの愛称だ。昨日帰つて来た後に、そう呼ぶ
ように頼まれていた。

「アキラ、無理しなくていいのよ？ 食べられないなり母さんにな
げるんだから」

用意周到に耳栓をしていたミリィは、平氣な様子でアキラに声を
かける。

百口草は体力回復の効能もあるのだ。

「いや、そっちの方がマズイだろ。残しモノとか人にあげちゃいけ
ねえだろ」

その言葉の直後、サラダを口に含むアキラ。
瞬間、アキラの脳裏に電撃が走る。

「ぐうづ……」

口元に手を当てて、水を探すアキラ。

その時にはもう手に水が渡され、直ぐ様に口の中の物を飲み下すアキラ。

ミリィ姉弟による連携プレーのたまものである。

「だから無理するなって言つたのに、もう残しなさいよ」「いや、いい。食べる」

口数少なく返すアキラ。

意地でも残す気はないようだ。

それからはただ黙々と食べ続けるだけ。

ミリィとティムはおしゃべりを楽しんでいたが、アキラは何度も意識を失いかけていた。

地獄の朝食が終わり、村の中。ごく小規模の、ギルドでアキラはミリィと昨日の依頼の完了を報告していた。

簡単な依頼だった筈が死にそうになつたと言つ事で、ミリィはギルドからほんの少しではあるが保険金のような物を貰つていた。

「これなんかどう?」

「いや、竜種退治とか無理だから。位置的にも時間的にも

「いいじゃないのよ、アキラならきっと軽く出来るから」「何その自信!?

俺そんなに強くはないから!」

そして今、二人はギルドの依頼カウンターの前で、コルクボードに張り出されたギルドの依頼書を見つめていた。

何度も繰り返される//リィの無理難題に、ヒツヒツアキラは大声を出した。

「むう、それならこれで譲歩してあげるわ！ これなら場所も近いしいいでしょ！ 依頼レベルもこだし」

満遍の笑みで、アキラに語りかける//リィ。軽くアキラの怒りを受け流している。

//リィが指さす先に書かれた依頼書の題名は、妖しげなものだった。

「【幽霊屋敷の探索】？」

アキラの声が、半ば上ずつている。

「そ、う、よ、時、間、も、距、離、も、大、丈、夫、で、し、ょ、？ こ、れ、な、ら、や、つ、て、も、い、じ、や、ない、」

幽霊と言つ単語に、ひくひくとするアキラの頬。額には、一筋の汗の軌跡が見える。

皿をとくも、//リィはそれを見逃しはしなかつた

「こ、や、な、ら、や、め、て、も、い、わ、よ、？ 幽、靈、怖、い、物、の、ね、え、？」

//リィは、嘲笑つよつとしてアキラに話しかける。

「いや、いい。お姉さん、これ受けます」

「ハイハイ、依頼受諾ね～。でも君、意地つ張りは撲するよ～」

すんすんと歩き、依頼受付まで行くアキラ。

アキラ達の会話を聞いていたのだろう、ギルドの依頼受付のお姉さんはほややんとした表情でアキラをなだめる。

「大丈夫ですっ！」

アキラの瞳にはギラギラと燃える決意の焰が見える。決意と言つよりも、意地と言つた方がいいかも知れないが。

「よーしアキラ。受けると決めたからには冒険準備よー！」

真剣そうな顔でアキラを見つめ、右手でガツツポーズを作りこむ。

「大体準備出来てんじゃん」

「バツカねえ、あそこはある意味ダンジョンよ。色々準備しないと危険なんだからね」

「へえ……」

「あつ、信じてないなあ！ この

傍目から見れば痴話喧嘩にしか見えない状況で、アキラ達はギルドを去つていく。

二人がギルドを出て数時間後。

それまでギルドの片隅で酒を呑んで酔いつぶれていたフードの男が、カウンターまで千鳥足で歩いてくる。

その足取りはおぼつかないながらも、真っ直ぐにカウンターに向かっている。

「これ頼む」

「これは……！ あの一人が危ない」

男は紙切れをお姉さんに見せる。

するとお姉さんは、紙切れを手から離し突如顔を青くする。

その紙切れには、【幽霊屋敷の探索】の依頼レベル上昇の通達がされていた。

ひらひらと落ちるその紙に書かれた上昇後のレベル指定は、B。それは飛竜退治と同レベルの、高難易度依頼であった。

Ep22・吸血鬼（前書き）

今回は文量が少々増量されています (*^-^*)
話としてはそこまで大きな変化は、無きにしも有らず?
誰か、コメティの書き方を教えて下さい。o_rz

Ep22・吸血鬼

それは、ミノリスの村のど真ん中に堂々と居を構えていた。

古びた石造りの外壁、それにまとわり付く何かよく分からぬ草木のつた。澁んだ空氣に、神経を逆なでするような鳥の声。これぞ、幽靈屋敷と呼ぶにふさわしい。

「ここが、吸血鬼の居る屋敷ねえ」
ヴァンパイア

ボソリ、とミリイが呟く。

その着ている服はこれから砂漠でも超えよつかと言つ程の荷物を持つた旅装束。服は基本白とピンクを基調とした物で、その可愛らしさが際立つてゐる。

「ああ。つて嘘！？ 吸血鬼だと？ 聴いてねえぞ！」

一瞬ミリイに見とれていたアキラは、吸血鬼と言つ単語を聞いて驚きの声を上げる。

吸血種は竜種と並び、この世界の生態系の頂点に君臨する種族だ。竜種は魔獸の王者、吸血種は生命の王者と恐れられている。むしろ人間への害と言つ点においては、竜種よりも吸血種の方が脅威であるとされているのだ。

その脅威である吸血種の中でも、人の形を成し、異常な程の魔力を保有する吸血鬼と言つ種属は群を抜いている。

「怖いの？」

驚きの声を上げ冷や汗を流すアキラに、笑いかけるミリィ。
本来ここで踏みどじまるべきなのだが、アキラは無駄にプライド
が高い。

「いや、おもしれえ！ そりでなへりゃな！」

それと共に、一人の男としても、アキラは吸血鬼と言つ存在を自らの目で見てみたいと云つ好奇心もあつたのだらう。目がキラキラしている。

が、ミリィの目にはそれ以外のものも映つていた。

「でも、足振るえひるナビ？」

フンシ、と鼻を鳴らしながら言つて。最近はこそさかサディストと化しつつある。

「ハ、これは武者ぶるこだ……」

取り繕つよつこにして言つアキラ。
顔を見れば、目が泳いでくる。

「へえ？」

首を曲げ、しげしげとアキラを見るミリィ。その眼はまるで、新しいおもちゃを貰ふられた子供のよう。

「な、なんだよ」

数秒間見つめ続けられ、かゆいところがかけない時のよつな顔をして、アキラがミリィに問いかける。

「フフフと笑いつつ、アキラの方を見ていたミリィは屋敷の方へ向
き、一言。

「じゃあ、怖くないなら行けりつよ。アキラは強いでしょ?」

クスリと笑い声を上げながら、ミリィは屋敷の敷地に足を踏み入
れる。

後ろを見ずに、ミリィは小さく声を上げる。

「私に、あの綺麗な黒い焰を見せてよ」

その背中は、どこか嬉しそうに見える。

「は?」

アキラは間抜けな声を上げ、それでも前へと進むのだった。

暗い、暗い部屋の奥底。陽の光の届かぬ場所で、会話をする声が
する。

「ほう、侵入者か……」

「どいか、愉しむよつな声で喋る何者か。

『その通りです、マスター。どいたしますか?』

その顔に答へるのは、闇より黒い光を放つ小わらわ。

「アハハの、この気配は覚えがない訳ではないが、『記憶』は余り無いな。」奴等は、いつも通り追い返せ

『了解しました、マスター』

いつもの会話、いつもの行動。
楽しみとして予定されていたもの。

「今日は、どうでもつかの？」

喜色を含んだその言葉は、一ヒルな笑みと共に放たれた。

ギィイと音がして、古びた洋式の扉が閉まっていく。
ジクンと反応するアキラ。

「つをあねー。」

そのままの少し不安感を感じながらもコトヤは前くと進もうとする。

「まあ、行け行け。色々なお用事なんだうしねえ

その言葉で、アキラは一瞬だけ思考して返答する。

「いや、まずは素敵とか色々やつといった方がいいと思つんだが」

ミリィとアキラの眼前には外見からは考えられないほどに延々と広がる大広間。そこから一直線に進んだ廊下には多くの部屋の入口がある。

そのどこかに、これまでの探索隊の者達が情報を持ちかえることが出来なかつた理由がある筈なのだ。

右手を下あごに乗せるようにして、考えるような所作を取るアキラ。

真剣そうに考えるアキラに向けて、ミリィは軽く一言。

「それじゃお願ひ、でも無理だと思つけどなあ」

その言葉に従い、アキラは最近では殆ど完璧に見えなくなつた黒い霧を周囲に放ち、探索を行つ。だが、それは無意味なものだつた。

「なんだ?

「こにおかしいぞ、何処にでもいる?　いや、どこにも居ないのか?」

アキラの素敵はアキラ自身の感覚を分身に移し、それにより物やその気配を感じると云つ、通常使い魔が居ないのであれば上級魔術に分類される程の高位探索術を使つてゐる。だと言つのに、それすらも妨害するような異常な濃度の魔力がこの屋敷には充满している。アキラは以前リンとサラに、濃度の高い魔力は感知系の魔術には一番有効な妨害方法だと云つ事を聽いていたが、今のアキラの黒い霧にまでそれが及ぶと言う事は考えもしていなかつたようだ。

今回妨害として用いられているのである魔力は、一種類にも十種類にも、何十種類にも感じられる。

「せひ、ソレじや自分の田や畠を頼りにするしかないのよ。探索とかは自分の足を使ってやるの。

依頼書にも探索は出来ないかもしけないって書いてあつたじゃな
い」

首を小さく曲げて、呆れたような顔でニコニコ。

「そつだつたか？ 僕それ見てねえや」

片手を開じて、頭を右手で頭をかくアキラ。

子供のようなその所作に、ニコイは微妙な不安感を感じる。

「アキラってどじが抜けてるわよね。それって今後危ないんじゃない？」

辛辣にけれどもどじが心配そうにそのまま葉にはどじが温かみ
がこもっている。

「そつだなあ、俺冒険初心者だし。でも今回はニコイが居るしそこ
ら辺は大丈夫だろ？」

満遍の笑みを浮かべつつ、アキラはニコイの心配に斜め上の答こたへ
を述べる。

根拠の無い自信、完全に自分の事を信じきったアキラの発言に焦
るニコイ。

「や、そんな事言つたて何も出てこないわよ~」

アキラのこつもの顔からは想像できなこほど子供のよつた無邪

氣な笑みに、後ずさりつつ返答するミコイ。その顔は少し紅潮している。

気が抜けていたと言う事もあつたせいだろ？ ミリィの足がおかれた場所からガコソッ、と音がすると、二人とも間抜けな声を出す。

「「へ？」

足元からの音から数瞬後、二人の足元が大きく口を空ける何かの動物のように開いた。

それは古典的な罠。スイッチ式のそれは、一人の身体を引き摺りこむように一瞬にして完全に開ききる。

「ギヤアアアアアアアア！」

子供のいたずらのような古典的なモノでは有れど、そこは吸血鬼の住む屋敷。

規模は半端なモノではないようだった。

「ヤバイヤババイイイツ」

皿を回しつつ、どうにか下へ向かうGへと抵抗しようと平泳ぎもどきをするアキラ。言つまでもなく無駄である。

一人は勢い良く風を切りながら、暗い穴の底へと墜ちてゆく。

そんな中、アキラは混乱したままの頭を使い、どうにか二人とも無事に戻れる方法を考える。

着地時にクツショーンもどきを作る。

却下、第一何処に落ちるのか解らない。もしかしたら、下に剣山があるかも知れないし、魔術妨害用の術式がある可能性もある。

ミリイを抱いて壁伝いに元の場所へ。

頭上の穴は未だに大きく口を開けているが、もう既に十メートルは落ちてきている。今のアキラには肉体強化の魔術は使えない。壁の幅も大きく開いているため、こちらも却下。

『ゲート
門の魔術で、落ちる直前の場所に転移。

「これだッ。リン、補助頼んだッ」

目を見開き、右手の人差指と中指の指尖に魔力を集めて印を切る。

『ハイ、場所は先程の場所ですね』

アキラの言葉に、顕現しないままのリン^{テレパシー}が念話に近い形でアキラの頭の中に直接声を放つ。

数秒の内に印を切り終わったアキラは、ミリイと自分に自身の魔力で編んだ魔法陣を展開する。

「ミリイ、目え閉じろッ」

「へ？ わ、解ったけど」

アキラの言葉に、ミリイは目を閉じる。

瞬間、魔法陣にアキラの魔力が流れ込み、黒焰が噴き出していく。

ミリイは素直に答えはしたが、片目のみ薄く開けていた。

「発動、転移開始！！」

アキラの発動する黒焰の門に、目を輝かせつつ身を任せたミリイ。

公言こそしないが、ミリイはとてつもない魔術マニアである。ミリイの魔術は独学で、初級の魔術所によるものが多い。基本中の基本の魔術こそ習得しているが、珍しい魔術や属性魔術などと言つモノは彼女は存在こそ知つてはいるものの、見た事はない。

魔術が大好きである彼女にとつて、文献にも記されていない黒い焰を操るアキラ特有の魔術はミリイの心をわしづみにした。

彼女の知らぬ魔術は、彼女の大好物。

性格は余り宜しくないが、それでも美人に目を付けられたアキラは、今後の苦労を解らずに黒焰の門をぐぐりぬけた。

門を抜けると、先程の大きな穴がある筈だった。

そう、筈だった。

「何処だ、ここ?」

気付けば、アキラは全く見覚えの無い広々とした部屋の中に居た。右手の指輪に魔力が吸われ、四等身で半透明のリンが現れる。

『ア、アキラさん! 転移場所が強制変更されました!
相手は最低でも上位精霊に勝る能力を持つていま……す

!』

「 黙れ、異界の精霊」ときが私の前で轟^{さう}るな

慌てふためくリンに、冷ややかな声がかけられる。

その声は冷酷にして辛辣。リンは、その声のした方向から放たれる重圧^{ブレッシャー}に、声を出すことさえもできなくなる。

リンの異変と、背後に感じる凄まじい悪しき気配に、アキラは跳ねるようにして振り返る。

この屋敷で、この状況で、悪しき気配を発していると言つ事実があれば、攻撃の理由には事足りる。

アキラは、威力は劣るが素早く魔術を発動するために無詠唱で魔術を発動する。

「喰らえ、魔炎弾！」
ファイヤ・フレッシュ

振り返るとともに、アキラの右掌から放たれる極小の魔弾。火で出来た魔弾の数は、およそ二十を超えていた。

火炎攻撃系の魔術で基礎中の基礎とされるものなのだが、そこは異常な魔力容量を持つアキラ。温度が桁違いなようで、色が本来のオレンジのような色から青色へと変化している。

至近距離で放たれるその弾丸の連射に対し、避けようとする気配一切ない悪しき気配の主。

気配の主に、魔弾の雨が降り注ぐ。着弾し、鮮やかな青色の火が飛び散つてゆく。

「まだ、まだだ……」

額に大量の冷や汗を流しつつ、攻撃の手を緩めないアキラ。その攻撃は最早弾丸による点の攻撃とは比べ物にならぬ、濃密なる面の攻撃。

張られる弾幕から、逃れる手段はないように思われる。

普通ならば、先程の攻撃で確実に命中して、火傷などの怪我を負い動きが鈍るなどの状況に陥ってもおかしくはない。

それでもアキラは、弾丸の数を百、一二百と増やし続ける。その大きさも、量も、人間一人を殺すには十分過ぎるものだ。

断続する爆音。一方的に、湯水のごとく降り注ぐ火の弾丸、その状況に変化はない。

眼前の状況は、放ち続けた火炎弾の煙のせいで確認できない。

反撃もないが、手ごたえもない。

弾丸の雨は止み、部屋に響くのは虚しい風の音だけ。

「これだけで、終わる訳ねえよな……」

そう、風の音が闇に包まれた部屋に満ちている。攻撃の前には聞こえなかつた風の音が。

一点に集まるように、風の動きが変わってゆく。

「その通りだよ、客人殿。

突然威圧したこちらも悪いが、君もこのように攻撃をしたのだし悪くは思うなよ？」

無数の火炎弾の斉射後、温度の急上昇により生じた煙が風の流れによりかき消えていく。

避けるでも、隠れるでもなく、ただただ真正面から放たれる攻撃を受け続けた。

それは、どんな達人と対峙した時の緊張感よりも鮮明に恐怖を感じさせ、アキラの身から逃げる力を奪い去った。

風と共に集束するのは、多大なる禍々しき魔力。

それは中級の魔術を使う為に集められる魔力ほどまでにかき集められる。

すると、吸血鬼は厳かに呪文を唱えた。

「集いて来たれ風の精、契約せし我が呼びかけに応えよ。
其は束縛のそよ風、其は切断のつむじ風。
彼の者を捕らえ、切り刻め。【**捕縛の刃風**】」

巻き起こる旋風。
切り刻む風の刃。
襲い来る強風に、アキラは苦しみの絶叫を上げる。

「がつ、あああああ！」

その瞬間は数秒。

切り刻む強風が止むと、吸血鬼は話し始める。

「さあ、客人よ。話をしようかの、渡り来た君の話を」

状況は理解不能。

アキラはただ流されるままに、吸血鬼の言葉に耳を貸した。

E p22・吸血鬼（後書き）

亿元以上かおかしな点などあれば、感想かメッセージでEJ報告ください

E 23・影と吸血鬼（前書き）

お久しぶりです。

今回は投稿が遅くなつたため（あんま関係ないけど）分量がいつもより少しちよくなつております。

形としてはバトルかなあ……

では、E 23・影と吸血鬼どうぞお読みくださいこゝへ（――）へ

「話をするためにも、まずはこちらの部屋に来てもらおうかの」

気付けば、アキラは可愛らしい部屋の中に居た。お姫様の寝ていそうなカーテンの付いたベッドに、奥にあるピンクのカーペットに乗せられた無数のデフォルメされた動物のぬいぐるみ。

部屋の中心らしき場所には、場違いな程傷だらけな少年。アキラが風の魔術で拘束されている。

その眼の前には、鮮やかな金色の長髪に陶磁器のように白い肌、その内に二つの翡翠の宝石をたたえた美しい少女の人形が立っていた。

「さあ、一時的にでも決着がついた所で話と洒落込もうかの。なあ、アキラとやら」

アキラを呼ぶとともに、手を向ける人形。

人形の身体はどうやら木で出来ているらしく、一言喋る内にカタカタと言う音が何度も聞こえてくる。その腕には球体関節がはめられていて、身振りをしようとするたびにきりきりと音がする。

人形は直ぐそこに有つたソファにドサリと座り込み、その姿に似合わぬ爺口調でアキラに問う。

「は、何でそんな事……！ 吸血鬼なんかを信用するかよ」

無機質に、無表情に聞く人形の言葉はアキラの心には届かなかつ

たのだろう。

つい先刻切り刻まれた傷だらけの身体を無理やりに動かして、アキラは風の拘束に抗つた。

後ろ手に風の刃で巻き取られた両腕、膝立ちに固定された両足、そしてその全てを薄皮一枚で切り裂かぬよう覆う、とも生物をあやめる為に作りだされたかのような鋭利な拘束の旋風。

「ガア……アア……！」

それからどうにか逃れようと/orして、身体を捻り、切り裂かれた。飛散するアキラの血液。無数の風には容赦などと言つ言葉を知りはない。

耐刃素材であるはずの緋色の外套も、鍛えられ始めたばかりの若き身体も、全てに切り傷を付けてアキラの抵抗を許さない風。

傷つけて苦しめて、拘束するその風に遮られようと、それでも抗うは賢きか愚かしきか。

身体の傷が増える度に、アキラの目に灯る光が弱くなつて行くのが、人形には手に取るようにな解つた。

「ほう、レジスト抵抗するのか。だがそれは硬き衣を持つ鬼をも切り裂く風の刃で編まれた拘束具。ヒトに破れる訳が」

余裕を持つて放たれたヒトの形を模したものの言葉は半ばで、絶大な高音に遮られた。

それは硝子ガラスが叩き割られた時のような、耳障りな高き騒音ノイズ。

頭へと直接響き渡るような高音に、口を閉じた人形。見開かれた、その硝子玉ガラスで形作られた眼球の表面に映るのは、両腕を左右に大きく広げて拘束の風を完全に振り解いたアキラの姿。

「な……！」……！？

意味の無いな疑問の声。

投げかけるでもなく、風が消え音が消えた部屋に、その声は溶けていく。

視線の先、鬼をも縛る風の刃を打ち負かしたアキラ。

アキラは膝立ちのままではいけないと思つたのか、フカフカになりながらも立ちあがる。

もう既に意識を保つ事もギリギリな身体で、それでもなお立ちあがるアキラの放つ氣合いは鬼気迫る様子。

その姿はまさしく、鬼。

死にそこない。そんな言葉の似合いそうな様のアキラの氣合い。弱弱しい筈のアキラは、一步。前に踏み込んだ。

それに合わせるようにして、ズルリ。

人形はソファを足で、後ろへと押し下げた。

「ふ、不可能じゃ……！ 不合理じゃぞ侵入者！ 君は人間、私はそれよりもなお高き靈格を持つ者つ。その靈格の落差を無視する事などつ、そんな事など出来る筈が

」

何故、何故。

そんな言葉が宙を舞い、その末に帰結した結果は、不明。
人形には理解が出来ない。

アキラの持つ氣合いが。

それに氣怖されている自分の現状が。

「……ハアツ……ハアツ……、五月蠅えよ……、轟る……な、よ……
ザゴガ……！」

それはどんな意趣返しか、アキラが発したのは人形が初めに放つ
た嘲りの言葉。

言葉の調子も、立ち位置も違えば、放つた相手も全く違う。

それでも、放たれた言葉に、返す言葉は有りはしない。
思いついては消えていく反論の言の葉。

「な、何で……」

パクパクと口を開閉する人形。

その気配は当初の威圧的なモノとは違い、小さく儚い小動物のよ
うなものへと変化している。

足を引きずり、右手を人形へと伸ばす息も絶え絶えなアキラ。
その気配は明らかにヒトの物ではなく、生命の格が違うものでさ
えも恐怖させるケモノのようなモノへと変貌している。

アキラは、突き出した右手に莫大な魔力を練りこみ、呪文も無し
に言葉を放つ。

「‘燃えろ’

次の瞬間、黒い焰が噴き上がる。

それは容赦なく、無慈悲に。

それは敬愛と、慈悲を込めて。

清廉な人形を焼き尽くし、蹂躪した。

暗き部屋で、ただ一つ輝く水晶球を覗きこむ幼子が一人。

「客人、そうか。二二ニヤの言つておつた魔王の資格も勇者の資質も持たぬ者、か。さて、ここからどう抜け出す?」

覗き込んだ水晶球には、傷だらけで捕まえられた少年。アキラと人形の姿、そしてその周囲の物が上方から映し出されている。

「何をしている無資格者。その程度の拘束、破れなくてどうするのだ」

水晶球の中のアキラは、風の刃に切り刻まれながらも悪あがきをする。

じたばたと暴れれば暴れるほど、その身は傷つき血を噴き出す。

「この程度か? ならば二二ニヤには仕置きが必要か?」

数秒間傷つけられても悪あがきをやめないアキラに、半ば呆れ気味に言葉を吐く何者か。

次の瞬間、響き渡る硝子の割れる音。

「何だと……? 魔力も使わず、腕力でか? そんな事、有り得はない」

呆れながらも水晶球を眺める何者かの目が驚愕に見開かれる。

其れは、魔術の理論を斜めから完全にぶつた切るような理不尽な出来事。

本来、人間はおろか肉体の硬度等の強靭さにおいては軽く四倍はある鬼族の者たちでさえ拘束し続ける中級拘束魔術『捕縛の刃風』フリュ・トウ
アビヨウアンを肉体の力だけで破るなど、それこそ生態系の頂点に君臨する竜種や吸血種の力がなければ不可能なのだ。

それを、アキラはやってのけた。

「なんと言つ……不安因子。イレギュラー

これでは勇者も魔王も関係ない。小奴、靈格そのものが違うではないか」

息を呑む音と共に、何者かは頭痛を堪えるかのようにして、眉間にをもんでいる。

靈格とは、すなわちその生命体、もしくはその種族の持つ概念的地位の事だ。

現実世界において、その頂点に君臨するとされているのは人間やゴリラなどの靈長類。こちらで言うとすれば頂点に【神】と呼ばれる者達その下に最強の二種族。吸血種と竜種がおかれている。そこから下は多くの種がせめぎ合っているため今は省く事とする。

アキラの行つた行動がまぎれもない真実だとするならば、最低でも彼の靈格は最強種に並ぶことが可能となる。

人間にも竜を狩つたり、吸血鬼を死に追いやる者は居る。だがそれは大抵、英雄やら勇者等になりうる才能を持つたモノなど、限定

されてくる。

特殊な千里眼の術を用いて其れを見きることのできるのは今はこの者くらいのものだが、それを持ってしても、アキラにその資質は認められなかつた。

アキラは英雄や勇者と言つた者の伝説として語り継がれるようなきらびやかな結果を生み出す物ではない。
それはそう言つことへとつながるのだ。

強大な力を持ち、その上勇者には成り得ない。

ならば後の選択肢は、大抵負の側面へと流れ込んでいく。

「だが、魔王の資格も持つては居ない、か」

見た所アキラの行動には、言い知れない【悪】を感じさせる気配はなかつた。

術を使ってクッショーンを置いてでは良くなからない。

「ならば自身の田で確かめるべき、か」

そういつと、幼き者は聞き取れぬほどの高速で、呪文を詠唱した。

「長距離移動、隠れ家6番の私室へ」

呟く声の、数秒後。

幼子は漆黒の焰の燃え盛る場所へと、移っていた。

それは何もかも差別しない、平等な海のよつたモノだ。

全てを包み込み、焼き尽くす漆黒の焔。

それが今冒すのは、私にいつもつき従う精霊。影の上位精霊、私が付けた名はリヤン。幾年月を経ても信じあえるよう私が考えた、絆と言う意味の名だ。

彼女は私が吸血鬼となつた時よりの従者なのだ。時を経た精霊は強くなる。だからこそ人形へと憑いてもらい、彼がどのような者なのかを契約により得た感覚同調の術で私に直接彼女自身の考えを教える事になつていた。

だがそれも虚しく、彼女の感覚を通して私に伝わつたのは一つだけ。

ただただ、彼の者の靈格が人間をの持てる次元の物ではないと言つてのこと。

その後、彼女から送られてくる感覚が途切れたことから、彼女の憑いていた人形が最低でも修復不可能な状況に陥つてゐる事が解る。

「リヤン！ 完全同化だ！！」

人形が修復不可能でも、幾百の年月を重ねた最上位の影の精霊である彼女がやられる事などありはしない。

大丈夫。そう、大丈夫だ。

『はい、マスター』

ほら、いつも通りの受け答えだ。

「アキラ、と言つたか。勘違ひしているようだから解らせてやる。」

私がこの屋敷に住まう吸血鬼、キリアだ」

呆然自失としている傷だらけの少年に、睨みを利かせて齧してやる。

私達の魔術は俗に精靈魔術と呼ばれる類のもの。

その中でも俗称で完全同化と呼ばれるこの魔術は、術者の能力を限界以上に引き上げると言う規格外な最上級魔術に分類されるモノだ。

これにより各種能力値が上昇すれば、私の使う千里眼系の魔術も見抜く能力が上昇する。

その代わりに、限界ぎりぎりで意識を保っているだろう彼は意識を失うだろうが、それはいい。

まずは彼の靈格の謎、そしてその精神世界の状況と言つたモノを確かめさせてもらおう。

「契約せし我が名において命ずる、暗き彼の地より来りし者、影の精靈よ。

汝、我が心と共に存れ。

汝、我が身を鎧よろえ。

汝、我が爪牙となれ。

其は、混沌より生まれし光の対極。究極なる陰の意志。

我、汝を欲せん」

一息に紡ぎだす高位呪文。一言口にする度に、私の身体^{カラダ}に、私の精神^{ココロ}に、リヤンが溶け込んで行く。

今でもほんの少しは暗い筈の視界は、吸血鬼の能力の底上げによつて完全に可視可能になる。

身体の周りを、暗い魔力が蠢きだす。其れは一つは鎧のように、一つは牙のように形を成していく。身体全身に魔力が行き渡った時、私は元の姿よりも荒々しい、吸血鬼そのものと言つた様相のモノになる。

私達が完全同化、と呼ぶこの高位魔術。

その名は、

「^{エレメンタル}^{オンブル・アルミニコール}精靈化、【影鎧爪装】」

彼は一瞬私を見て、糸の切れた人形のように崩れ去る。

『まずは精神世界から探しを入れましょう。マスター』
「そうじやな、なれば【夢渡り】」

そう、まずはココロの有り様から、この少年。アキラの事情を探つてみよう。

『』しかも解らぬ部屋の中、数人の少年少女が机に向かい、教団の上に一人の少女と一つの黒い影が立つ。

「キリアーと…」

『リヤンの…』

『「新出魔術教室…」』

ポンッポンッと音を立てて、ハートマークが宙を舞う。

『さあ、マスター。今回作者がなんとなべたりでやつてみたこの企画ですが、マスターとしては、どう思っています?』

「つむ、我の出番が増えて万々歳じゃ」

『わづですか。まあそれは置いといて早速本題に入りましょ、』

「む、やづじやな。今回の講義内容はなんじやつたか?」

『今日は、マスターと私が完全同化と呼ぶ、ハーメンタル精霊化の魔術について、これです』

「ああ、やづじやつたな。それでは精霊化の魔術について、これから抗議を始めるが、皆よいか?」

はーい、と言つ声が各所から上がる。『』の生徒はみな良い子た

ちのようだ。

「精靈化とは、自身の靈体に靈格が一段階上の精靈を溶け込ませ、自身が意志を持ち実体を持つ精靈となる魔術じや」

説明を始めるなり、赤いフレームの眼鏡を付けて黒板に図をかいていくキリア。

その絵は大分、拙い。

「――まで質問のあるものは？ クリス、なんじや」

「えと、何でキリア師匠の絵はそんなに汚ブツ

クリスと呼ばれた青年の言葉が出しきりれる前に、何らかの方法によって彼は氣絶させられた。

皆の頬がぴくぴくと弓をつる。

「――まで質問のあるものは？」

再び質問、今回は拳手をする者は居ない。――の生徒はみな良い子たちのようだ。

「では次じゃ、精靈と同化すると言つ事は、口では簡単に言えても実行するのは生半可なモノではない。意志を持たぬ最下位の精靈ならばまだしも、意志を持つ上位精靈では靈格の低い我々の方が精神を乗っ取られるからじや。

そこで今回の我々には、それが起きなこよう前準備がしてあつた。なんじやと思つ？」

一息に出された言葉と質問。

氣絶している筈のクリス青年が一言。

「……主従、契約」

それだけ言つと、クリス青年は泡を吹いて机に突つ伏した。
今度こそクリス青年は力尽きただろう。

「その通りじゃ、クリス。主もやるべしと思えばどういふではないか。
今回の成績は上げてやるつ。

さあ皆の者、今のクリスの言葉で解つたと思うが、この魔術において術者が精霊と主従契約をする事は絶対となる。この点においては、我とリヤンは百年単位での長い主従の契約期間が有るため難なく条件はクリアしておるのじや。

エレメンタル
精霊化の魔術の概要は解つたかの？この魔術には、まだ応用として部分精霊化、物質精霊化と言つたモノもあるのじやが、今回の授業はここままでじや」

きりーつ、れーい。

ありがとうございましたー。

＼＼＼＼＼＼＼＼

いかがでしたでしょうか、今回は本文が大体真面目な感じなんであとがきでこんな企画をやつてみました。

またやるかも知れませんし、やらないかもしません（適当で済みません

ではでは、またの機会にノシ

E p24・門前（前書き）

お久しぶりです。

ちまちました執筆中、私は色々考えます。

例えば、キャラクターの性格。

例えば、ストーリー上必要ないけどやってみたい事。

あんまり本文と関係ありませんね。

ではE p24・門前

どうぞお読みください。

漆黒の大地、紅蓮の天空。そびえ立つ純白の門。西洋に有る王城の門のようなそれは、美しさよりも先に禍々しさを伝える。その前には、三つの首と蛇のたてがみを持つ巨大な狗。

対するモノは、腰まで伸び鮮やかなウェーブを描く金糸の髪、翡翠色の双眸に、病的なまでに白い皮膚。全てを影の衣に包み隠した小さき少女。

その全ては中空に浮遊している。

それはなんと場違いな光景か、唸る三頭狗^{ケルベロス}に相対するのは、暗き衣を身に纏つた幼子。

「なんなのじや、これは……？」

幼子であるキリアがアキラの精神世界へ侵入しての第一声は、そんな簡素なものだった。

キリアの疑問も正しいもので、精神世界に扉が有るだけなら多くの者に有り得るのだが、ここに居るのは三頭狗。本来ヒトの精神にケモノが巣ぐうなどと言つ事でさえ有り得ない事なのだ。

それもここに居るのは伝承に伝えられるような怪物、その中でも地獄の門番として名高いケルベロス。

異常にも程がある。

「リヤン、分身を作る。アキラの契約している一柱の精靈を捕らえ

て来るのじゃ。この状況の説明をわせる

『了解しました。マスター』

無詠唱で、自分とほぼ同じ姿の分身を作りだすキリア。違いと言えば、ほんの少し身体が透けている程度。

その技巧は、幾百年の年月により本来長い時間のかかる術でさえ数秒で行える程。

身体に似合わぬ知性や魔術の腕前だけでも、彼女が超常の存在であることがうかがえる。

『では、行つて参ります。マスター』

広大な大地と天空を背に、同じ姿の少女が、全く同じ姿の少女に別れの挨拶をしているのだ。

それに、その後ろには三頭狗。

荒い息、口元からチラつく全てを焼き払う黒焰、発せられているのは強大な殺氣。普通の神経をしているのなら、そこに居るだけで気を失うような程のモノだ。

「ああ、行つて來い。けれどリヤン、油断はするなよ？

この感じでは一柱はきっと炎国の姫君じゃ。あの国の秘術は使われると面倒じやからの。一時的にでも魔力の無効化はしておくれやぞ？」

背後の光景などには、我関せずといった調子で、キリアとリヤンはいつも通りの会話を行つ。

その姿はあるで、ほんの少し御使いを頼むようなモノだ。

『了解です、マスター。では魔術無効化系統の術を使いましょう』

マジックキャンセル

そう言つて、リヤンは人間では知覚不可能な程の速度で搜索を開始する。

このペースで行けば、一時間もせずに探し出すだろう。とキリアが思つていると、背後の三頭狗から発せられていた殺氣がより一層強くなる。

ここにヒトが居たのならば、それだけで息が出来なくなるほどのがれきな殺氣が、小さな背中に浴びせられる。

「五月蠅い駄犬じや、犬ならば犬らしく這いつくばっておれ」

その言動も、醸し出す雰囲気も、そこに居る事自体が場違いな。

人は見た目で判断してはならないと言うが、其れは人だけにあてはまるものではないのかもしれない。

キリアの言葉を理解してか、それともただ本能に身を任せてか。三ツ首の獸は歩を進める。

獸の放つ唸り声は一転し、一瞬の静寂の後。
その咆哮は轟いた。

「GYAAA

！」

現状へと終止符を打つために。

『放せ！ 放すのじゃ！ 岳を誰だと思つておるー。』

『精靈界内での最高権力を持つ国、炎国の第五王女ですね。私にとつては誰であるつと構いませんが』

『……なツ！』

飛行する、キリアの姿をした半透明の影精、リヤン。彼女は今、檻に入れた蜥蜴^{トカゲ}と、口論している。

聞こえてくる口論に、二種類田の声が混じる。

『サラ、無駄ですよ。私達は抵抗に失敗したんです。これ以上行動を起こしても、Iの世界の主であるアキラさんへ悪影響を及ぼすだけでしょう。』

Iには一応リヤンとやらの血^{ハム}、吸血鬼さんとの交渉を試みてみましょ^ウ『

彼女が檻に入れて肩に担いでいるのは、焰を纏えぬよ^{ウニテ}に魔力無効化^{ヤンゼル}の魔術をかけられた、本来の姿へと戻ったサラだ。

そして今サラを宥めているリンも、リヤンの操る影で出来たもう一つの檻に閉じ込められてこる。

『リン、お主……！』

田を見開き、何かを察し多様な顔をする檻の中の蜥蜴。その情景は、とてもシユールだ。

『解つたのならば黙つて下れ。私は静かなのが好きなので』

その後、見下すよ^ウうな態度で言ひコヤン。

『貴様！吾にそのよつた態度を取つて良いと思つて

2

『五月蠅いです。精靈界においての地位が何であれ、今は私がこの場の

『貴様は吾が焼き殺す！』

『そりですか、それで良いですから黙つて下さい』

貴様また

延々と続く子供のような口論。リンは何処となく疲れた様子で、息を吐く。

『ニアルアハニニルヒサセヒキリキ』

おおよそ身分の高い者の言葉使いとは言い難いような言葉には耳をかさず、リンは秋の紅葉のように色鮮やかな空を眺めて、目的地へと着く時を心待ちにするのだった。

ふくつと膨れた殺人的なまでに大きなたんこぶ。
それが三つ連なり、しゅうしゅうと音を立てている。

「これは最高の門番であると云ひの神話も、あやしにものじやのう

目をバツ印にした三頭狗は、氣を失つて大地と天空の間に倒れ伏している。

現状を作りだした張本人であるキリアは、三頭狗を一斉すると通り過ぎていく。

歩みを進めるキリアは、白色の門の前で立ち止まる。

「リの門は、奴の……」

純白の門に手を添えて。

放った言葉は、虛空の中に消えていく。

その余韻さえも消えた時、キリアはピクッと身体を振るわせる。

「来たか、リアン」

Ep24・門前（後書き）

今回は余りストーリーに進展はありませんね。

次回は、主人公である暁くんの過去を覗く話になります。

どう言つた過去かは、読んでみてからのお楽しみ。
では、また次回。ノシ

Ep25・小さな城（前書き）

お久しぶりです、間和井です。

最近はPCに向かっていられる時間も短く、余りいい出来とは言えないかもせんが、今回もまた、緋色の騎士は異邦人を、宜しくお願ひします。

燃えるような色の空、奈落の底の如き大地。

丁度その中間地点と言つべき場所に有るのは、巨大すぎると言つても何処からも反論が上がらないような程の大きさの白い門。

その門へと片手を当て、苦い顔をしている少女が一人。

言つまでもなくその少女はアキラの精神世界に侵入したキリアだ。

「まだか、リヤンよ」

純白の大門の方へと手を添えたまま、眉根をよせるキリア。その表情は憂鬱そのもの。

キリアは扉に添えていた方の手を頭へと持つていき、目を閉じて周囲を探る。

数秒の後に両手を広げ、キリアは一言

「連れてきたか、リヤン」

『はいマスター、二柱ともこの檻の中に』

キリアがその美しい金髪をたなびかせて上空を見上げると、少し色の薄くなつたような、キリアと同じ姿のリアンが上空からキリアを見下ろしていた。

『炎国の姫君には魔術無効化もかけておきましたし、もう一柱の世界からいらした方は冷静に話がしたいと言つていました、マスター。』

マジックキャンセル

……マスター?』

浮遊するリヤンは、ゆっくりとキリアと同じ田線まで高度を落とすと報告を始める。

自らの行動の結果手に入れた情報と現状の説明を少し咀慢げにしていたリヤンだが、最後に言葉にした主を呼ぶ言葉に返事がない事をいぶかしむ。

見れば、キリアの表情は未だ険しいもの。

何故かと思いその後ろにたたずむ白色の門を良く見れば、キリアの背後に注意しなければ知覚する事も叶わないほどに希薄な神氣の気配がする。

『マスター、その門はもしや……』

リヤンの背に、おぞましいものが這つていぐ。

檻を握っていた手の力は緩み、瞳は焦りに満ちていた。

『如何したのですか?』

緊迫した二者の間に作られた空氣を壊すように、檻の中に囚われた黒髪の妖精 リンが口を開いた。

『あっ、それは !』

『奴の印じゃな、ぬしの良く知るあのクソ神の印。やはりぬしさ色々と知つてあるようじゅう。』

その内容は、後でゆっくりと話を聞かせてもらひつかの『の

先程までの鬱々としていた表情は何処へやら。

キリアはほんの冗談なのか、それとも本氣で言つてゐるのか解ら

ないような聞き方でリンを質す。

『そ、それは……！』

リヤンが感じていた焦りとはまた別の、どこか困り果てたような表情になるリン。

一応妖精の保革の為に作られたため、弱いながらも魔術無効化系の術が組み込まれた檻の中に居るにもかかわらず、自由に言葉を口にしていることから彼女の靈格の高さがうかがえるのだが、そんな事は関係ないとばかりにリンは焦りに焦っている。

具体的には、独り言を言つてゐるのに噛むなんていうことが起ころぐらいには焦つている。

『まあ良い。今はこの門の向こうに有ると書つ、宿主の心象風景の方が先じゃの』

どもつてゐるリンをしつけに、キリアは淡々と話しを進める。
その姿に、先程の焦りは微塵もない。

『さあ、鍵歌を。奴から聞いてるのであるつ。我が城へ侵入した分の対価だと思えば、このガキの深層心理を見せるなど安いものだと思うがの』

言葉と共に、キリアはその身に秘められた魔力を放出する。

リンにとつて、それは全身に打ちつける濁流のように感じられるほどに強大な威力を持つていた。

感覚としては、下級神の放つ神氣にも似た圧迫感が、リンの全身にのしかかる。

『あ……ぐう……。』

解りました。で…すが、対価として、見合わなければ…相応の、モ…ノを、頂きま…すよ』

潰されるような感覚に耐えながら、リンはキリアに返答をする。

『では、始めよ』

その一言と共に、リンに与えられた重圧は完全に消え去った。ハアハアと言つ息切れ。神域に片足を突っ込んだような強大な重圧に耐える、その対価として奪われた体力が徐々にだが回復していく。

これもまた、キリアからの対価としてのモノなのだろうか。不自然なまでに回復が早い。

リンは身体の回復を確かめて、厳かに唇を開く。

『いにしえの、父と母の末子よ

』

空虚な天空と大地にそびえ立つ白門から、扉の軋む音が、響き渡つた。

リンの口から発せられていた唄が止むと、古木の軋むような音と共に、純白の大門はその口を大きく開けた。扉が開き、目に入つたのは公園だ。

ぱつかりと大きく口を開けた空間の先に、今いる広大な大地と天空と比べれば粗末なモノにしか見えない、小さな小さな公園。

そこに、少年は居た。^{アキラ}

否、少年と言ひにはまだ幼い。その子供は年で言えば5、6歳の未だ小学校にも通つていないような出で立ちだ。

アキラはその公園の砂場で、一人砂遊びをしていた。
その姿は孤独なモノ。

キリアは言ひ。

『これは、ただの記憶じやの』

これはただの記憶の断片。キリアが求めるのはもつと奥深く、深層に根づいた魂の記録。

それ故に、キリアは落胆したよつて言葉を漏らした。

つまらない、と。

心に思つた言葉をそのままに。

そう思つたのもつかの間、キリアはその現代日本の日常風景をくり抜いたような景色の中で、息を呑むことになる。

「ねえ、おねえちゃん。あそぼ

一人で砂遊びをしていた幼いアキラが、キリア達の方を向いたかと思うと、話しかけてきたのだ。

キリアにもリンにもこの状況は予想外であつたらしく、これでも

かと叫び、手を広げて驚きを表現している。

それもそのはず、この世界はアキラの中に有る記憶で構成されたモノであるはずなのだ。

経験の集合体であるはずの記憶の中のアキラが、独自の行動を起こすだけでも驚きであるのに、その上認識阻害の魔術を使って靈格の高い生物でしか確認できない状態のキリアに話しかけたのだ。それは確実に、常識という枠組みを逸脱している。

「どうしたの？　ここにいるのは、あなたがいるよ？」

一回目の言葉に反応しない事を怪しく思ったのか、アキラは不安そうな顔をして質問と勧誘を投げかける。

向けられた幼い表情にキリアは、慌ててアキラに返事をする。

「あ、そうじゃの。遊びつかの」

突然の言葉に、答えた言葉は了解を示すものだった。
人形だと思われている櫻の中のサラとリンは、ほんの少し恨みのこもった視線をキリアに当てる。

視線の痛さを隠すよつこじて、キリアは一つの櫻をアキラに渡す。すると

「やつたあ。それじゃあな、おひさまいりこつよ」

アキラの顔が笑顔になる。

その瞬間、世界に歪みが走つたかと思うと。

「……！」

公園のだったはずの極小の空間は、歐米圏の古城の王座の間の如
わきひやかな空間になり替わった。

「なんじゃとー。」

先程の驚愕などなかつた」とのよひし、驚愕を更なる驚愕で上塗
りがされていく。

「す」こでしょ？ おねえちやん

幼いアキラの口角が上がり、三日月の如き笑みを浮かべる。
その表情はまるで蛇の如きおぞましさを、キリアに持たせるのだ
つた。

Ep25・小さな城（後書き）

どうだつたでしょうか。
感想、意見など、いただけたら幸いです。
では、また次回。ノシ

A E P N ; 『渴望の女』（前書き）

生きてこました、私めは生きておつました。
細々とですが書き続ける事（数週間？憶えてないや、H A H A
H A

なんかもう記憶もあやふやだけれども、それでも完結させたい、
とかなんかぼやきながら生きてきました。

あの方々に忘れて去らせてもらうだらう今、そんでもって基本自堕
落な作者のお送りするこの趣味をじつが。

鮮血の如き色をしていた空には、漆黒の帳が下りた。

私は今、白い小袖に真っ赤な絆袴を着た、見ただけでそつと解る
ような巫女姿だ。

秋だと言うのに、肌にねつとりと絡みつくような嫌な空氣。
町の中にある、人気の無い四つ辻の中央。

そこで私 真夕美は粘りつく汗をかいていた。

理由は一つ。

目前に転がる一つの車輪のよつた姿をした妖怪の所為だ。

妖怪の名は片輪車かたわぐるま。木で出来た一つだけの車輪にオッサンの顔、
そしてその周囲に炎を纏つた人に害なす妖怪だ。とあの神様を名乗
る男の人は言つていた。

私はコレがどういうモノなのかは解らない。けれど、コレが良い
奴で無い事は確かだ。コレは確実に暁の身体のどこかを喰らつてい
たのだから。

頭上を見上げれば、空に舞う暁の能力の片鱗アキラ
ちから。真黒な焰が、夜空
の月影に熔けていく。

それは、先程苦労して命を刈り取つた妖怪が、あの時アキラの身
体を喰らつた証。

これが発見できたのは、ここ数週間の間、妖怪退治をしていた中
でも初めてだ。

最初こそ訳も解らないまま、妖怪を逃がしてしまつたりもしたが、
今では少々手慣れてきてしまつていて。

『なあ、真夕美。大丈夫か?』

『そうそう、気持ち悪くない?』

「大丈夫だよ。鬼火、狐火。私はもう大丈夫」

大丈夫。その言葉は**仮面**^{ペルソナ}。本当にイタイ時、それを偽る仮面の魔法。彼はいつもそうやって、誰にも痛みを明かさなかつた。だから私も真似をする。疼き続けるこのキズを、偽り誤魔化し心の底に押し込めて、忘れない為に。

私は絶対忘れない。この痛みを感じる度に、私は彼を思い出して仮面の魔法を使うのだから。

見上げていた首を下に向け、視線を自らの手に下ろす。深く仮面をかぶるのを、彼らに気取られないために。

「大丈夫だよ」

フワフワと浮かぶ一つの火の玉に、私は笑いかける。

どんなにこの手が汚れようとも、彼をこの世に引き戻せるならそれでいい。

今は、そう思える。

最初は流されるままに妖怪と鬪わせられて、そしてギリギリの所で打ち勝つことが出来た。自分が生きている事が不思議な程ギリギリの状況で。

妖怪との戦いにおいて、勝つとは命を奪うと言つ事と同義。

その感触は、とても気持ちの悪いものだった。

どんな異形のものでも、命の価値は等しいと思つ。

初めは、命を奪うこの行為が気持ち悪かった。

何度も手を洗つても、消える事の無い確かな感触が嫌だつた。

寝ても覚めても奪つた命からの怨嗟の叫びが、小さな胸を痛めさせた。

けれど、それも今では感じない。

彼の笑顔を思い出した瞬間に、ぷつりと消え去つたのだ。

今までの人生で、こんな感覚はなかつた。
暁に対しても、ここまで感情はなかつた。

見つけてしまった感情は、耐える事も出来ない程に高まっていく。
叫び出してしまいたいほどに激しい想いを飲み下す。
始まりは、いつだつたか。

「それでもやつぱり、私は彼を想つていたのかな」

それは忌まわしく、麗しき過去の記憶。

私の中の罪であり、最も大きな喜びの記憶。

犯した罪は、重く深く。

与えられた幸せは、何よりも嬉しかつた。

胸に手を当て、息を吐く。

汗はもう、乾ききつた。胸を満たし周囲を吹き抜ける風が心地良い。

これで、大丈夫。

もう一度大きく息を吐いて、私の顔に喜色が満ちる。

見計らつたかのように良いタイミングで、私に声をかける者がいた。

『真夕美さん。お疲れでしょうが、悪い知らせです』

喜色に満ちた男の声、和ぎる神だ。

これは自らの内のチカラ 彼は《氣》^きと呼んでいた に乗せて、言葉を任意の相手に届ける術だと言っていた。最近、私も出来るようになった。

彼はいつも飄々としていて何を考えているのかが解らない。言っている事は真実なのだが、いつも何かを隠している様でどこか、怖い。

今回も悪い知らせと言いながら、確実に彼は笑っている。怒りたくもあるが、それをして悪い情報が私の元に届く事に変わりはない。怒るのは、全てが終わった後だ。

顔だけは笑って、そして心中では彼を呪いながら、彼と同じように戸の葉を飛ばす。

『そうですか~。悪い知らせってなんですか? 場合によつては、ねじ切れますよ』

心の中の箭が、少々私怨が滲み出てしまった。失敗。作られていた拳に、ふよふよと浮いていた二つの火の玉がビクリと反応する。

『ね、ねじ切るつて何をだ?』『し、知らないよ。けどそれは聞いたやいけない気がするよ』

その通りだよ狐火、聞いたやいけないよ。

鬼火は好奇心が旺盛なのかな。けどそれはいつか自分の首を絞める結果になるとと思つ。

『はは、真夕美さん。私に敵意を向けるのは良いんですけど、きちんと背後には気を付けた方がいいですよ?』

和ぎる神の一言を聞き終わる直前、背後から大きな妖氣のようないいモノが沸き上がつた。

それと共に、乾いた筈の汗が再び私の身体から流れ出る。

生き物らしい気配と言つより、妖怪のそれに近い。

妖怪は滅した筈。それなら何?

それは私がそちらを振り返る直前に、人間のモノとはとは思えない、けれども確かにヒトのモノである言葉を発した。

「女、お前は能力者か?」

遙かな昔に聞き覚えがあるよつた、うつすらとした膜におおわれたような女性の声。

それは心の深淵に鋭利な牙で刻み込むようにして記録された、太古の発音なのではないだろうか。

振り向いた先に立つ一人の少女に、私はただただ恐怖を感じた。

一言で表すのならば、彼女の姿は『人形のように固められた膨大な恐怖』とでも言おうか。

「」の目に映るそれは、身体を硬直させるほどの圧力を持って私は話しかけた。

「能力者だろう？　アイツの力の残滓を感じるだ」

威圧的な、視線に言葉。それに答えようにも鳴らさざきそうにな
い。

「……アツ、」

聞こえてくるのは、つぶれた音の片鱗のみ。必死に口を開閉させる私を彼女はつまらなさそうに見ている。

「お前は小さいな、そこに居るだけで潰れかけになるとは」

心底つまらなそうな、王者の視線。

生きとし生ける者を見下すようなその視線は、次の瞬間には私ではなく、私の向こうに向きを変えていた。

その眼は明瞭な憎悪と殺意を持つて、上方へと向けられている。軋みを上げる歯。血走った眼が、その全てで持つて感情を表現している。

「だがお前は違うよな？　クソ神様……！」

その想いを込めた言葉だけで、私の意識は飛びそうだ。

物理的なモノは何もないのに、全身にかかる重圧はかなりのモノ。
一度落ち着いた筈の発汗が繰り返される。匂い、大丈夫かなあ。

『お久しぶりですね、吸血姫さん?』

怖気おのけのするような猫なで声で、背後の異物は嘔いだす。

間の私はどうすればいいのか、傍観者と言えるほど楽な位置には居ないし仲介役なんかはもつての外。

辛いこの状況に耐え続けるのは嫌だ。いつその事意識を手放すのが楽なのだろう。

と言づか、もづ、無理。

手放した意識は、白濁色の海の中に漫かるよつて、ゆつくじゆつくりと溶けていく。

平穏と安寧を求めて。

前話で過去話になるみたいなこと書いていた気がします。その話はもうチョイ後にしなければならなくなつたな予感が……。onz

またこれから時間の許す間は執筆作業を行おうとは思つのですが、リアルで色々大変、なんて言つてられませんよね。
被災地の方々はもっと大変なんでしょうし……

しあわせつて何なんでしょうか

なんてね、思春期だからでしょうか。色々可笑しな思考回路をしていますが、読んで下さった方ありがとうございました。
ではまたの機会に。ノシ

古びた洋館の、古びた門の前。

ミリィはそこで寝かされていた。安らかな寝息を立てて、毛布の上からロープで固く縛られて、俗に言つ芋虫状態なミリィ。なぜこんな状況に陥っているのかと言えば、原因は吸血鬼キリアのせいである、としか言いようがない。アキラを連れてB級の依頼を受けたは良いが、侵入して早々に落とし穴と言つ典型的で古典的な罠に引っ掛けたかと思うと、アキラの転移魔術ゲートで飛ばされ、その後何の気遣いかキリアの使い魔らしき木のゴーレムが毛布とロープを巻いていったのだ。

だがどんなに毛布に包まろうとも、外に投げ出されたままでは寒いらしくミリィはクシュンとくしゃみをした。

それと同時に、ミリィは苦しそうに声を上げる。

「うーん、寒いい

彼女は寝起きが悪いらしく、現状を把握できていなつた。目もぼんやりとしている。

芋虫状態のまま、「ロロロ」と道のど真ん中を転がっている。幸いここは幽霊屋敷の前の道であるため、一通りは少なく邪魔にはなっていない（それでも一日に数人は人が通るので、後日幽霊屋敷に悪い（？）噂が増えたのはまた違つお話）。

寝ぼけたまま、寒さに耐えかねたのかミリィは火属性の魔力を練り始めた。

使われる魔力は微量、それでも巻きに巻かれた今の状態で火属性の魔力を解放すれば、

「発火、……^{あつ}熱ううううい！」

丸焼きと化すのも当然と言つモノである。

グルグル巻きの状態で発火の魔術を使つたせいで、数秒をかけて全身に回つた火は強くはないものの、やはり熱い。
未だ芋虫状態のまま全身に火が付いてしまい、必死に鎮火しようと転げ回るミリィ。

とてもシユールな光景。

「熱い熱い熱い、あつつううういいい！」

近隣に民家がない事が唯一の救いだろうか。などと考える余裕もない様子のミリィ、やつと火が消えた時にはミリィの息は切れ切るだ。

その上再び屋敷の方から足音のようなモノが聞こえてきた。
音が近づいている事も解らないミリィ。彼女の寝起きの悪さは相当なようだ。もしかしたら低血圧とかそう言つのなのだろうか。

「え？ 何、何すんの？」

気が付けば、また担ぎ上げられて運ばれている。

ロープは一応焼け切れているが、抵抗するだけの力が出ない。魔力の方は十分に有るが、見た所担ぎ上げているのはゴーレム。それも用意周到な事に対魔力用の障壁なんかつけられている。これでは今のミリィには手も足も出ない。

だからこそ、抱き上げられる瞬間に声を上げて術師に応えてもらおうと思つたのだが、それも意味はなさそうだ。ゴーレムは無駄の無い動きでミリィを運び続けている。

きっと自立稼働が出来るように一つの命令をこなすよう作ったのだろう。

それにしても強固に出来ているが、これも術者の力が強力である証明になる。幽霊屋敷の吸血鬼は人形遣いだいう噂もあるし、その裏付けが出来ただけか。

「はあ～……、痛くはしないでよ?」

洋館の中はまさしく、城と言つに相応しい。
連れて行かれるとしたら城主の元か、それとも……。

「なんかアキラがやらかしたみたいだけど、大丈夫かなあ」

今はただ、流されるままに。

安全かは分からぬが、この人形の向かう終点は分かりきつてい
るのだから。

焼け跡、斬痕、そこかしこに大量にこびりついた血糊。

そして氣だるい自身の身体に、アキラは違和感を覚えた。

「気持ちワリイ」

アキラは頭を押さえ、ぎしがしと悲鳴を上げる身体を無理やり起こす。

起きたばかりで明暗を繰り返す視界も、大分慣れてきただろうか。

見れば、隣に幼女が寝てる。

「アハ、これ夢だ」

全力全開、目の前の状況から戦略的撤退を開始しよう。
引きつる顔をそのままに、アキラは身体をうつぶせにして匍匐^{ほふく}前進。

見覚えがあるような気もするが、きっと氣のせいだ。

ぶつぶつと呟きながら扉を田指すアキラ。転移魔術を使わないあたり、大分混乱しているらしい。

ズリズリ、ズリズリと進むアキラ。その姿はなんとも滑稽だ。
ズリズリ、ズリズリ。その音に紛れて近づく足音がするが、それにアキラは気付かない。

ズリズリ、ズリズリ。コッコッコッ。

もうすぐアキラが扉に着いつと叫びその瞬間、素晴らしい勢いで扉がアキラの顔面に激突した。

「アキラーー 無事！？」

顔がメロリとくじんだアキラに気付かず、そのまま頭、背中、や踏み進んでいく//コイ。故意では無いらしい。
奇跡的な触覚をしている。

「なんか動きづらこ床……」

愚痴りつつ見えたそれから少しひと降つる//コイ。眼はあらぬ方向を向いている。

くこんでいた顔も元に戻り、口を開くアキラ。

「//コイ、俺やらかしたかも」

怒りとかそういう言つたモノはない。

//コイはひとまず安心したらしく、深く息を吐く。

「なにしたのよ?」

ジト目で俺を見る//コイ。

それに対して俺は元いた場所を指で示す。まだ顔が痛い。

「俺、起きる前の記憶が曖昧なんすナビ……」

どうしよう。

そんな思いを込めて//コイの方を見上げたのだ。

すると、彼女は石化していた。

あんぐつと口を開けて、石になつたかのように固まつてこたのだ。

「やっぱ、俺がいけないのか?」

アキラの一言に、答える者は居なかつた。

E 226・目覚めて（後書き）

ギャグ？

なんだらうか、この感覚。

やりたい放題にやつた、後悔はしていない

事にしよう。うふ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9938m/>

緋色の騎士は異邦人

2011年3月24日23時27分発行